松山市文化財調査報告書 156

五　楽　遺　跡

－２次調査－

２０１２

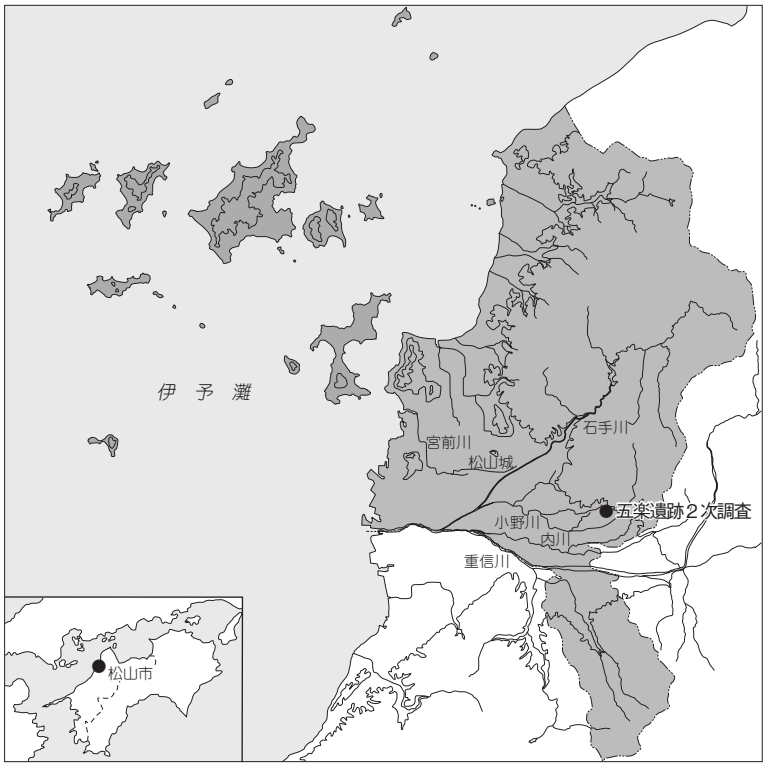
松山市教育委員会

財団法人松山市文化･スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

五楽（ごうらく）遺跡

－２次調査－



２０１２

松山市教育委員会
財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序　　言

本書は、松山平野東部に所在する小野地区で実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書です。松山市小野地区は小野川と堀越川とによって形成された扇状地上に立地し、調査地は地区東部の標高72mに位置しています。

今回報告します五楽遺跡２次調査では、弥生時代から近世までの集落関連遺構や遺物を発見しました。弥生時代では前期末から中期初頭の溝や土坑が検出され、なかでも22基を数える土坑からは数多くの土器や石器が出土しました。これらの遺構や遺物は、小野地区における弥生前期集落の広がりや様相を知ることができる良好な資料です。

また、古墳時代では竪穴住居や掘立柱建物のほか多数の溝や土坑を発見しました。このうち掘立柱建物は15棟が見つかり、これらは７世紀第１四半期以降に構築された建物群であることがわかりました。近年の調査・研究の結果、古墳時代後期以降、遺跡周辺は地区北部の丘陵上に分布する窯址から久米地区などへ須恵器を運搬・供給するための中継地あるいは集積地であったと考えられています。今回見つかった建物群は須恵器供給に関連する施設の可能性があり、古墳期における小野地区の集落様相や構造を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

このような調査成果を得られましたのも、地権者並びに関係各位の方々のご理解とご協力のたまものであり、深く感謝申し上げます。今後は、本書が埋蔵文化財研究の一助となり、さらには埋蔵文化財行政や教育普及活動に寄与できますれば幸いに存じます。

平成24年３月

松山市教育長
山内　　泰

例　　言

1．本書は松山市平井町において、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（現　財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター）が1999（平成11）年４月から７月までの間に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

2．本書掲載の遺構は、呼称名を略号化して記述した。
竪穴住居：竪穴、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP、土器溜まり：SX、倒木址：倒木

3．本書表示の標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

4．本書掲載の遺構図や実測図は、縮分値をスケール下に記した。

5．本書掲載の遺構図作成は相原秀仁が担当し、遺物の実測は平岡直美、山下満佐子、西本三枝、髙尾久子、宮内真弓、山之内聖子、吉岡智美が行った。

6．本書掲載の遺構図や遺物図のトレース・版下作成は相原の指示のもと、平岡、山下、西本、木西嘉子が行った。

7．調査での遺構写真の撮影は相原と大西朋子が行い、遺物の撮影・写真図版の作成は大西が担当した。

8．本書の執筆は相原が担当し、編集は宮内慎一が行った。なお、浄書及び編集は山下、平岡、西本、木西、中村　紫の協力を得た。

9．調査中は、現地にて田﨑博之・松原弘宣（愛媛大学）両先生方に調査方法や出土遺物に関しての指導を頂いた。記して感謝申し上げます。

10. 本書に関わる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに…… 1
第１節　調査に至る経緯
第２節　調査・刊行組織
第３節　立地・環境…… 2

第Ⅱ章　調査の概要…… 7
第１節　調査の経緯
第２節　層　位
第３節　遺構と遺物…… 15

第Ⅲ章　調査の成果と課題…… 89

挿図目次

第Ⅰ章　はじめに
第１図　周辺遺跡分布図（縮尺１/25,000）…… 5

第Ⅱ章　調査の概要
第２図　調査地測量図（縮尺１/1,000）…… 9
第３図　１区遺構配置図（縮尺１/300）…… 10
第４図　２区遺構配置図（縮尺１/300）…… 11
第５図　１区西壁土層図（縮尺１/50）…… 12
第６図　１区南壁土層図（縮尺１/50）…… 13
第７図　２区西壁・南壁土層図（縮尺１/50）…… 14
第８図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/50、１/４）…… 15
第９図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）…… 16
第10図　ＳＫ24測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）…… 17
第11図　ＳＫ28測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）…… 19
第12図　ＳＫ21測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４、１/８）
第13図　ＳＫ33測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）…… 20
第14図　ＳＫ６・15・27測量図（縮尺１/30）…… 21
第15図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４、１/３）…… 22
第16図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）…… 23
第17図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）…… 24
第18図　ＳＫ７測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）……25
第19図　ＳＫ11測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）……26
第20図　ＳＫ29測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）……27

第21図　ＳＫ31測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）……27
第22図　ＳＫ14測量図（縮尺１/30）……28
第23図　ＳＫ26・30測量図（縮尺１/30）……29
第24図　ＳＫ23測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４、２/３）……30
第25図　ＳＫ34測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）……31
第26図　ＳＫ20・32測量図（縮尺１/30）……32
第27図　ＳＫ18測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４）……33
第28図　ＳＸ１～４出土遺物実測図（縮尺１/４）……34
第29図　ＳＢ１測量図（縮尺１/50）……35
第30図　ＳＢ２測量図（縮尺１/50）……36
第31図　ＳＢ３測量図（縮尺１/50）……37
第32図　ＳＢ３カマド測量図・ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺１/20、１/３）……38
第33図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/４、１/３）……40
第34図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/３）……41
第35図　掘立８測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/３）……42
第36図　掘立11測量図（縮尺１/60）……43
第37図　掘立11出土遺物実測図（縮尺１/４、１/３、２/３）……44
第38図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/４）……45
第39図　掘立13測量図（縮尺１/60）……46
第40図　掘立13出土遺物実測図（縮尺１/４、１/３、２/３）……47
第41図　掘立14測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/４、１/３）……48
第42図　掘立10測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/４、１/３）……49
第43図　掘立４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60、１/４）……50
第44図　掘立５測量図（縮尺１/60）……51
第45図　掘立６測量図（縮尺１/60）……52
第46図　掘立７測量図（縮尺１/60）……53
第47図　掘立９測量図（縮尺１/60）……54
第48図　掘立12測量図（縮尺１/60）
第49図　掘立15測量図（縮尺１/60）……55
第50図　ＳＤ３～５測量図（縮尺１/100）……57
第51図　ＳＤ６・７測量図（縮尺１/100）……58
第52図　ＳＤ８～15測量図（縮尺１/100）……61
第53図　ＳＤ３・４・７・12出土遺物実測図（縮尺１/４、１/３）……62
第54図　ＳＫ17測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/４、１/３）……63
第55図　ＳＫ25測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30、１/８）……64
第56図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１/４、１/３）……66
第57図　第Ⅴ層出土遺物実測図(１)（縮尺１/４）……67
第58図　第Ⅴ層出土遺物実測図(２)（縮尺１/４）……68
第59図　第Ⅴ層出土遺物実測図(３)（縮尺１/３）……70

第60図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺１/３）……71
第61図　第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺１/３）
第62図　地点不明出土遺物実測図（縮尺１/４、１/３）……72

表目次

第Ⅱ章　調査の概要

表１　検出遺構一覧……８
表２　竪穴住居一覧……73
表３　掘立柱建物一覧
表４　溝一覧
表５　土坑一覧……74
表６　柱穴一覧
表７　ＳＤ２出土遺物観察表（土製品）……80
表８　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）
表９　ＳＫ24出土遺物観察表（土製品）
表10　ＳＫ28出土遺物観察表（土製品）
表11　ＳＫ21出土遺物観察表（土製品）
表12　ＳＫ21出土遺物観察表（石製品）
表13　ＳＫ33出土遺物観察表（土製品）
表14　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）
表15　ＳＫ１出土遺物観察表（石製品）……81
表16　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）
表17　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）
表18　ＳＫ７出土遺物観察表（土製品）
表19　ＳＫ11出土遺物観察表（土製品）
表20　ＳＫ29出土遺物観察表（土製品）
表21　ＳＫ31出土遺物観察表（土製品）
表22　ＳＫ23出土遺物観察表（土製品）
表23　ＳＫ23出土遺物観察表（石製品）
表24　ＳＫ34出土遺物観察表（土製品）……82
表25　ＳＫ18出土遺物観察表（土製品）
表26　ＳＸ出土遺物観察表（土製品）
表27　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）
表28　掘立２出土遺物観察表（土製品）
表29　掘立３出土遺物観察表（土製品）
表30　掘立８出土遺物観察表（土製品）……83
表31　掘立11出土遺物観察表（土製品）

表32　掘立11出土遺物観察表（金属製品）…… 83
表33　掘立１出土遺物観察表（土製品）
表34　掘立13出土遺物観察表（土製品）
表35　掘立13出土遺物観察表（石製品）
表36　掘立14出土遺物観察表（土製品）
表37　掘立10出土遺物観察表（土製品）…… 84
表38　掘立４出土遺物観察表（土製品）
表39　ＳＤ出土遺物観察表（土製品）
表40　ＳＫ17出土遺物観察表（土製品）
表41　ＳＫ25出土遺物観察表（土製品）
表42　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表43　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）…… 85
表44　第Ⅴ層出土遺物観察表（石製品）…… 86
表45　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）…… 87
表46　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）
表47　地点不明出土遺物観察表（土製品）
表48　地点不明出土遺物観察表（石製品）…… 88

写真図版目次

写真図版１　１．調査地全景（北より）　２．調査地の現況（南西より）
写真図版２　１．１区完掘状況（北東より）
写真図版３　１．２区完掘状況（南西より）
写真図版４　１．１区南壁土層（北より）　２．ＳＫ５検出状況（南より）
　３．ＳＫ24検出状況（北より）
写真図版５　１．ＳＫ21検出状況（南より）　２．ＳＫ11検出状況（南東より）
　３．ＳＫ23検出状況（東より）
写真図版６　１．ＳＢ３検出状況（西より）　２．ＳＢ３カマド検出状況（南より）
　３．掘立13検出状況（北東より）
写真図版７　１．掘立13　ＳＰ⑥（南より）　２．掘立14検出状況（北東より）
　３．掘立14　ＳＰ①（西より）
写真図版８　１．ＳＤ４断面（東より）　２．ＳＫ25検出状況（南より）
　３．現地説明会風景（西より）
写真図版９　１．出土遺物〔ＳＤ２、ＳＫ24、ＳＫ21、ＳＫ１、ＳＫ29、ＳＫ23〕
写真図版10　１．出土遺物〔ＳＸ１、ＳＸ２、ＳＢ３、掘立３、掘立13、ＳＫ25〕
写真図版11　１．出土遺物〔柱穴、第Ⅴ層①〕
写真図版12　１．出土遺物〔第Ⅴ層②、第Ⅳ層、地点不明〕

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

1999（平成11）年１月20日、社会福祉法人こどものくに保育園理事長 寺田完氏より松山市平井町844番地外５筆における知的障害者総合施設建設に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.90　権現山古墳群』内にあたる。申請地周辺では平成８・９年度に松山市道『小野３号線』や『小野７号線』の建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代から近世までの集落関連遺構や遺物が数多く発見されている。なお、申請地に隣接する五楽遺跡１次調査地や古市遺跡２次調査地からは、弥生時代前期の土坑群や古墳時代後期の竪穴住居のほか、古墳時代から古代の掘立柱建物などが確認されている。これらのことから、申請地周辺には弥生時代や古墳時代を中心とした集落の存在が予想されたため、寺田氏と文化教育課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。試掘調査は1999（平成11）年１月27・28日の２日間にわたり実施され、溝や土坑、柱穴を検出したほか、弥生土器や須恵器、土師器、石器などが多数出土した。この結果を受け、寺田氏と文化教育課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者は協議を重ね、総合施設建設に伴い破壊される遺構や遺物に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、埋文センターが主体となり、文化教育課の指導・協力のもと、1999（平成11）年４月８日より開始した。

第２節　調査･刊行組織

所 在 地：松山市平井町844番地外５筆
調査面積：4,212㎡
調査期間：1999（平成11）年４月８日～同年７月30日
調 査 名：五楽遺跡２次調査
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：埋蔵文化財センター調査員　相原秀仁・宮内慎一・大西朋子（写真担当）

〔調査組織〕

松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
事務局	局長	團上　和敬
	次長	森脇　將
	次長	赤星　忠男
文化教育課	課長	松平　泰定

(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	河口　雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口　雄三
	次長	田所　延行
	調査係長	田城　武志
	担当	相原　秀仁・宮内　慎一

〔刊行組織〕

松山市教育委員会	教育長	山内　泰
事務局	局長	嶋　啓吾
	企画官	渡部　満重
	企画官	青木　茂
文化財課	課長	駒澤　正憲
	主幹	森　正経
	主査	竹内　明男
	主査	楠　寛輝
(財)松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	一色　哲昭
	事務局長	松澤　史夫
	事務局次長	近藤　正
施設利用推進部	部長	中越　敏彰
埋蔵文化財センター	所長	田城　武志
	担当	宮内　慎一
	担当	大西　朋子(写真担当)

第３節　立地・環境

（１）立　地

松山平野は東側を高縄山系に囲まれ、西側は伊予灘に向けて開けた沖積平野である。平野内には高縄山系に水源を発し、平野北東部から南西部に流れる石手川と四国山脈東三方ケ森に水源をもち、西流する重信川の２大河川がある。この二つの河川は、いくつかの支流河川を集めながら海岸線から約４kmの地点で合流し、伊予灘へと注いでいる。なお、平野は北方の石手川扇状地や、その西方に広がる氾濫源、南方の重信川扇状地、及びその中流域に広がる大規模な氾濫源、さらに両河川の中間を流れる石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などで形成されている。

調査地が所在する小野地区は、小野谷に水源を発する小野川によって形成された扇状地の扇央部分に立地している。

（２）歴史的環境（第１図）

調査地が所在する松山市小野地区には、小野川や堀越川をはじめ悪社川、内川などの河川が数多く存在する。近年、地区内では松山市道建設工事に伴う発掘調査（上苅屋遺跡３・４次調査、下苅屋遺跡２・３次調査、古市遺跡１・２次調査、五楽遺跡１・３次調査、平井遺跡２～９次調査、水泥遺跡１～７次調査、高井遺跡１次調査、南高井遺跡２・３次調査、南梅本上方遺跡１・２次調査、南梅本長広遺跡１・２次調査）が実施され、縄文時代から近世に至る集落関連遺構や遺物が多数発見されている。ここでは、小野地区に所在する遺跡を中心に旧石器時代から近世までを概観する。

旧石器時代

松山平野内では旧石器時代の遺構は確認されておらず、採集資料や単独出土資料のみである。小野地区では、五郎兵衛谷古墳の調査に伴い出土した角錐状石器や上苅屋遺跡４次調査出土のナイフ形石器（赤色チャート製）などがあり、いずれも後期旧石器時代のものと考えられている。

縄文時代

早期では上苅屋遺跡３次調査において、包含層中より押型文土器や無文土器が出土しており、松山平野最古の縄文土器とされている。前期の資料では北梅本悪社谷遺跡１次調査から、包含層資料ではあるが打製石鏃（緑色チャート製）が出土している。中・後期の資料はなく、晩期になると近年の発掘調査により遺構や遺物の検出事例が増加する。古市遺跡１次調査では、自然流路内から弥生時代から古代の遺物と共に縄文時代晩期前葉や後葉の土器が出土しているほか、同２次調査では晩期後葉の土坑１基（SK13）が検出され、浅鉢や深鉢片のほか台石や磨石、叩石などが出土している。このほか、南梅本長広遺跡２次調査でも晩期後葉の土坑１基（SK3）が検出され、土器やサヌカイト製の石器剥片が出土している。

弥生時代

弥生時代では検出事例が飛躍的に増大するが、なかでも前期末から中期初頭の遺構・遺物は注目される。前述の古市遺跡で検出した自然流路内からは、前期末から中期初頭の土器がまとまって出土し、同２次調査では該期の土坑14基が確認されている。このうち、SK14からは約3,700点のサヌキトイド剥片が出土し、石器製作に関連する遺構と考えられている。また、SK1からは緑色片岩製の剣形石製品が出土しており、墓的要素の強い遺構の可能性がある。このほか、断面形態が袋状を呈し、完形品を含む多数の土器が出土した土坑が数基検出されており、これらは貯蔵穴として機能したものと考えられている。このほか、五楽遺跡１次調査からは土器焼成用と思われる５基の土坑が検出されている。竪穴住居は未検出であるが、小野地区には前期集落が広範囲に存在したことがわかる。

中期から後期では良好な資料が少なく、中期では後半期（凹線文期）の遺構・遺物が数例報告されている。平井遺跡３次調査では該期の溝や土坑３基が検出され、同６次調査や８次調査では土坑１基が各々の調査で検出されている。

後期では平井遺跡２次調査において後期後葉の溝が検出され、同７次調査や南梅本長広遺跡１次調査では同時期の土坑が発見されている。このほか、水泥遺跡１次調査では弥生時代末に時期比定される土器がまとまって出土した溝が検出されている。

古墳時代

集落遺跡では、前期から中期の資料は少ない。前期では南高井遺跡２次調査において前期前半の土坑が検出され、壺形土器が埋納状態で出土している。また、平井遺跡１次調査では包含層中より該期の土器が数多く出土している。中期では上苅屋遺跡３次調査と下苅屋遺跡３次調査において、中期後半期の方形竪穴住居が１棟ずつ検出されている。

後期になると、遺構・遺物共に検出事例が増加する。後期前半では平井遺跡５次調査において方形竪穴住居３棟と掘立柱建物２棟が検出され、竪穴住居には造り付けカマドが付設されている。このほか、同７次調査においても竪穴住居１棟と掘立柱建物４棟が報告されている。後期後半には、遺構・遺物共に検出事例が飛躍的に増大する。平井遺跡３・４・６・８次調査では総数12棟の掘立柱建物のほか溝や土坑が検出され、下苅屋遺跡１次調査では６世紀後半から末に時期比定される９棟の竪穴住居内から、生焼けや焼け歪みのある須恵器が多数出土している。また、同３次調査では同時期の竪穴住居３棟や掘立柱建物５棟のほか土坑３基が検出されている。このうち、下苅屋遺跡３次調査で検出した土坑内からは未成品を含む大量の須恵器が出土しており、これらは土器廃棄遺構と考えられている。

これまでの調査・研究の結果、小野地区一帯は小野谷に分布する窯址群からの須恵器運搬に伴う中継地あるいは集積地としての性格をもつ集落であったと推測されている。

一方、古墳は小野地区北部に広がる丘陵上に、中期から後期の築造とされる80基以上が存在している。中期を代表する古墳には檜山峠７号墳があり、くびれ部からは須恵器高坏や壺が割られて埋置されており、祭祀にかかわる貴重な資料といえる。近年では、葉佐池古墳や播磨塚天神山古墳の調査が実施され、播磨塚天神山古墳では横穴式石室内から金銅製の飾り金具や銀製空玉などの装飾品が数多く出土している。

丘陵部とは別に平地部では、上苅屋遺跡１次調査と高井遺跡１次調査において後期後半期の小規模な竪穴石室が発見され、高井遺跡からは須恵器壺や耳環が出土している。

古　代

平井遺跡９次調査では、焼け歪みや火膨れのある７世紀後半期の須恵器が大量に出土した土坑が検出されており、これらは土器廃棄遺構と推測されている。また、南高井遺跡３次調査では、同時期の竪穴住居や土坑が検出されている。このほか古市遺跡２次調査では飛鳥時代から奈良時代に時期比定される掘立柱建物が検出されたほか、上苅屋遺跡３次調査からは８世紀代の掘立柱建物のほか、同時期の土器を含む自然流路が検出されている。

平安時代では古市遺跡１次調査において10世紀代の溝や12世紀前半期の掘立柱建物が検出され、建物柱穴内からは完形の土師器や瓦器椀が出土しており、建物廃絶に伴う祭祀儀礼が取り行われたものと考えられている。このほか時期は特定しえないが、水泥遺跡や高井遺跡では飛鳥時代から平安時代にかけての水田址が検出されている。

地区北部の丘陵上には、松山東部古窯址群と呼称される須恵器生産窯が分布し、６世紀後半から８世紀後半までの操業とされている。このうち、駄馬姥ケ懐窯址は学術目的で発掘調査が実施された唯一の窯址で、飛鳥時代後半期の操業である。なお、近年の研究では、この窯で焼かれた須恵器が久米官衙遺跡群へ供給されたものと考えられている。

第１図　周辺遺跡分布図　（S=1：25,000）

❶ 五楽遺跡２次調査
❷ 五楽遺跡１次調査
❸ 五楽遺跡３次調査
❹ 古市遺跡１次調査
❺ 古市遺跡２次調査
❻ 上苅屋遺跡１次調査
❼ 上苅屋遺跡２次調査
❽ 上苅屋遺跡３次調査
❾ 上苅屋遺跡４次調査
❿ 下苅屋遺跡１次調査
⓫ 下苅屋遺跡２次調査
⓬ 下苅屋遺跡３次調査
⓭ 平井遺跡２次調査
⓮ 平井遺跡３次調査
⓯ 平井遺跡４次調査
⓰ 平井遺跡５次調査
⓱ 平井遺跡６次調査
⓲ 平井遺跡７次調査
⓳ 平井遺跡８次調査
⓴ 平井遺跡９次調査
㉑ 水泥遺跡１次調査
㉒ 水泥遺跡２次調査
㉓ 水泥遺跡３次調査
㉔ 水泥遺跡４次調査
㉕ 水泥遺跡５次調査
㉖ 水泥遺跡６次調査
㉗ 水泥遺跡７次調査
㉘ 高井遺跡１次調査
㉙ 南高井遺跡２次調査
㉚ 南高井遺跡３次調査
㉛ 南梅本長広遺跡１次調査
㉜ 南梅本長広遺跡２次調査
㉝ 南梅本上方遺跡１次調査
㉞ 南梅本上方遺跡２次調査
㉟ 北梅本北池遺跡
㊱ 北梅本悪社谷遺跡１次調査
㊲ 北梅本悪社谷遺跡２次調査
㊳ 五郎兵衛谷古墳
㊴ 桧山峠７号墳
㊵ かいなご３号墳
㊶ 観音山古墳
㊷ 葉佐池古墳
㊸ 播磨塚天神山古墳
㊹ 茨谷窯址
㊺ 駄馬姥ヶ懐窯址
㊻ 枝朶下池窯址

中　世

上苅屋遺跡３次調査では鎌倉時代後期、13世紀後半から14世紀前半に時期比定される８棟の掘立柱建物のほか、室町時代後期、16世紀代の土坑墓や井戸が検出されている。南梅本上方遺跡１・２次調査では室町期とされる掘立柱建物が検出され、柱穴内からは柱材の一部が出土している。このほか、小野地区南西部にある水泥遺跡や高井遺跡、南高井遺跡では中世段階の水田址や畠址が検出され、当地一帯が生産域として土地利用されていたことが判明している。

近　世

上苅屋遺跡３次調査からは江戸時代前期の井戸が発見され、下苅屋遺跡３次調査では礫が積まれた２基の墓が検出されたほか、水泥遺跡３次調査においては経塚１基が発見されている。また、水泥遺跡３～７次調査では江戸時代の水田址や畠址のほか、３次調査からは江戸時代中期の土坑墓１基が検出されている。

【参考文献】

森　光晴　1979　『五郎兵衛谷古墳』松山市文化財調査報告書第13集

栗田茂敏　2005　『上苅屋遺跡－第3次･4次調査－』松山市文化財調査報告書第104集

2000　『古市遺跡･下苅屋遺跡－2次･3次調査－』松山市文化財調査報告書第75集

1997　『檜山峠7号墳』松山市文化財調査報告書第61集

2003　『葉佐池古墳』松山市文化財調査報告書第92集

1996　「駄馬姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書第57集

梅木謙一　1998　「北梅本悪社谷遺跡」『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第66集

小笠原善治　2007　『南梅本上方遺跡－1次･2次調査地－、南梅本長広遺跡－1次･2次調査地－』松山市文化財調査報告書第118集

宮内慎一　2005　『古市遺跡－2次調査－、五楽遺跡－1次･3次調査－』松山市文化財調査報告書第103集

水本完児　2008　『平井遺跡－2次調査－、水泥遺跡－1次･2次･3次調査－、高井遺跡－1次調査－、南高井遺跡－2次･3次調査－』松山市文化財調査報告書第126集

2010　『平井遺跡－3～9次調査－』松山市文化財調査報告書第145集

相原秀仁　2010　『水泥遺跡－4～7次調査－』松山市文化財調査報告書第147集

重松佳久　1996　「上苅屋遺跡1次調査」『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書第57集

1996　「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』

吉岡和哉　2001　『播磨塚天神山古墳』松山市文化財調査報告書第83集

愛媛県教育委員会　1991　『愛媛県内古墳－分布調査報告－』

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の経緯（第２図）

調査は調査地内に農道や生活用水路などが存在したため、調査地を北側と南側の二箇所に分区して実施した。まず、南側を１区として調査を開始した。調査工程の都合上、１区は東側と西側に分けて調査を進めた。平成11年４月９日、重機の使用により１区西側の表土掘削作業を開始する。４月13日より壁面及び平面精査をし、土層の線引きや遺構検出作業を行う。１区西側の調査と併行して、４月20日より２区の調査を開始する。１区と同様、重機の使用により表土掘削作業を行う。４月30日、１区西側の遺構検出作業を終了し、竪穴住居や掘立柱建物のほか溝や土坑、柱穴を検出する。５月６日より遺構の掘り下げや遺物の取り上げ、測量作業を行う。５月28日、１区西側の調査を終了し、６月１日より１区東側の調査を開始する。重機の使用により表土掘削作業を行う。なお、同日には２区の遺構検出作業を行い、竪穴住居や掘立柱建物のほか溝や土坑、柱穴を確認する。６月８日、１区東側の遺構検出作業を行い、竪穴住居や掘立柱建物のほか溝や土坑、柱穴を確認する。６月10日より、１区東側で検出した遺構の掘り下げや遺物の取り上げ及び測量作業を行う。また、６月28日からは２区で検出した遺構の掘り下げ等を行う。７月９日、田﨑博之、松原弘宣（愛媛大学）両先生方に調査指導を請う。７月23日、一般市民を対象とした現地説明会を開催し、参加者70名を得る。７月28日、１区と２区の測量作業を終了し、発掘用具等を撤収して７月30日、調査を終了する。

第２節　層　位

調査地は松山平野北東部、小野谷に水源を発する小野川と平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高72.5 ～ 73.2mに立地する。調査地は調査以前は水田や畑として利用されており、現況での標高値は２区が１区にくらべ50cmほど高くなっている。

（１）基本層位（第５～７図、写真図版４）

調査地の基本層位は、以下の七層である。

Ⅰ層：近現代の農耕に伴う耕作土で、青灰色（10BG6/1）を呈する粘質土である。層厚は１区が10～35 cm、２区は10～25cmを測る。

Ⅱ層：近現代の農耕に伴う床土で、黄橙色（10YR7/8）を呈する粘質土である。層厚は１区が５～55cm、２区は５～15cmを測る。

Ⅲ層：褐灰色（10YR4/1）を呈するシルト層で、１・２区共に調査区南半部に堆積がみられ、層厚５～10cmを測る。本層中からは、土師器片や陶磁器片が少量出土した。

Ⅳ層：暗灰色（10YR3/4）を呈するシルト層で、１区は調査区ほぼ全域に堆積がみられるが、２区では南半部にみられ、層厚３～18cmを測る。本層中からは主に古代、奈良時代や平安時代に時期比定される土師器や須恵器が出土した。なお、検出した遺構のうち、掘立柱建物の一部は本層上面から掘削されており、他の掘立柱建物や溝は本層が遺構上面を覆っている。

Ⅴ層：黒褐色（10YR2/2）を呈するシルト層で、１区では南半部、２区は中央部西寄りに堆積がみられ、層厚３～12cmを測る。本層中からは、主に弥生時代の土器のほかに石器が出土した。

Ⅵ層：褐色（10YR4/4）を呈する粘質土で１区は全域にみられ、２区では南半部にみられる。本層中から、遺物の出土はない。

Ⅶ層：黄色（2.5Y7/8）を呈するシルト層で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると２区北東部が最も高く標高73.0mを測り、漸次、南西部に向けて傾斜をなし、１区南西部が最も低く標高72.0mを測る。

検出した遺構や出土遺物より、Ⅴ層は弥生時代前期、Ⅳ層は古代、Ⅲ層は中世までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査区内を５m四方のグリッドに分けた。グリッドは西側から東側に向けてＡ・Ｂ・Ｃ・・・・Ｎ、南側から北側に向けて１・２・３・４・・・・・16とし、Ａ１・Ａ２・・・・・Ｎ16といったグリッド名を付した。なお、グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

（２）検出遺構・遺物（第３・４図、写真図版２・３）

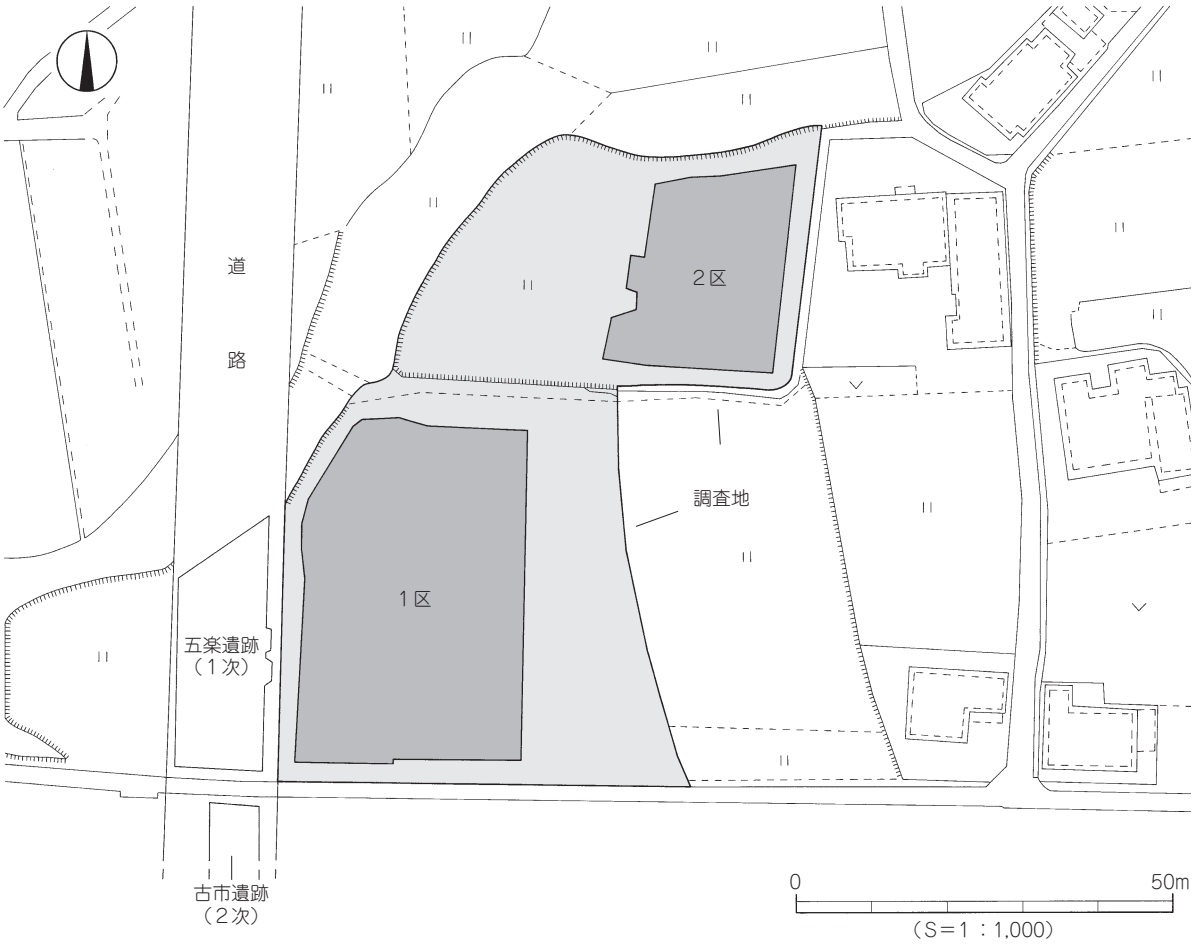
調査では竪穴住居３棟、掘立柱建物15棟、溝15条、土坑25基、柱穴457基（掘立柱建物柱穴121基を含む）、土器溜まり４基、倒木址14基を検出した。検出した遺構は弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代後期後半～終末、中世～近世に時期比定されるものである。各遺構の時期は、以下のとおりである。なお、地区別の検出遺構は表１に記す。

竪穴住居　：古墳時代後期後半以前（３棟）
掘立柱建物：古墳時代後期後半～終末（15棟）
溝　　：弥生時代前期末～中期初頭（１条）、古墳時代後期後半～末（13条）、近世（１条）
土　坑　　：弥生時代前期末～中期初頭（22基）、弥生時代後期後半（１基）、古墳時代末（１基）、中世（１基）
土器溜まり：弥生時代前期末～中期初頭（４基）
倒木址　　：弥生時代前期末以前（14基）

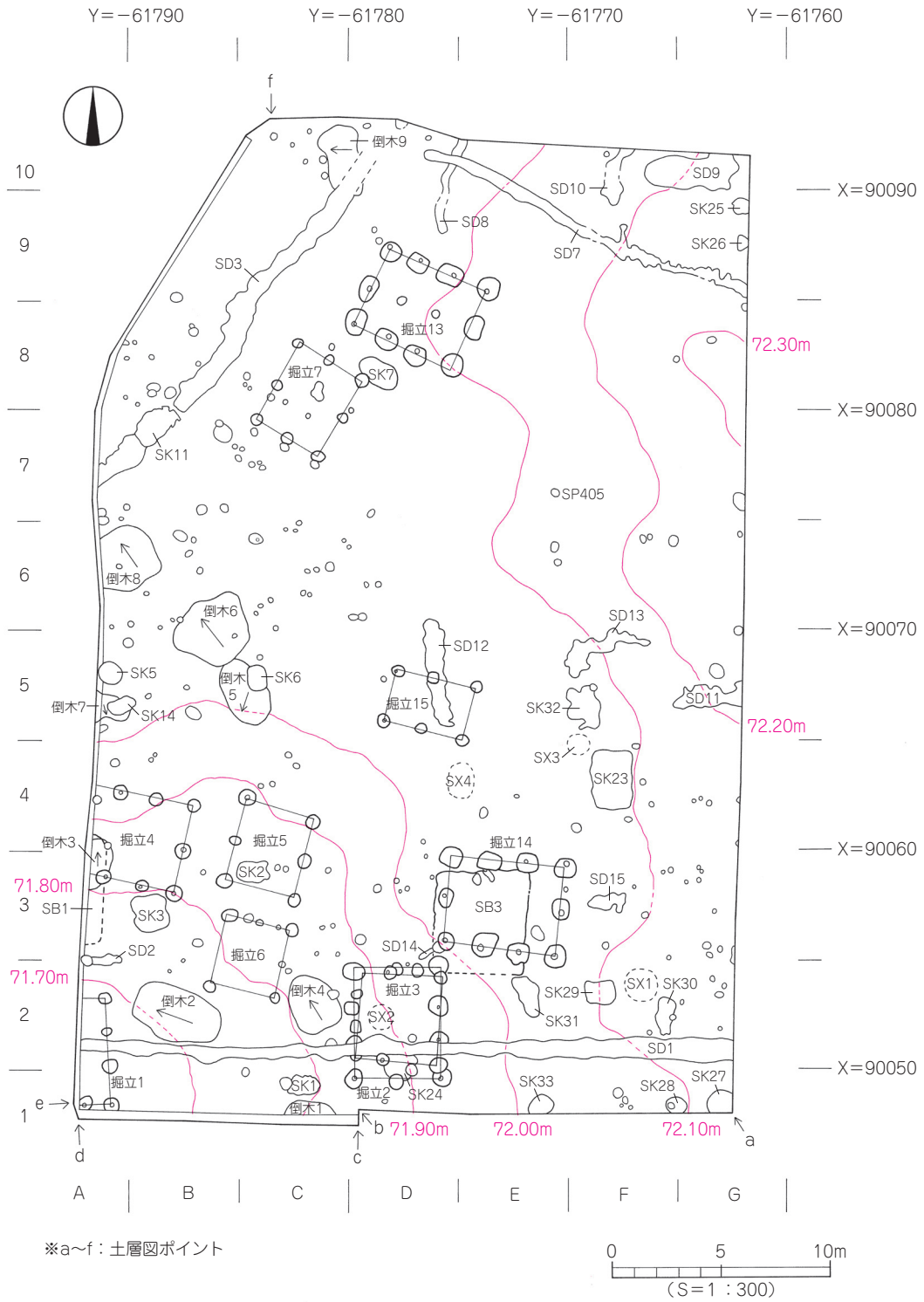
遺物は遺構内や包含層（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層）、及び重機による表土掘削時やトレンチ掘削時に出土した。出土した遺物は弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳時代後期～近世）、須恵器（古墳時代後期～平安時代）、陶磁器（中世～近世）、石器（石鏃・石庖丁・石斧・石錘・磨石・スクレイパー・剥片）、鉄器（刀子）である。なお、遺物の出土量は遺物収納用箱（44×60×14㎝）約60箱分に及ぶ。

表1　検出遺構一覧

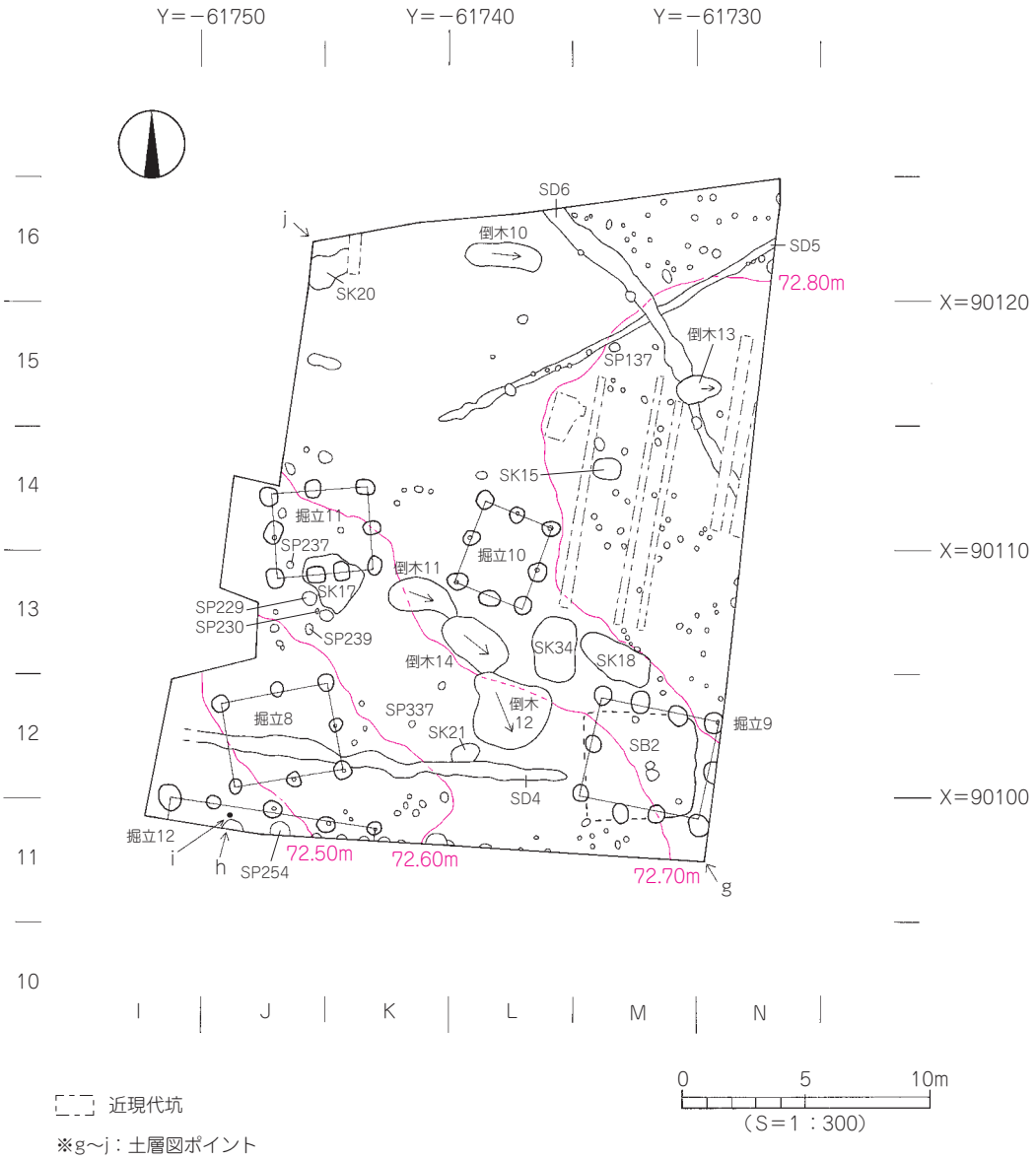
	１　区	２　区
弥生時代前期末～中期初頭	溝　：１条（SD2） 土坑：18基（SK1～3･5～7･11･14･23･24 26～33） 土器溜まり：４基（SX1～4）	土坑：４基（SK15･20･21･34）
弥生時代後期後半	—	土坑：１基（SK18）
古墳時代後期後半～終末	竪穴：２棟（SB1･3） 掘立：10棟（掘立１～7･13～15） 溝　：10条（SD3･7～15）	竪穴：１棟（SB2） 掘立：５棟（掘立８～12） 溝　：３条（SD4～6） 土坑：１基（SK17）
中　世	土坑：１基（SK25）	—
近　世	溝　：１条（SD1）	—



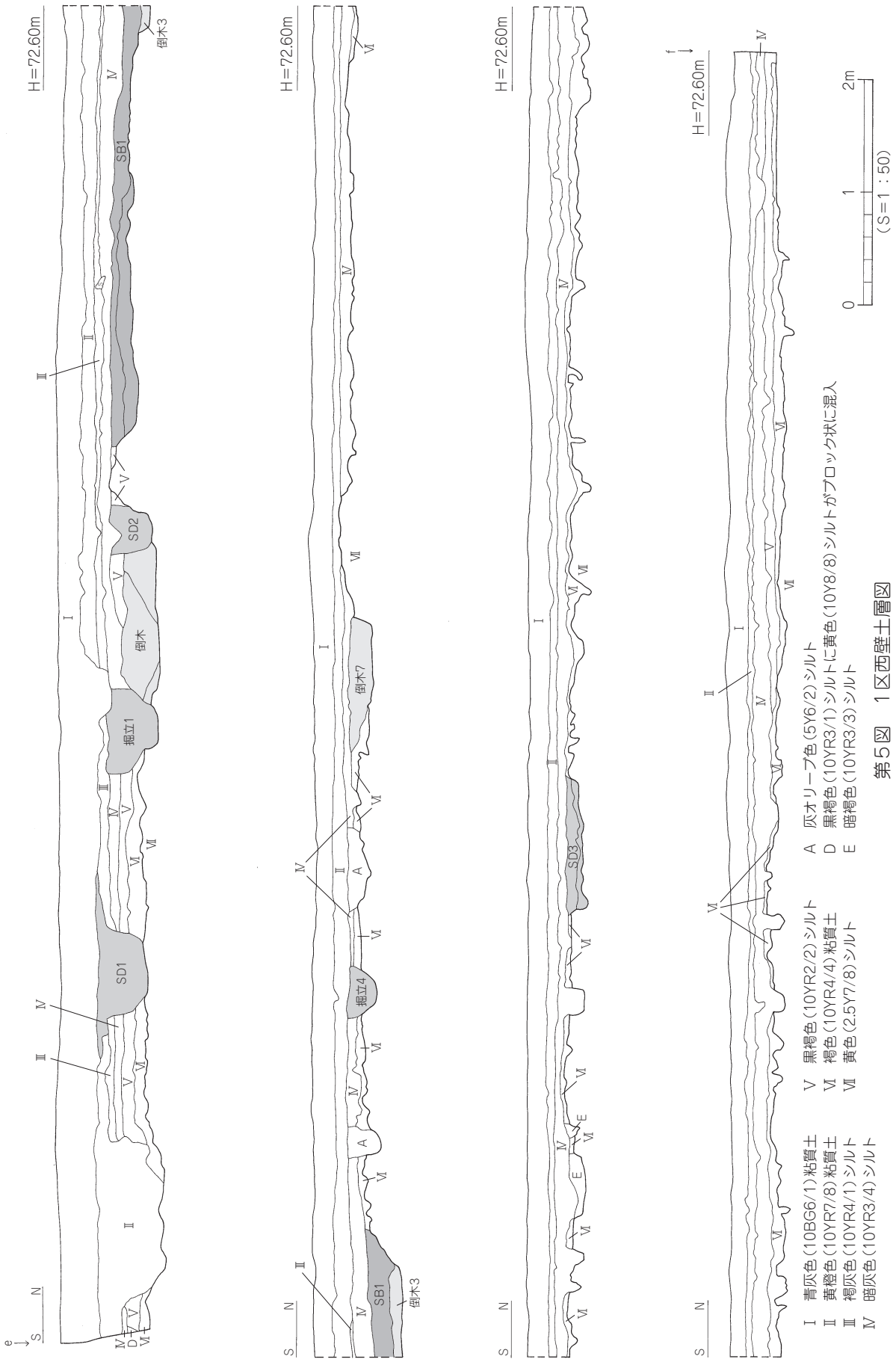
第2図　調査地測量図


Y=−61790
Y=−61780
Y=−61770
Y=−61760
X=90090
X=90080
X=90070
X=90060
X=90050
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
F
G
a
b
c
d
e
f
倒木9
SD10
SD9
SK25
SK26
SD8
SD7
SD3
掘立13
掘立7
SK7
72.30m
SK11
SP405
倒木8
倒木6
SD13
SD12
SK5
倒木5
SK6
倒木7
SK14
掘立15
SK32
SD11
72.20m
SX3
SX4
SK23
倒木3
掘立4
掘立5
掘立14
SK2
SD15
71.80m
SB1
SK3
SB3
SD14
SD2
掘立6
71.70m
倒木4
掘立3
SX1
SK30
SK29
倒木2
SX2
SK31
SD1
掘立1
SK1
掘立2
SK24
SK33
SK28
SK27
倒木1
71.90m
72.00m
72.10m
※a～f：土層図ポイント
0
5
10m
（S＝1：300）

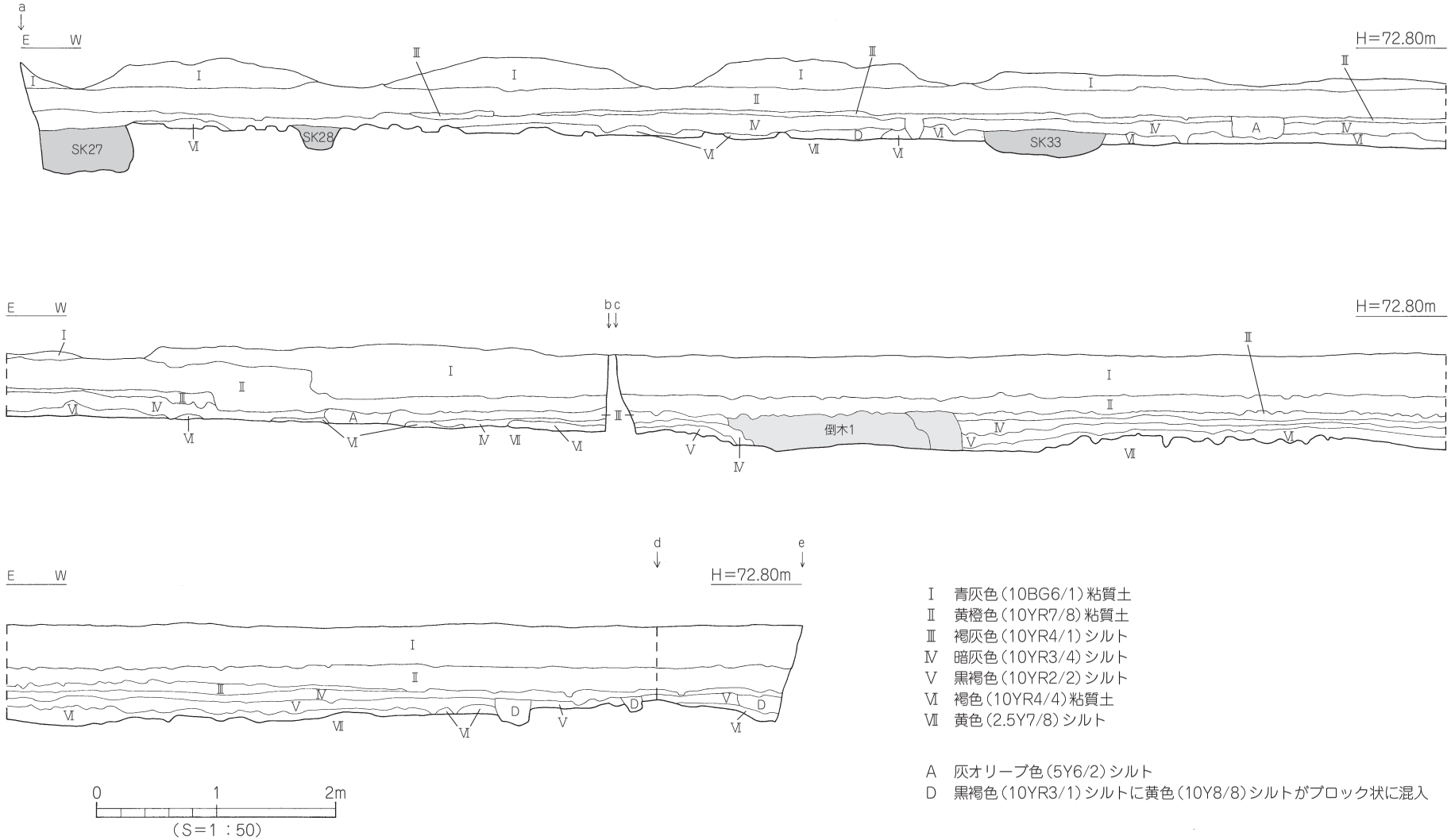
第３図　１区遺構配置図


Y=−61750
Y=−61740
Y=−61730
X=90120
X=90110
X=90100
16
15
14
13
12
11
10
I
J
K
L
M
N
SD6
SD5
72.80m
倒木10
SK20
倒木13
SP137
SK15
掘立11
SP237
倒木11
掘立10
SK17
SP229
SP230
SP239
倒木14
SK34
SK18
倒木12
SP337
SK21
掘立8
掘立9
SB2
SD4
掘立12
i
h
SP254
72.50m
72.60m
72.70m
g
j
近現代坑
※g～j：土層図ポイント
0
5
10m
（S＝1：300）

第４図　２区遺構配置図


H=72.60m
S N
e
f
倒木3
SB1
SD2
倒木
掘立1
SD1
倒木7
掘立4
SD3
0 1 2m
(S=1：50)
Ⅰ 青灰色(10BG6/1)粘質土
Ⅱ 黄橙色(10YR7/8)粘質土
Ⅲ 褐灰色(10YR4/1)シルト
Ⅳ 暗灰色(10YR3/4)シルト
Ⅴ 黒褐色(10YR2/2)シルト
Ⅵ 褐色(10YR4/4)粘質土
Ⅶ 黄色(2.5Y7/8)シルト
A 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト
D 黒褐色(10YR3/1)シルトに黄色(10Y8/8)シルトがブロック状に混入
E 暗褐色(10YR3/3)シルト

第5図　1区西壁土層図



Ⅰ　青灰色（10BG6/1）粘質土
Ⅱ　黄橙色（10YR7/8）粘質土
Ⅲ　褐灰色（10YR4/1）シルト
Ⅳ　暗灰色（10YR3/4）シルト
Ⅴ　黒褐色（10YR2/2）シルト
Ⅵ　褐色（10YR4/4）粘質土
Ⅶ　黄色（2.5Y7/8）シルト

A　灰オリーブ色（5Y6/2）シルト
D　黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（10Y8/8）シルトがブロック状に混入

第6図　1区南壁土層図

第7図　2区西壁・南壁土層図

第３節　遺構と遺物

〔１〕弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は溝１条、土坑23基、土器溜まり４基を検出した。これらは、第Ⅵ層及び第Ⅶ層上面での検出である。１区では溝１条と土坑18基、土器溜まり４基を検出し、２区では土坑５基を検出した。なお、溝と土器溜まりは弥生時代前期末から中期初頭、土坑23基のうち22基は弥生時代前期末から中期初頭、１基が弥生時代後期後半に時期比定されるものである。

（１）溝

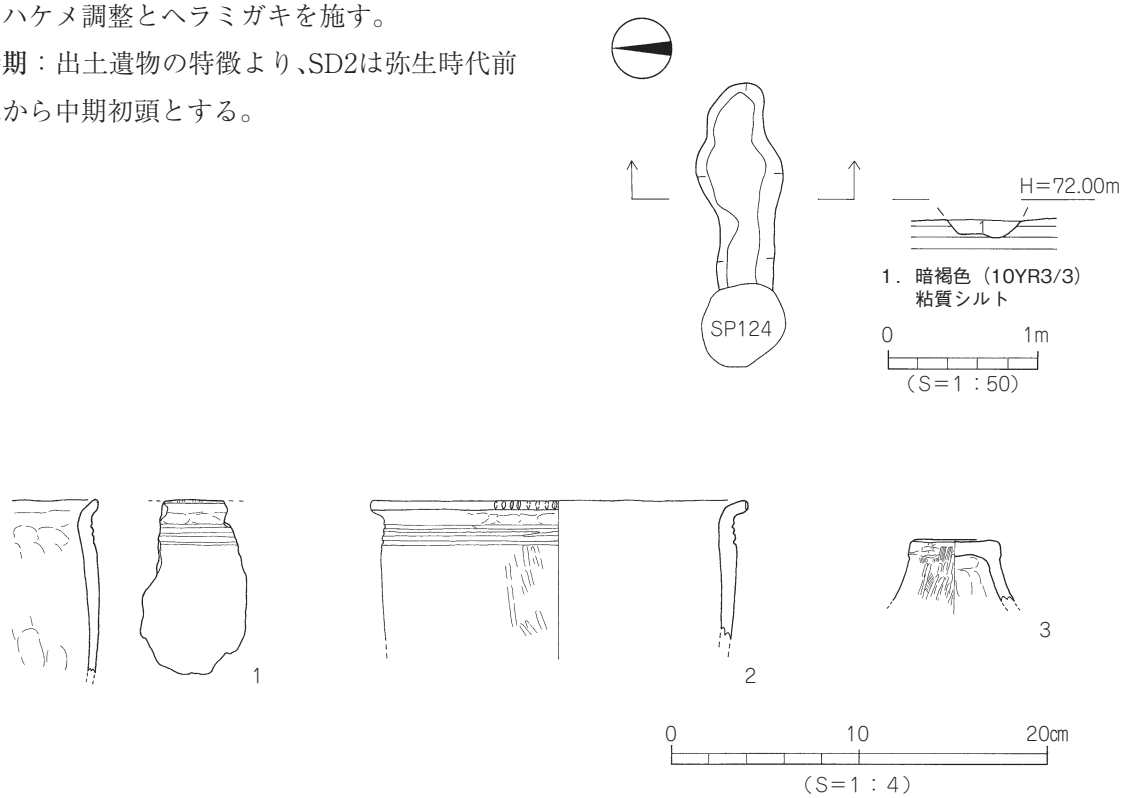
ＳＤ２（第８図）

１区南西部、Ａ２～Ｂ３区で検出した東西方向の短い溝で、溝西側はSP124〔埋土：黒色(5Y2/1)シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入〕に切られている。第Ⅶ層上面での検出であり、規模は検出長1.40m、幅0.60m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルト単層である。溝基底面に高低差はみとめられないが、やや凹凸がみられる。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうる遺物を３点掲載した。

出土遺物（写真図版９）

１・２は甕形土器。口縁～胴部の破片で、口縁部の成形は折り曲げによるものである。両者共に口縁端面には刻目、胴部外面にはヘラ描き沈線文３条を施す。３は蓋形土器のつまみで、つまみ径は4.7cmを測る。つまみ中央部は凹み、口縁部外面にはハケメ調整とヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、SD2は弥生時代前期末から中期初頭とする。



第８図　SD2測量図・出土遺物実測図

（2）土　坑

調査では、23基の土坑を検出した。内訳は、弥生時代前期末から中期初頭の土坑22基、弥生時代後期後半の土坑１基である。前者は、平面形態により四種類（円形・楕円形・長方形・不定形）に分けられる。内訳は円形３基、楕円形15基、長方形２基、不定形２基である。ここでは、弥生時代前期末から中期初頭に時期比定される22基の土坑を平面形態で分類し、測量図や遺物実測図を掲載している。なお、各区の検出状況は１区では18基（SK1 ～ 3・5 ～ 7・11・14・23・24・26 ～ 33）、２区では５基（SK15・18・20・21・34）である。

１）弥生時代前期末～中期初頭

① 円形土坑

円形土坑は、３基（SK5・24・28）を検出した。すべて、第Ⅶ層上面での検出である。

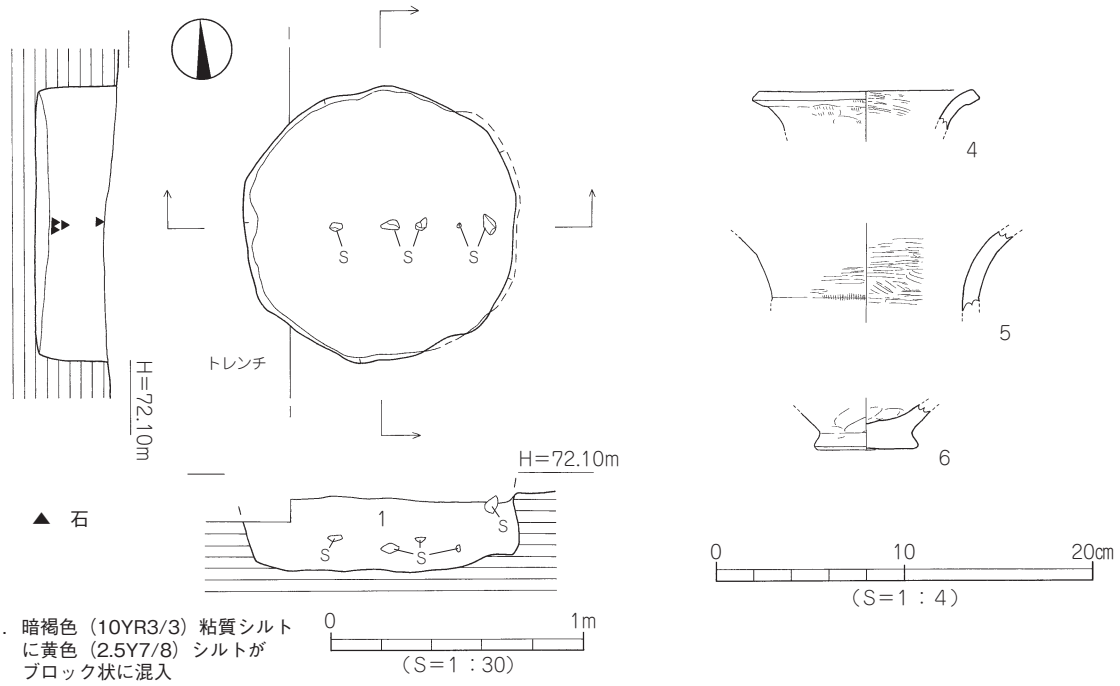
ＳＫ５（第９図、写真図版４）

１区西壁中央部やや南寄り、Ａ５区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径1.07 ～ 1.09m、深さ31cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、土坑東側壁体は一部フラスコ状となる。土坑基底面は、中央部付近がやや凹む。土坑埋土は暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入するものである。遺物は土坑中央部の埋土中位付近より、弥生土器片や径５～ 10cm、厚さ３～７cm大の河原石が少量出土した。図化しうる遺物を３点掲載した。

出土遺物

４・５は壺形土器。４は広口壺で短く外反する口縁部をもち、外面にはハケメ調整を施す。５は広口壺の頸部片。筒状の頸部に大きく外反する口縁部をもつもので頸部に段をもち、頸部外面にはハケメ調整、口縁部内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。６は鉢形土器の底部で、突出部をもつ平底である。

時期：出土遺物の特徴より、SK5は弥生時代前期末から中期初頭とする。



第９図　SK5測量図・出土遺物実測図

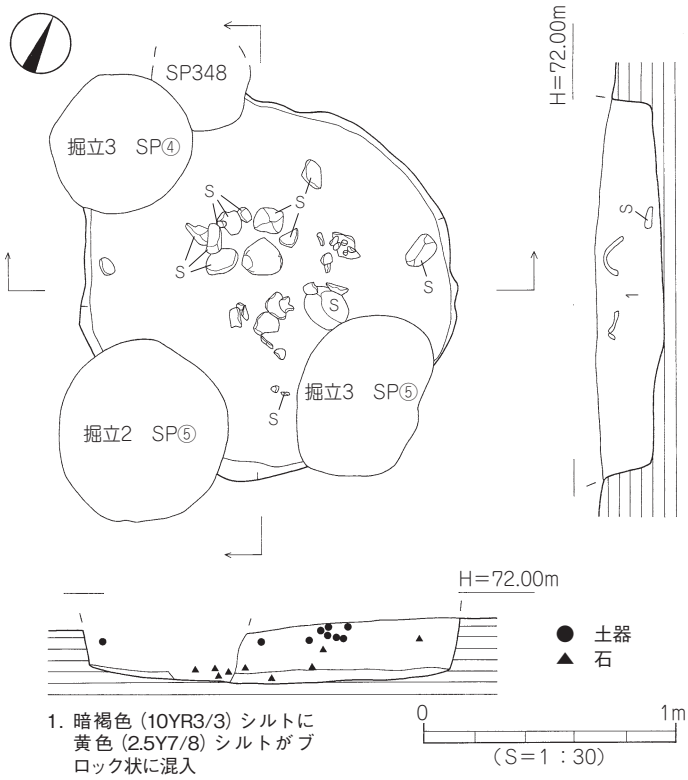
ＳＫ24（第10図、写真図版４）

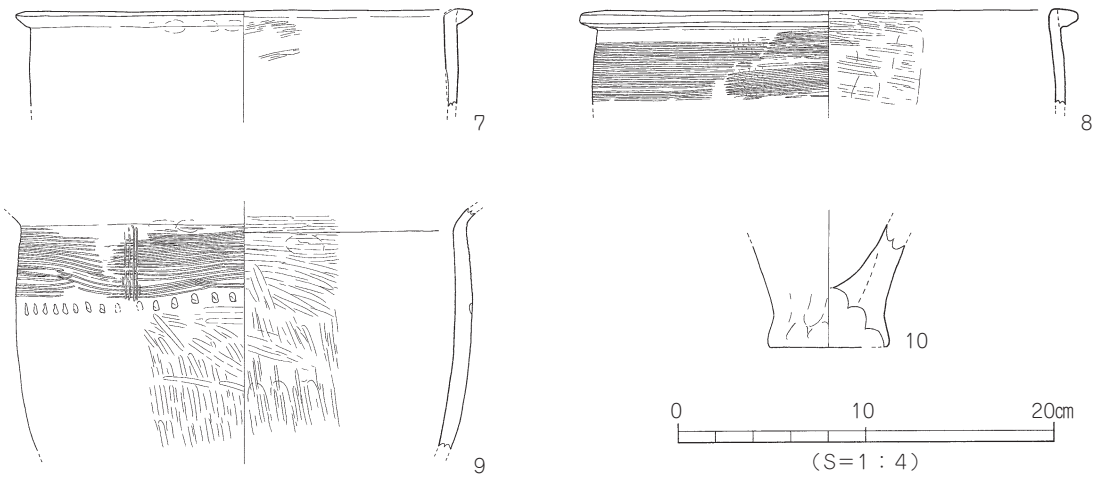
１区南壁中央部付近、Ｄ１・２区に位置する。土坑北側は溝SD1とSP348〔埋土：黒褐色(10YR3/1)シルト〕及び掘立3柱穴に切られ、南側は掘立2･3柱穴に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.50m、深さ27cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、北側壁体や南西側壁体は逆台形状をなす。埋土は、暗褐色(10YR3/3)を呈する粘性の強いシルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面は、中央部付近が凹む。遺物は土坑中央部付近の埋土上位から中位に集中しており、弥生土器片や河原石が数多く出土した。

出土遺物（写真図版９）

７～10は甕形土器。７・８は口縁部の成形が粘土紐の貼り付けによるもので、８の胴部外面には櫛状工具による沈線文12条を施す。９は折り曲げにより口縁部を成形するもので、胴部外面には櫛描き沈線文16条とタテ方向の沈線文４条のほかに刺突文１列を施す。７～９の胴部内面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。10は厚みのある底部であるが、器表面の調整は摩滅が著しく不明である。

時期：出土遺物の特徴より、SK24は弥生時代前期末から中期初頭とする。





第10図　SK24測量図・出土遺物実測図

ＳＫ28（第11図）

１区南東隅Ｆ・Ｇ１区に位置する。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅳ層が覆う。土坑西側は、SP222〔埋土：黒褐色(10YR3/1)シルト〕により一部削平されている。平面形態は円形を呈し、規模は径0.91ｍ、深さ22㎝を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は、わずかに北側から南側へ向けて緩傾斜をなす。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうる遺物を１点掲載した。

出土遺物

11は肩部径36.3㎝を測る壺形土器で、ヘラ描き沈線文６条以上を施す。器表面の調整は、内外面共に摩滅が著しく不明である。

時期：出土遺物が少なく時期特定は難しいが、遺物の特徴と埋土がSK5やSK24と酷似することなどから、SK28は弥生時代前期末から中期初頭とする。

② 楕円形土坑

楕円形土坑は、15基(SK1 ～ 3･6･7･11･14･15･21･26･27･29 ～ 31･33)を検出した。すべて、第Ⅶ層上面での検出である。

ＳＫ21（第12図、写真図版５）

２区南側Ｌ12区に位置し、土坑南側は溝SD4に切られる。平面形態は北東－南西方向に長い楕円形を呈し、規模は長径1.14ｍ、短径0.80ｍ、深さ25㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑北側壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は、中央部がやや凹む。遺物は埋土中位から上位にかけて弥生土器片のほか、石器や河原石が少量出土した。

出土遺物(写真図版９)

12は蓋形土器。つまみ中央部が凹み、口縁端部は丸く仕上げる。外面はハケメ調整後に、ヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。2/3の残存。13は安山岩製の剥片で、長さ16.9㎝、幅14.4㎝、最大厚2.2㎝を測る。ｂ面には粗割段階の剥離面が残り、ａ面には剥離面と自然面を残す。

時期：出土遺物の特徴より、SK21は弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ33（第13図）

１区南壁中央部東寄りＥ１区に位置し、土坑南側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅳ層が覆う。平面形態は北東―南西方向に長い楕円形を呈し、規模は東西長1.00ｍ、南北検出長0.75ｍ、深さ12㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルト単層である。土坑基底面は、中央部付近が凹む。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうる遺物を３点掲載した。

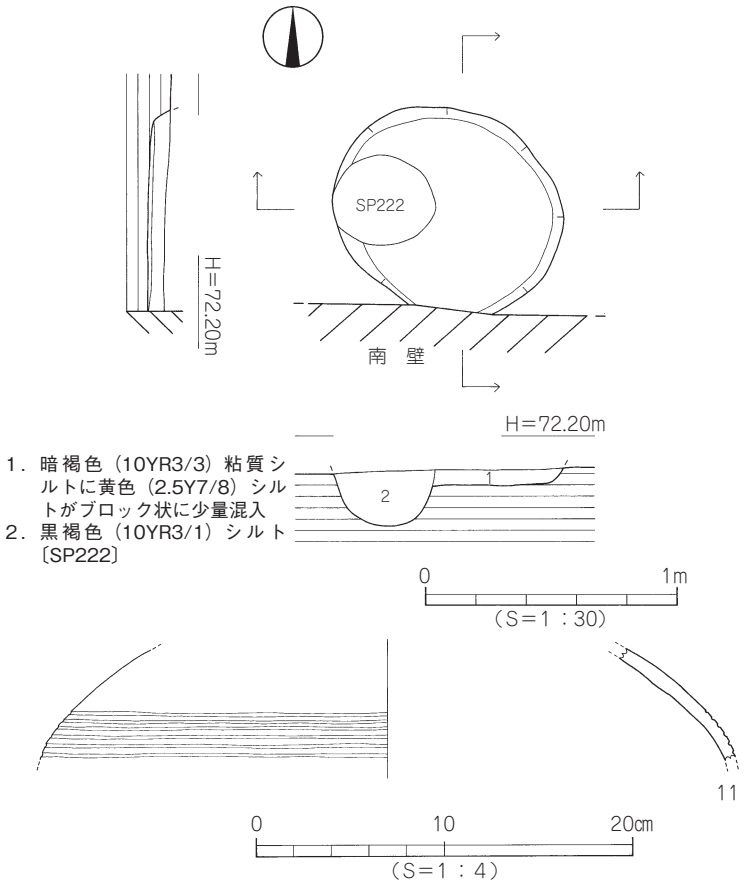
出土遺物

14 ～ 16は甕形土器。14･15は折り曲げにより口縁部を成形するもので、14の口縁部下端面には刻目を施す。15の胴部外面にはヘラ描き沈線文３条(2条1組＋1条)を施し、部分的にヨコ方向のヘラミガキが看取される。16は、突出部をもつ平底の底部である。

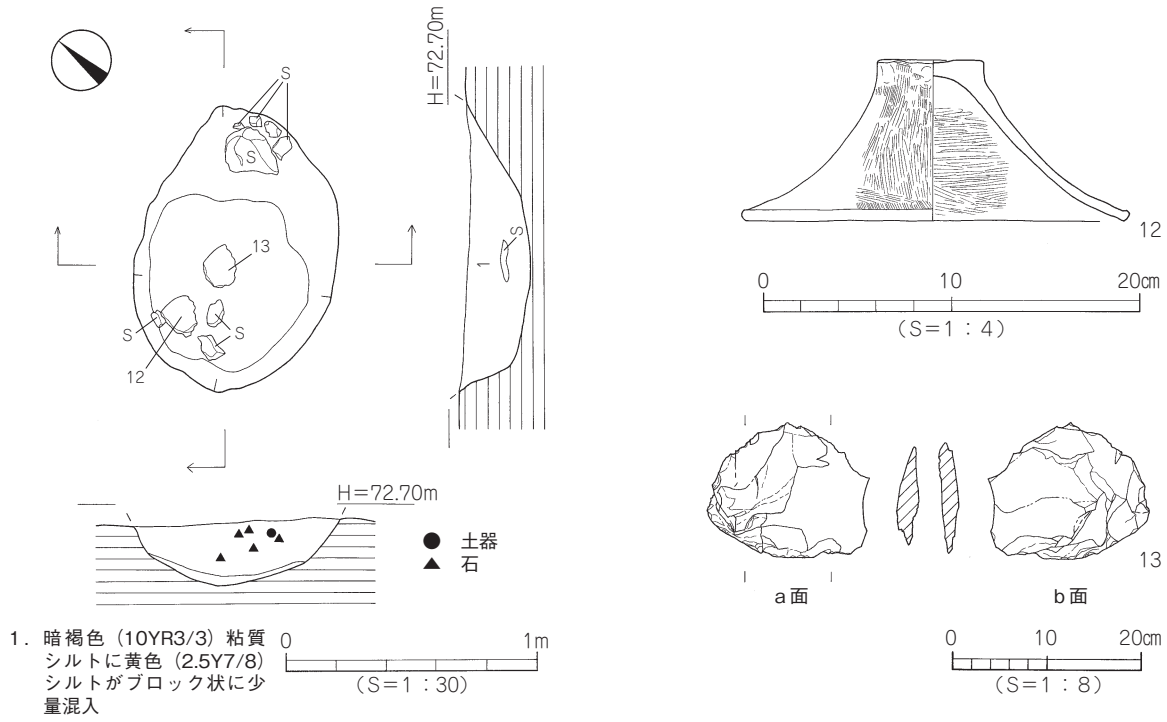
時期：出土遺物の特徴より、SK33は弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ６（第14図）

１区中央部西寄りＣ５区に位置する。平面形態は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長径1.10m、短径0.84m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑北側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルトに、黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は、北側から南側に向けて傾斜をなす。遺物は埋土中位付近より弥生土器片や河原石が数点出土したが、図化しう



第11図　SK28測量図・出土遺物実測図



第12図　SK21測量図・出土遺物実測図

る遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが埋土がSK5やSK28と酷似することから、SK6は概ね弥生時代前期末から中期初頭の土坑とする。

ＳＫ15（第14図）

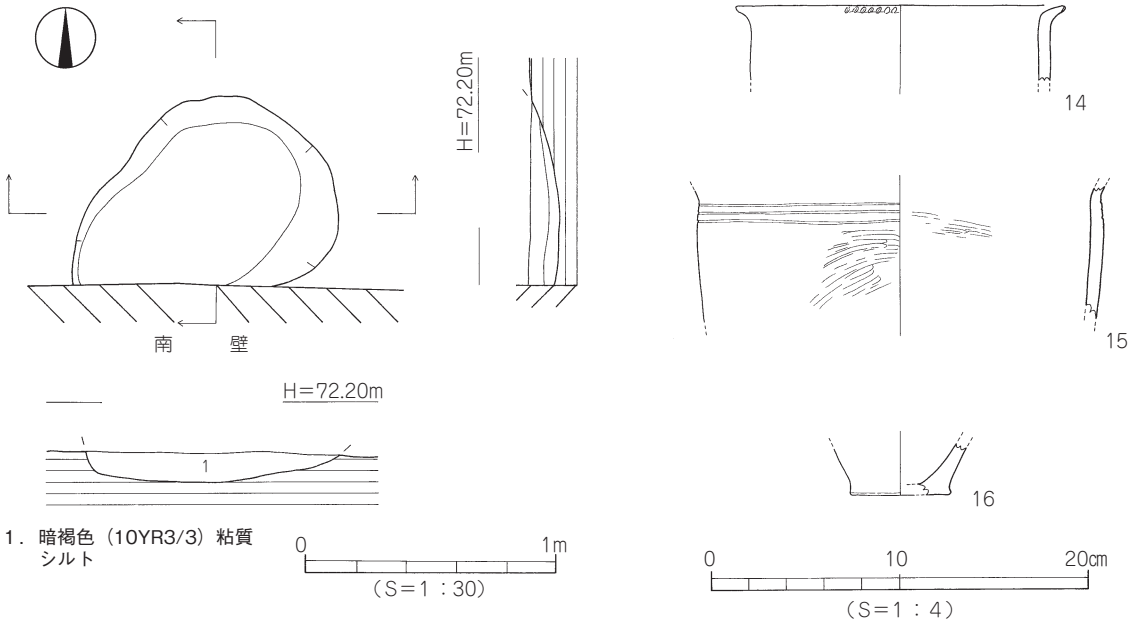
２区中央部北東寄りM14区に位置する。平面形態は東西方向に長い楕円形を呈し、規模は長径1.15m、短径0.83m、深さ34㎝を測る。断面形態は筒状を呈し、土坑埋土は暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルト単層である。土坑基底面は、東側から西側に向けて緩傾斜をなす。遺物は埋土中より弥生土器の胴部片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが埋土がSK33と酷似することから、SK15は概ね弥生時代前期末から中期初頭の土坑とする。

ＳＫ27（第14図）

１区南東隅Ｇ１区に位置する。調査壁の土層観察により、土坑上面を第Ⅳ層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.20m、東西検出長1.19m、深さ39㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、北側壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は、中央部がやや凹む。遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが埋土がSK21やSK24などと酷似することから、SK27は概ね弥生時代前期末から中期初頭の土坑とする。



第13図　SK33測量図・出土遺物実測図

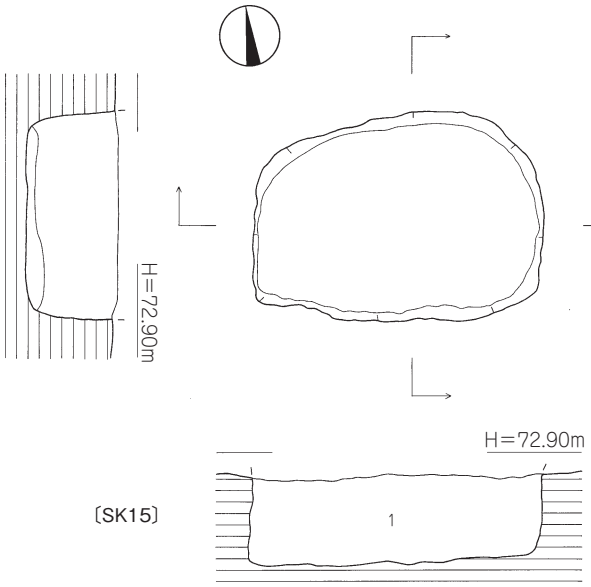
ＳＫ１（第15図）

１区南西部Ｃ１区に位置し、土坑西側はSP122〔埋土：黒褐色(10YR3/1)シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入〕に削平されている。平面形態は東西方向に長い不整楕円形を呈し、規模は東西長1.50m、南北長0.80m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルト単層である。土坑東側にはテラス状の平坦部をもち、基底面は中央部がやや凹む。遺物は弥生土器片のほかに、磨石やスクレイパー等の石器や径10～15cm大の河原石が数点出土した。

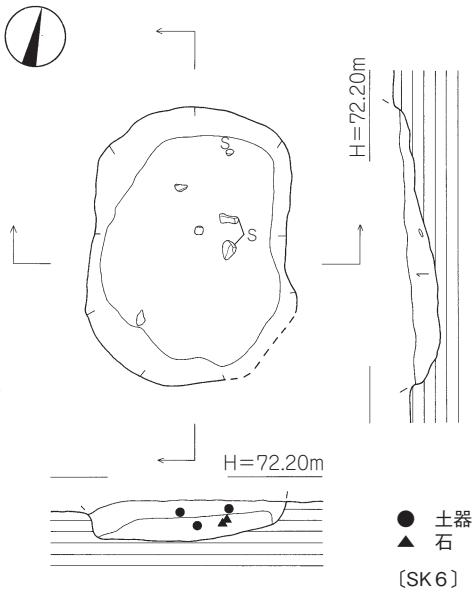
出土遺物（写真図版９）

17は壺形土器の口頸部片。頸部は外傾し、口縁端部は丸く仕上げる。18は甕形土器の底部で平底である。19は磨石で、断面形態は三角形状を呈する。中央部には自然面が残り、裏面は使用痕を残す。20は安山岩製の用途不明品である。21･22はスクレイパーで、21は刃部が弧状を呈し、両面に初期剥離面を残す。サヌカイト製。

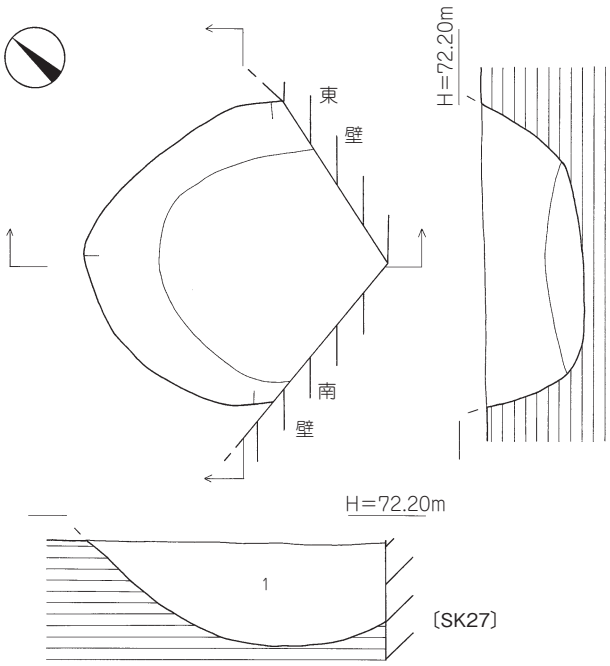
時期：出土した弥生土器の特徴より、SK1は弥生時代前期末から中期初頭とする。



1．暗褐色（10YR3/3）粘質シルト



1．暗褐色（10YR3/3）粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入



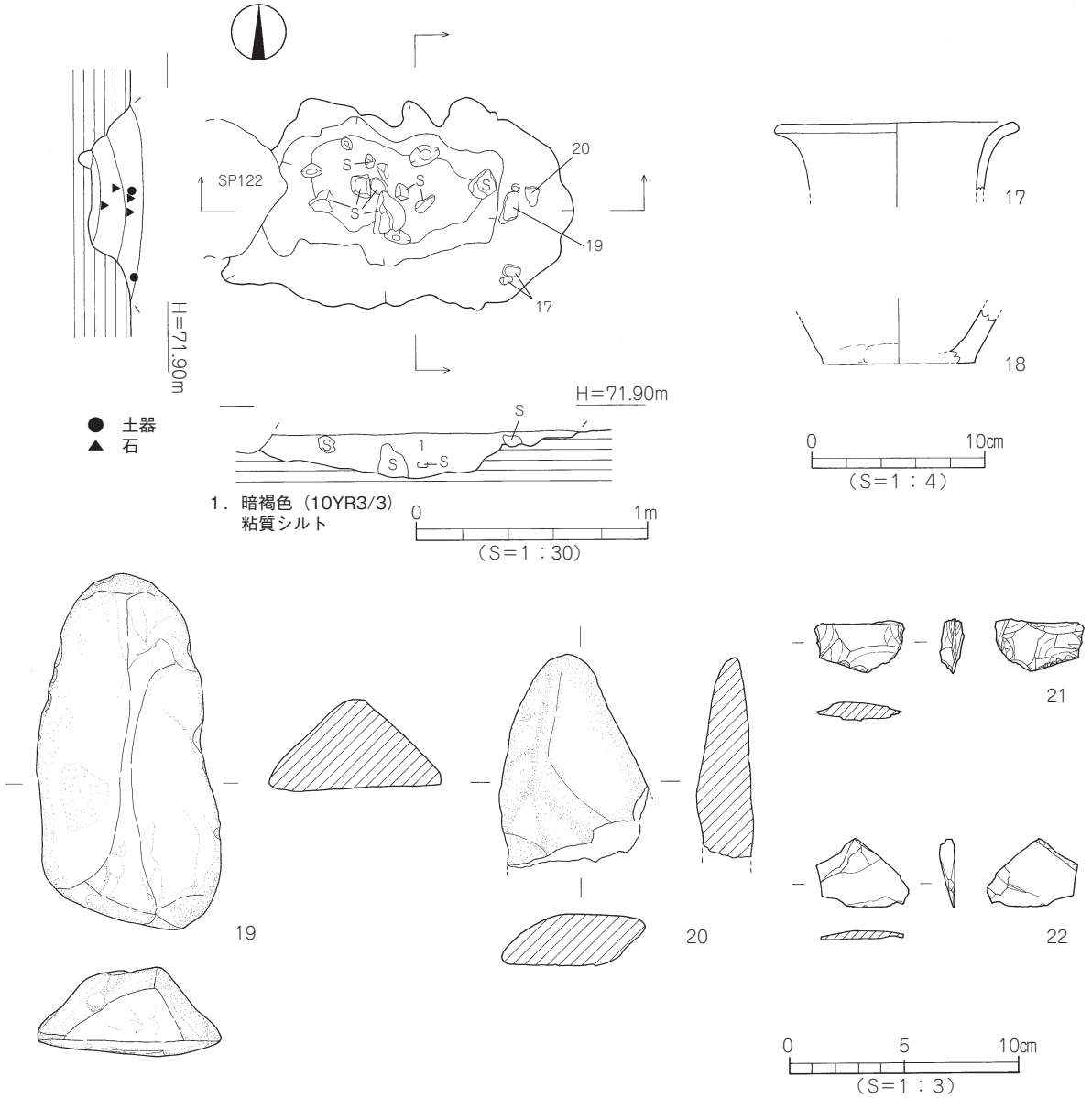
1．暗褐色（10YR3/3）粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入

0　1m
（S＝1：30）

第14図　SK6・15・27測量図

ＳＫ２（第16図）

１区南西部Ｃ３区に位置する。平面形態は東西方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径1.38m、短径0.95m、深さ16cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑東側基底面には径45～65cm、深さ４cm程度の凹み（SK①）があり、中央部と西側には径10～20cm、深さ６～10cmを測る小ピットを数基検出した。SK①とピットの埋土は土坑埋土と同様であり、これらはSK2に伴う可能性が高い。遺物は土坑中央部付近の埋土中より、弥生土器片や径５～10cm大の河原石が数点出土した。図化しうる遺物を１点掲載した。



第15図　SK１測量図・出土遺物実測図

出土遺物

23は蓋形土器。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。口縁端部内面には、一部煤が付着している。内外面共に摩滅が著しく、器面調整は不明である。

時期：出土した弥生土器の特徴より、SK2は弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ３（第17図）

１区南西部Ｂ３区に位置する。平面形態は南北方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径1.65m、短径1.52m、深さ６㎝を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面には凹凸がみられ、径５～30㎝、深さ３～６㎝大の小ピットを10数基検出したが、ピット埋土はすべて土坑埋土と同様である。遺物は土坑中央部付近の埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうる遺物を１点掲載した。

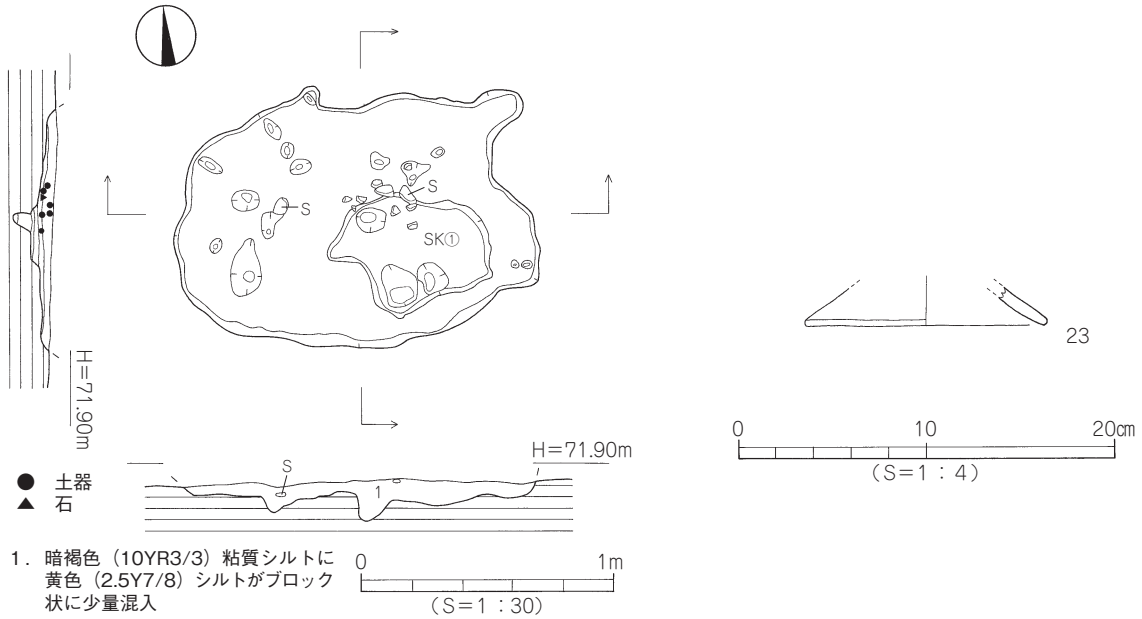
出土遺物

24は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するもので、胴部外面には２条１組のヘラ状工具による沈線文６条を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴より、SK3は弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ７（第18図）

１区中央部北寄りＤ８区に位置し、土坑西側は掘立7柱穴に切られている。第Ⅵ層上面での検出であり、土坑上面は第Ⅴ層が覆う。平面形態は東西方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径2.53m、短径1.17m、深さ52㎝を測る。断面形態は舟底状を呈するが、土坑西側壁体にはテラス状の平坦部をもつ。埋土は四層に分層され、１層：暗褐色（10YR3/3）粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入、



第16図　SK２測量図・出土遺物実測図

２層：暗褐色（10YR3/3)シルト、３層：褐灰色（10YR4/4）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入、４層：黒褐色（10YR2/2）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入である。断面観察より、SK7は３層堆積後に再掘削されたものと推測される。遺物は、主に４層中より弥生土器片が少量出土した。

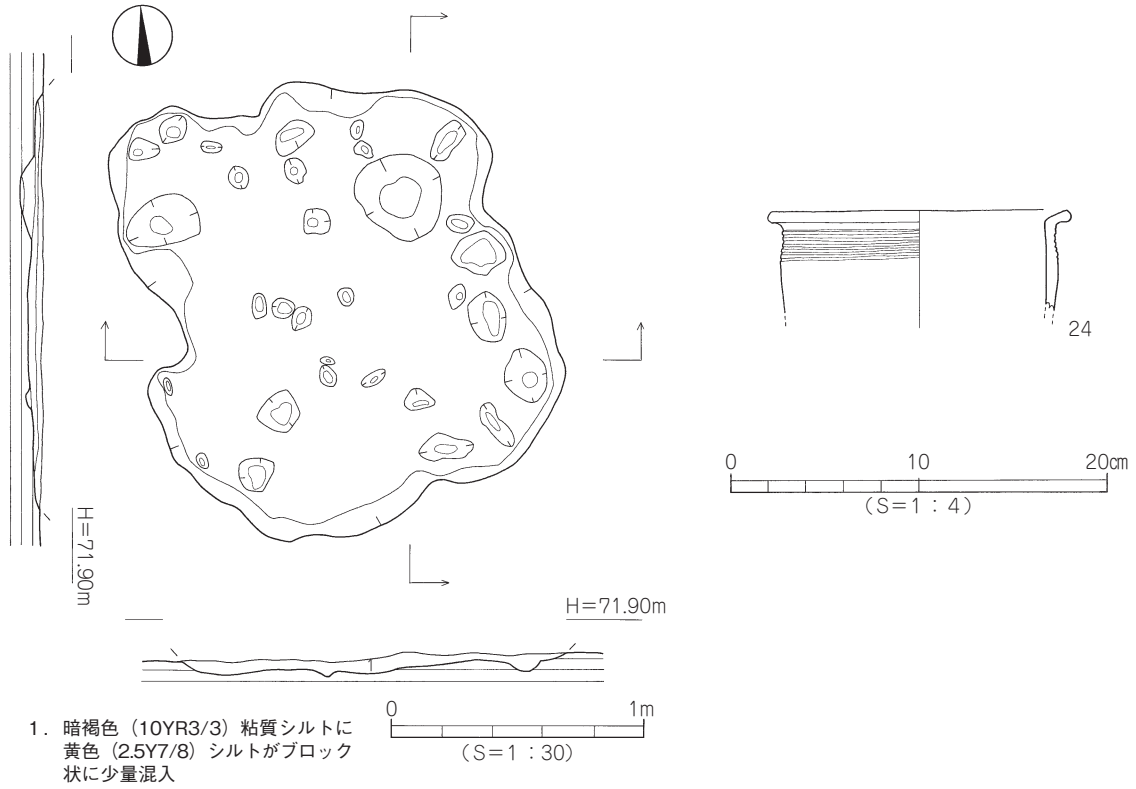
出土遺物

25 ～ 27は甕形土器。25は厚みのある平底で、底厚2.5㎝を測る。26は平底、27は上げ底の底部である。内外面共にナデ調整を施すが、27の外面には一部ハケメ痕が残る。

時期：出土した弥生土器の特徴より、SK7は弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ11（第19図、写真図版５）

１区北西部Ｂ７区に位置し、土坑上面は溝SD3が覆う。平面形態は南北方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径2.14m、短径1.28m、深さ27㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西側以外の壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、暗褐色（10YR3/3）を呈する粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものであるが、基底面には部分的に黒褐色（10YR2/2）シルトがみられる。土坑基底面中央部には径1.18m×1.10m、深さ15㎝程度の凹み（SK①）がみられるほか、径５～ 20㎝、深さ３～６㎝を測る小ピット５基を検出した。いずれも、埋土は土坑埋土と同様である。遺物は土坑中央部と南側の埋土上位付近にて、弥生土器片や径10 ～ 30㎝を測る河原石が数点出土したが、図化しうる遺物を１点掲載した。



第17図　SK３測量図・出土遺物実測図

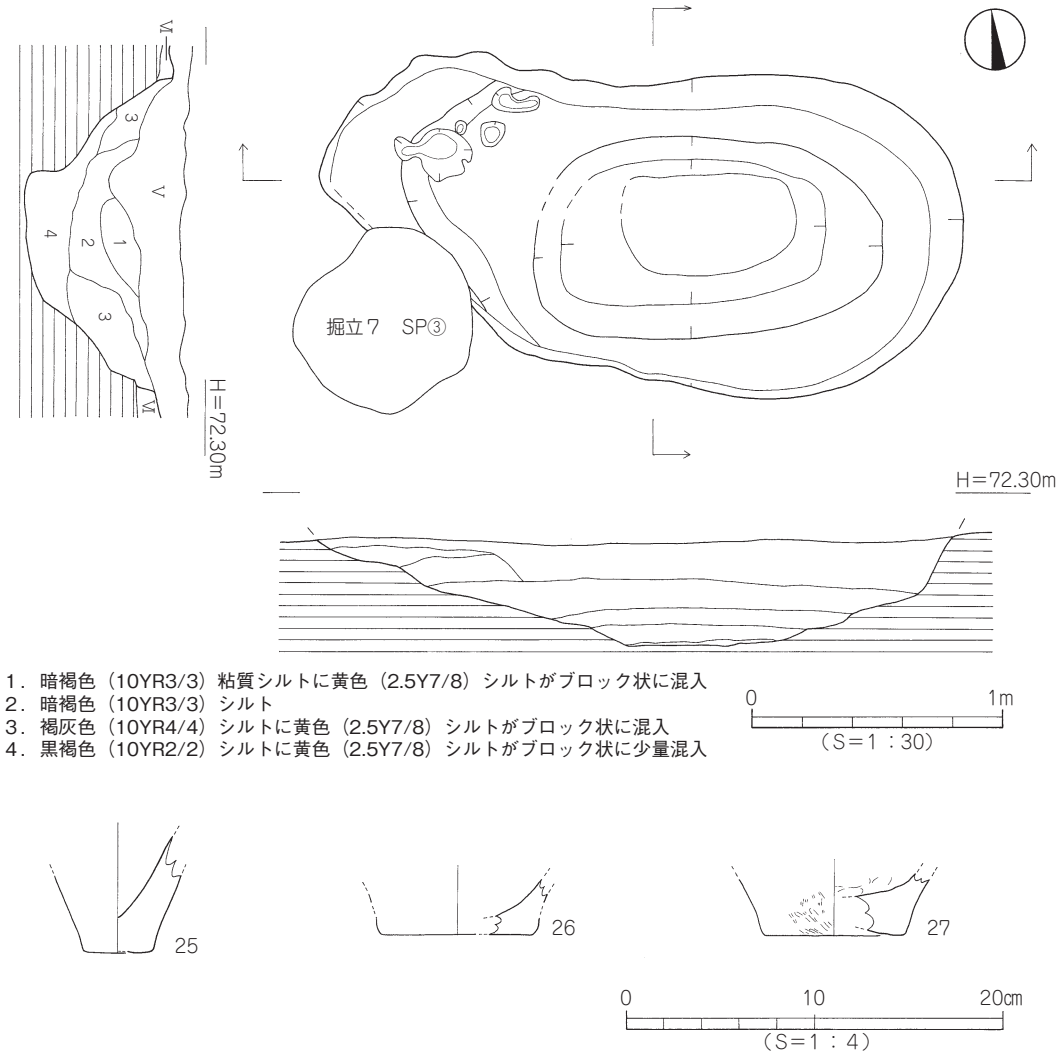
出土遺物

28は壺形土器。推定底径19.4cmを測る大型品の底部で、厚みのある平底をなす。器表面の調整は、摩滅が著しく不明である。

時期：出土遺物の特徴より、SK11は弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ29（第20図）

１区南東部Ｆ２に位置する。平面形態は東西方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径1.32m、短径1.12m、深さ13cmを測る。断面形態は丸みのある逆台形状を呈し、埋土は暗褐色（10YR3/3）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面中央部北寄りにて、径25～50cm、深さ３cm程度の凹み（SK①）を検出したほか、土坑基底面南西隅にて径15×50cm、深さ３cm程度の凹み（SK②）を検出したが、SK①・②の埋土は土坑埋土と同様である。また、土坑中央部と南側基底面にて径５～20cm、深さ３～５cm程度の小ピット２基を検出したが、ピット埋土は土坑埋土と同様である。



第18図　SK７測量図・出土遺物実測図

なお、土坑基底面には凹凸が数多くみられる。遺物は弥生土器片や径５～15cmの河原石が、土坑全体に散在して出土した。

出土遺物（写真図版９）

29･30は壺形土器。29は長頸壺の口頸部片で、口縁部内面に凸帯を貼り付ける。頸部にはヘラ描き沈線文１条と凸帯を施し、凸帯上には押圧を加える。30は胴部片で、ヘラ描き沈線文２条と「M」字状の凸帯を貼り付け、凸帯上段は連鎖状刻目文、下段には刻目を施す。外面には、ヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施す。

時期：出土した弥生土器の特徴より、SK29は弥生時代前期末から中期初頭とする。

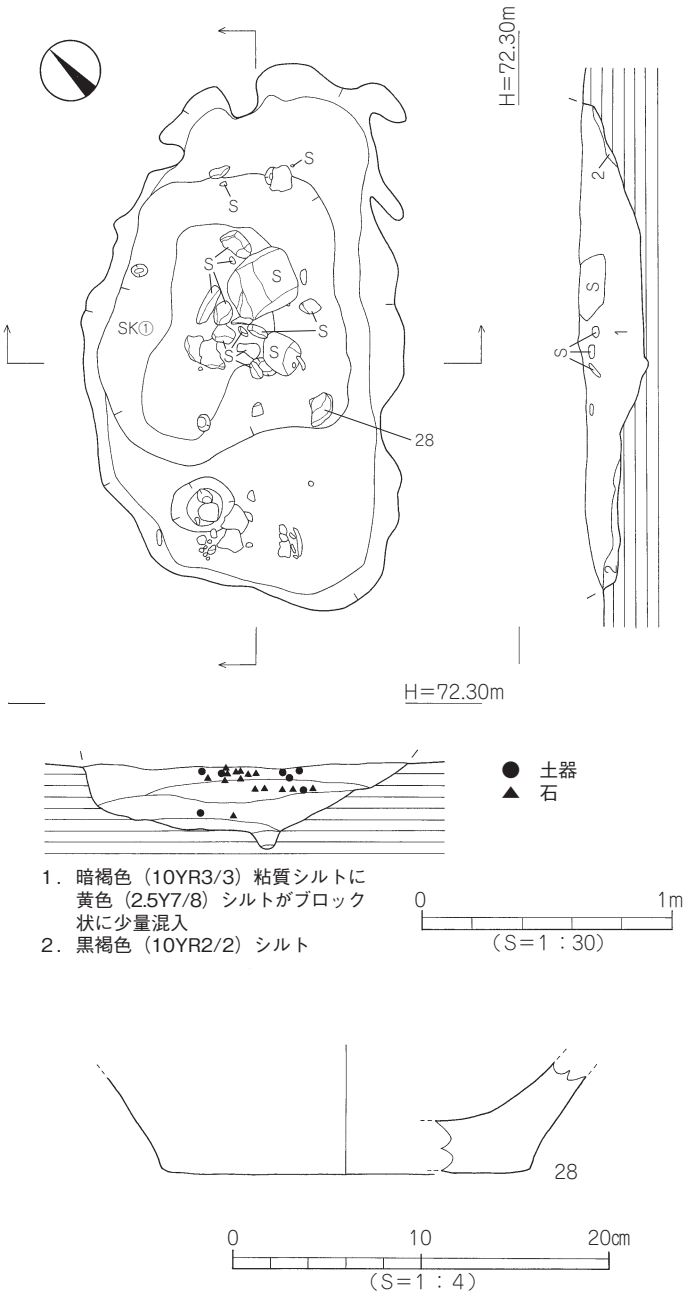
ＳＫ31（第21図）

１区南側Ｅ２区に位置する。平面形態は南北方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径1.71m、短径1.02m、深さ９cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は粘性の強い暗褐色（10YR3/3）シルトの単層である。土坑基底面は南側がやや凹んでおり、径５～９cm、深さ３～５cmを測る小ピット８基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様である。遺物は土坑北西部の埋土上位付近にて、弥生土器片が少量出土した。図化しうる遺物を３点掲載した。

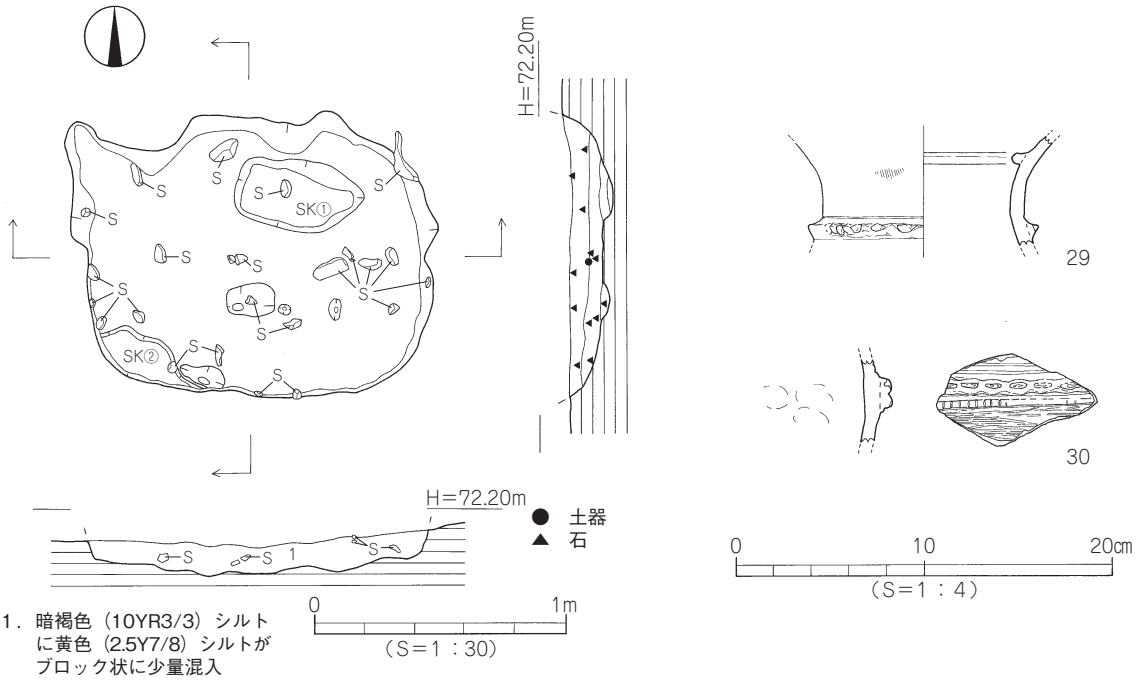
出土遺物

31は甕形土器、32は壺形土器。底部の完形品で31は平底、32は中央部が凹む上げ底をなす。胎土中には大粒の石英や長石を含み、32は赤色酸化土粒が少量混入する。33は所謂「コシキ」への転用品で、甕形土器の底部に径1.0cm大の穿孔を施す。

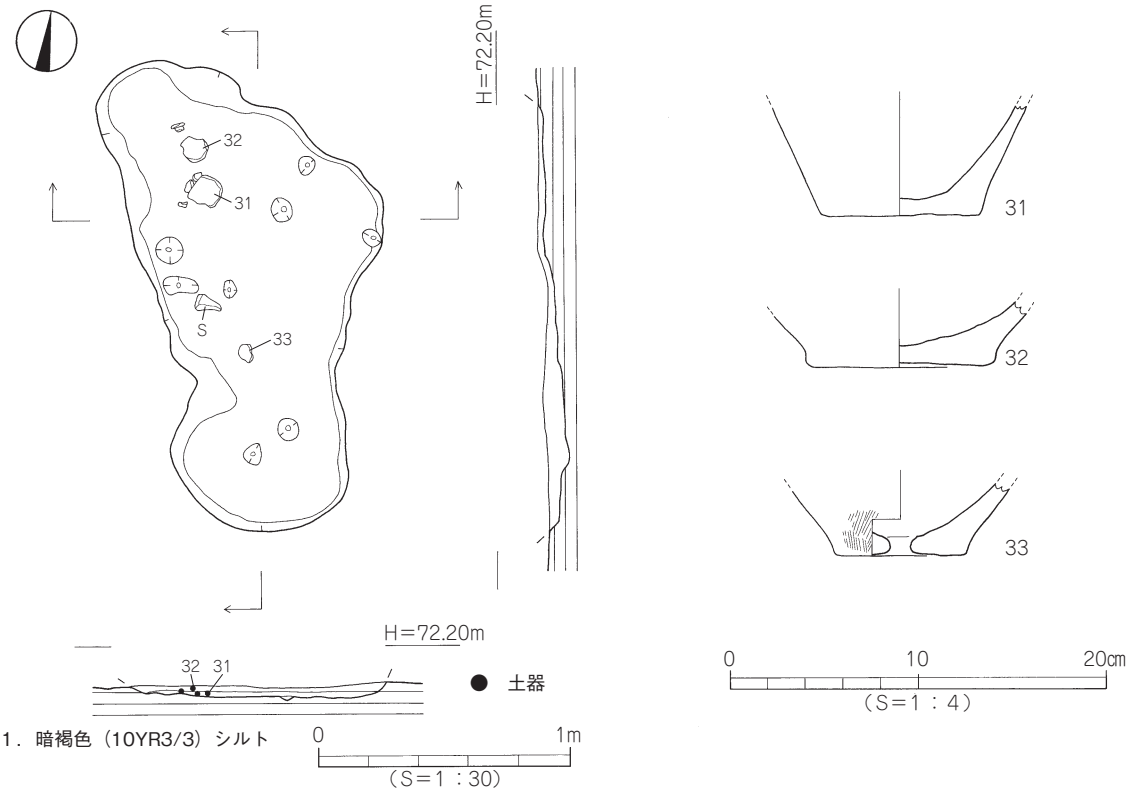
時期：出土遺物の特徴より、SK31は弥生時代前期末から中期初頭とする。



第19図　SK11測量図・出土遺物実測図



第20図　SK29測量図・出土遺物実測図



第21図　SK31測量図・出土遺物実測図

ＳＫ14（第22図）

１区西壁中央部付近、A・Ｂ５区に位置する。平面形態は東西方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径1.24m、短径0.77m、深さ21cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、北側と南側壁体は鋭角に立ち上がる。埋土は、暗褐色（10YR3/3)を呈するシルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は、西側から東側に向けて傾斜をなす。基底面東側と北側壁体中央部付近にて径３～６cm、深さ６cmを測る小ピット４基を検出したが、ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中より弥生土器の胴部小片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが土坑埋土がSK2やSK3などと酷似することから、SK14は概ね弥生時代前期末から中期初頭とする。

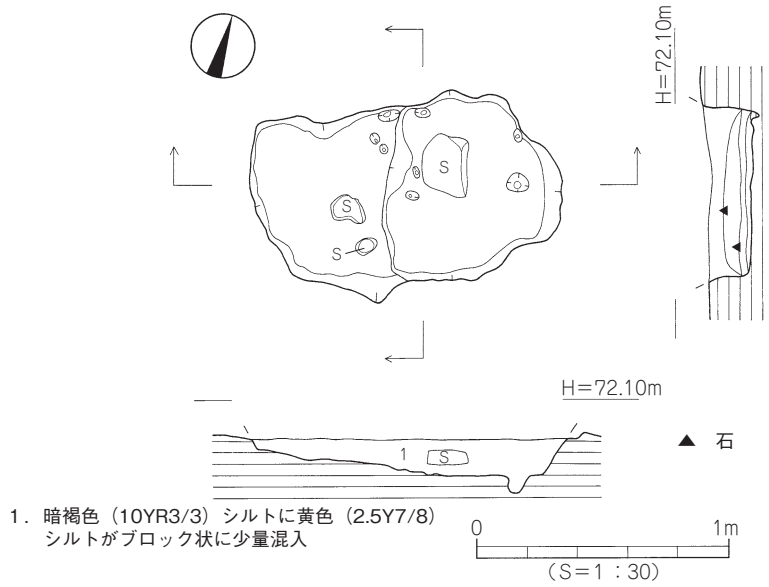
ＳＫ26（第23図）

１区北東隅Ｇ９区に位置し、土坑東側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅳ層が覆う。平面形態は南北方向に長い不整楕円形を呈し、規模は南北長0.72m、東西検出長0.49m、深さ５cmを測る。断面形態は丸みのある浅い逆台形状を呈し、埋土は粘性の強い暗褐色（10YR3/3）シルト単層である。土坑基底面はほぼ平坦で、基底面にて径５～35cm、深さ３～５cm程度の小ピット６基を検出したが、ピット埋土はすべて土坑埋土と同様の暗褐色シルトである。遺物は埋土中より弥生土器の胴部小片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが土坑埋土がSK1やSK33などと酷似することから、SK26は概ね弥生時代前期末から中期初頭とする。

ＳＫ30（第23図）

１区南東隅Ｆ２区に位置し、土坑東側はSP373〔埋土：暗灰色（10YR3/4）シルト〕に一部削平されている。平面形態は南北に長い不整楕円形を呈し、規模は長径1.63m、短径0.82m、深さは最深部で６cmを



第22図　SK14測量図

測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は粘性の強い暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルト単層である。土坑基底面には凹凸がみられ、径８～20cm、深さ３～６cmを測る小ピットを数基検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様の暗褐色シルトである。遺物は埋土中より弥生土器の胴部小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが土坑埋土がSK1やSK33などと酷似することから、SK30は概ね弥生時代前期末から中期初頭とする。

③ 長方形土坑

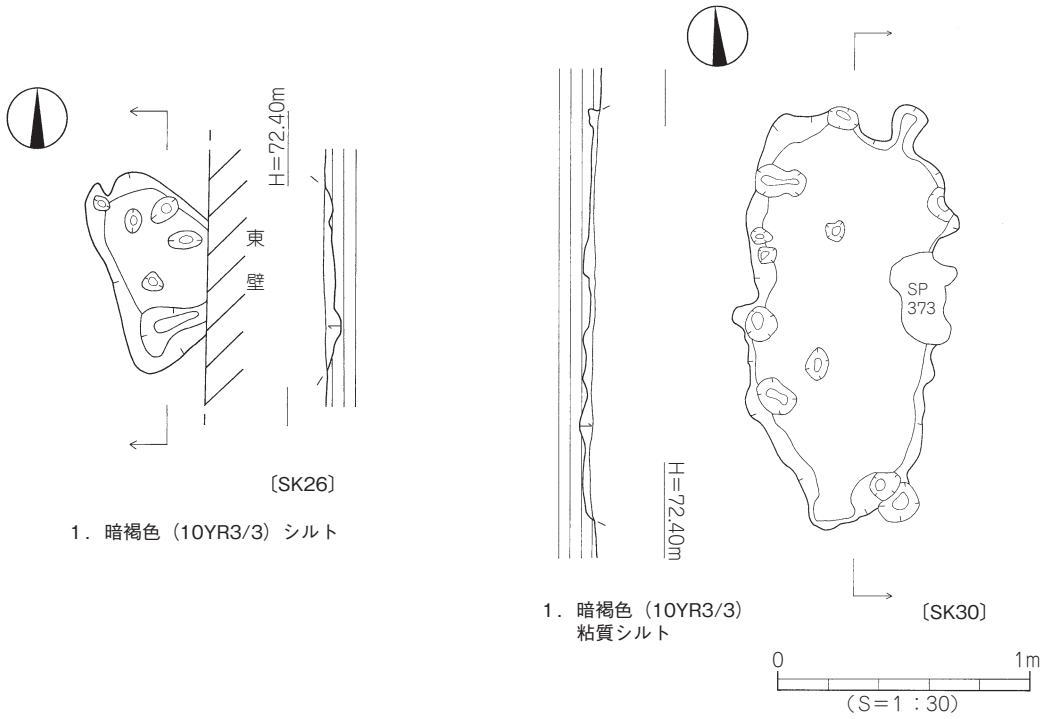
長方形土坑は、２基(SK23･34)を検出した。両者共に、第Ⅶ層上面での検出である。

ＳＫ23（第24図、写真図版５）

１区南東部Ｆ４区に位置する。平面形態は南北方向に長い長方形を呈し、規模は長さ2.60m、幅1.88m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は筒状をなす。埋土は暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面はほぼ平坦で、基底面北側と南側及び西側にて径５～25cm、深さ３～５cmを測る小ピット14基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様である。遺物は埋土中より、弥生土器片や石器が少量出土した。

出土遺物（写真図版９）

34･35は甕形土器で、口縁部の成形は34が貼り付け、35は折り曲げによるものである。34は口縁端面に刻目、胴部にヘラ描き沈線文３条を施す。胴部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキを施す。36は壺形土器の肩部片で、ヘラ描き沈線文７条以上と斜格子目文を施す。37はサヌカイト製の凹基無茎式石



第23図　SK26・30測量図

鏃で、両面に自然面を残す。

時期：出土した弥生土器の特徴より、SK23は弥生時代前期末から中期初頭とする。

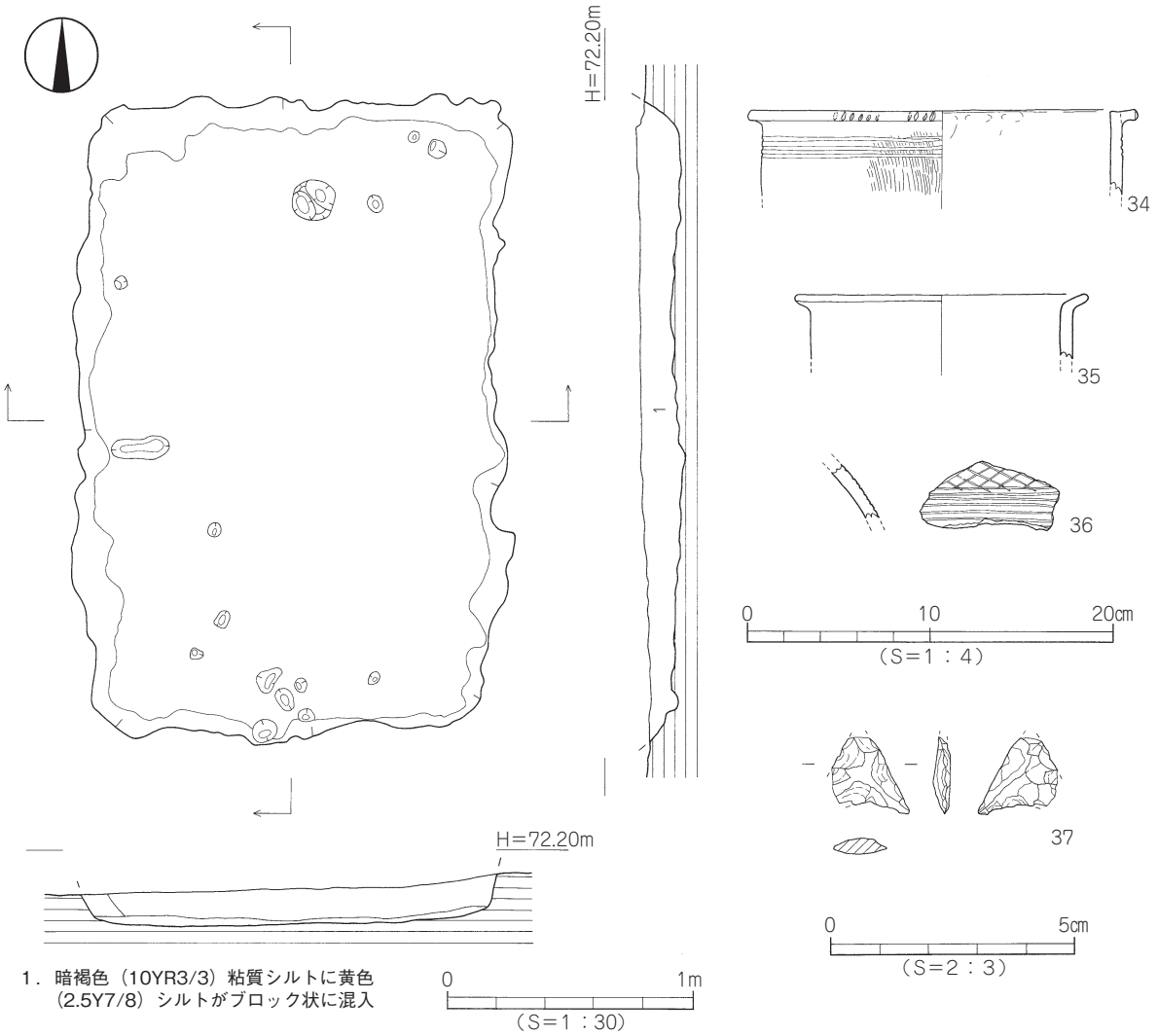
ＳＫ34（第25図）

２区南東部Ｌ12～M13区に位置する。平面形態は南北方向に長い不整長方形を呈し、規模は長さ2.53ｍ、幅1.72ｍ、深さ18㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は筒状をなす。埋土は、暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルトの単層である。土坑基底面は平坦であるが、わずかに北側から南側に向けて緩傾斜をなす（比高差２㎝）。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

38は甕形土器、39は壺形土器の底部で、38はわずかに上げ底、39は平底である。40は所謂「コシキ」への転用品で、甕形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。孔は楕円形を呈し、径0.6～1.5㎝を測る。

時期：出土遺物の特徴より、SK34は弥生時代前期末から中期初頭とする。



第24図　SK23測量図・出土遺物実測図

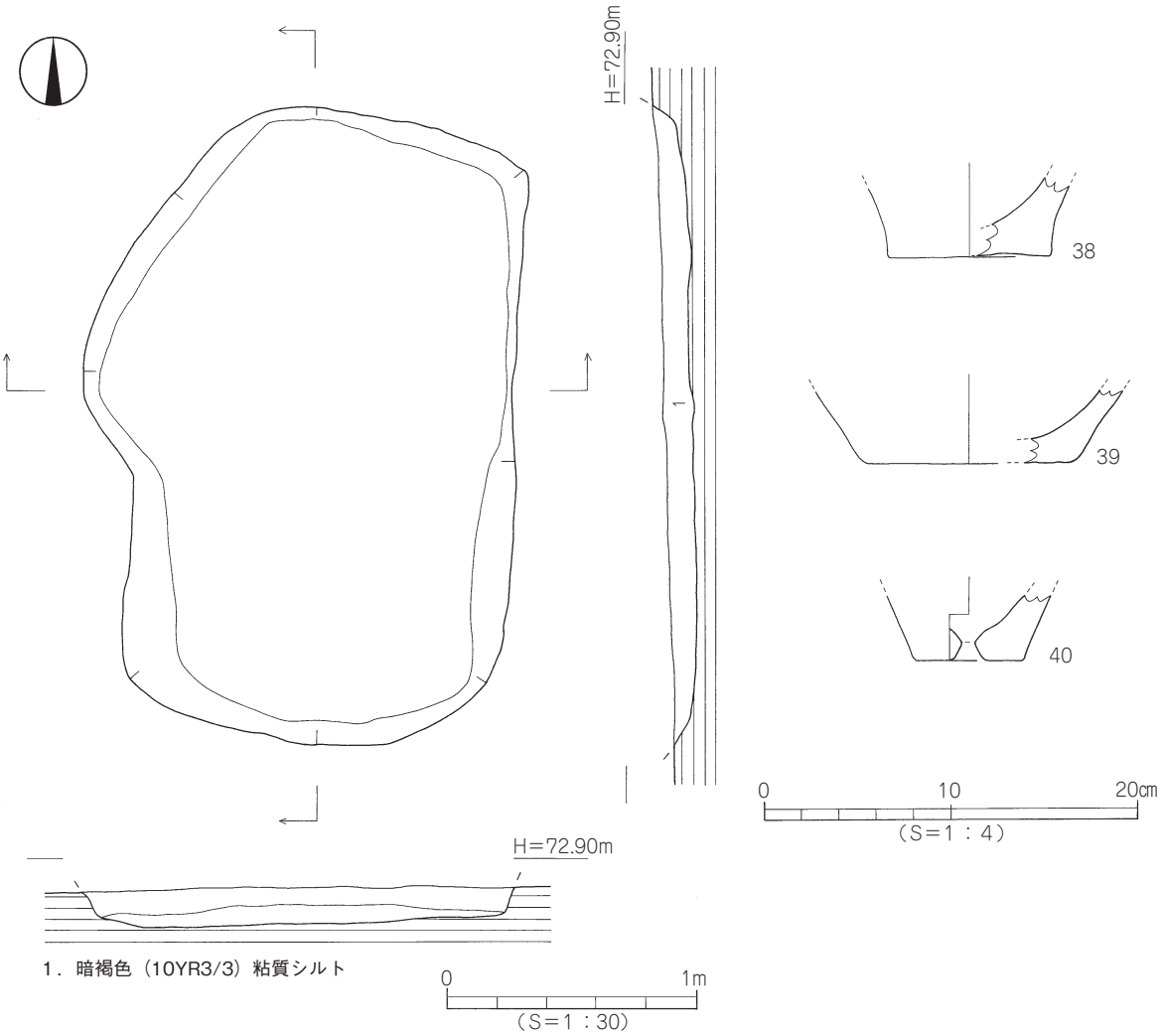
④ 不定形土坑

不定形土坑は、２基(SK20･32)を検出した。両者共に、第Ⅶ層上面での検出である。

ＳＫ20（第26図）

２区北西隅Ｊ・Ｋ16区に位置する不定形状の土坑で、土坑東側は近現代坑に削平され、西側は調査区外に続く。規模は東西検出長1.35m、南北長1.26m、深さ44cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は暗褐色(10YR3/3)を呈する粘質シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面は、東側から西側に向けて傾斜をなす。遺物は埋土中より弥生土器の胴部小片や径10 ～ 15cm大の河原石が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが土坑埋土がSK21と酷似することから、SK20は概ね弥生時代前期末から中期初頭とする。

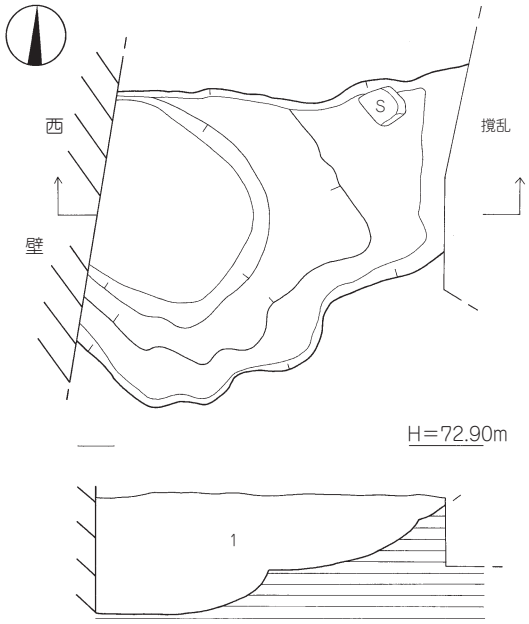


第25図　SK34測量図・出土遺物実測図

ＳＫ32（第26図）

１区中央部南東寄りＦ５区に位置する不定形状の土坑で、土坑北東部はSP400〔埋土：黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入〕に削平されている。規模は長さ1.88m、幅1.26m、深さ６cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は粘性の強い暗褐色（10YR3/3）シルト単層である。土坑基底面は平坦であるが、径３～22cm、深さ３～６cmを測る小ピット17基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様である。遺物は土坑埋土中より弥生土器の胴部片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、土坑埋土がSK34と酷似することからSK32は概ね弥生時代前期末から中期初頭とする。



1．暗褐色（10YR3/3）粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入　〔SK20〕

２）弥生時代後期

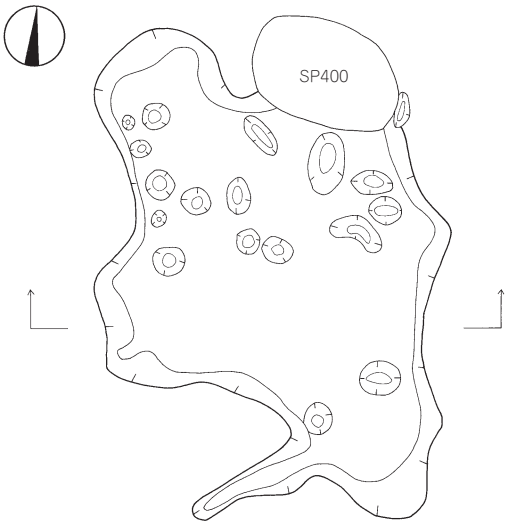
ＳＫ18（第27図）

２区南東部M12･13区で検出した東西方向に長い楕円形土坑で、規模は長径3.23m、短径1.41m、深さ11cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗褐色（7.5YR3/3）を呈する粘質シルト単層である。土坑基底面は、東側から西側に向けて緩やかな傾斜をなす。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうる遺物を、１点掲載した。

出土遺物

41は高坏形土器。坏脚部片で器壁は厚く、脚部内面にはシボリ痕を残す。内外面にはナデ調整を施す。

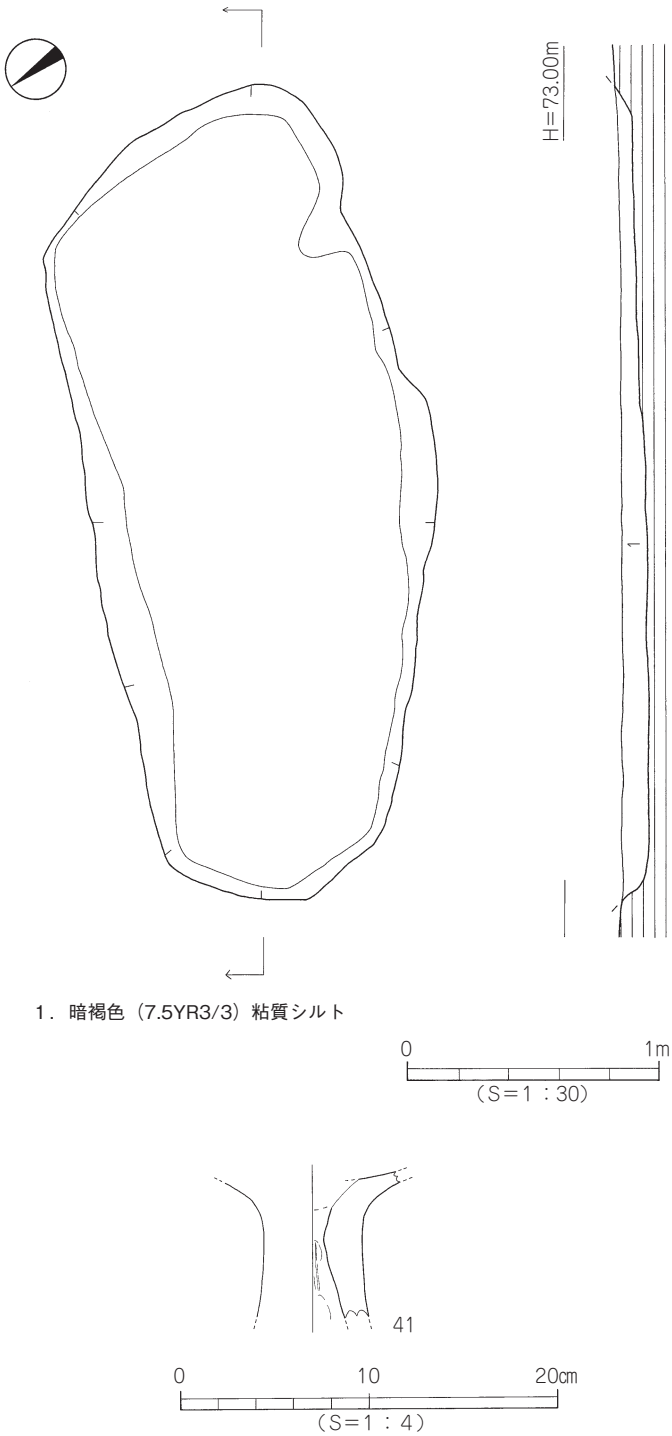
時期：出土遺物の特徴より、SK18は弥生時代後期後半とする。



1．暗褐色（10YR3/3）シルト　〔SK32〕

0　1m
（S＝1：30）

第26図　SK20・32測量図



第27図　SK18測量図・出土遺物実測図

（3）土器溜まり

調査では１区南側の第Ⅴ層掘り下げ時に土器が集中して出土する箇所を四箇所検出したが、明確な掘り方を確認することができなかったため『土器溜まり(SX)』として範囲の測量（第３図）と遺物の取り上げを行った(SX1：F2区、SX2：D2区、SX3：F4･5区、SX4：D･E4区にて検出)。ここでは、土器溜まりから出土した遺物の実測図のみを掲載した。

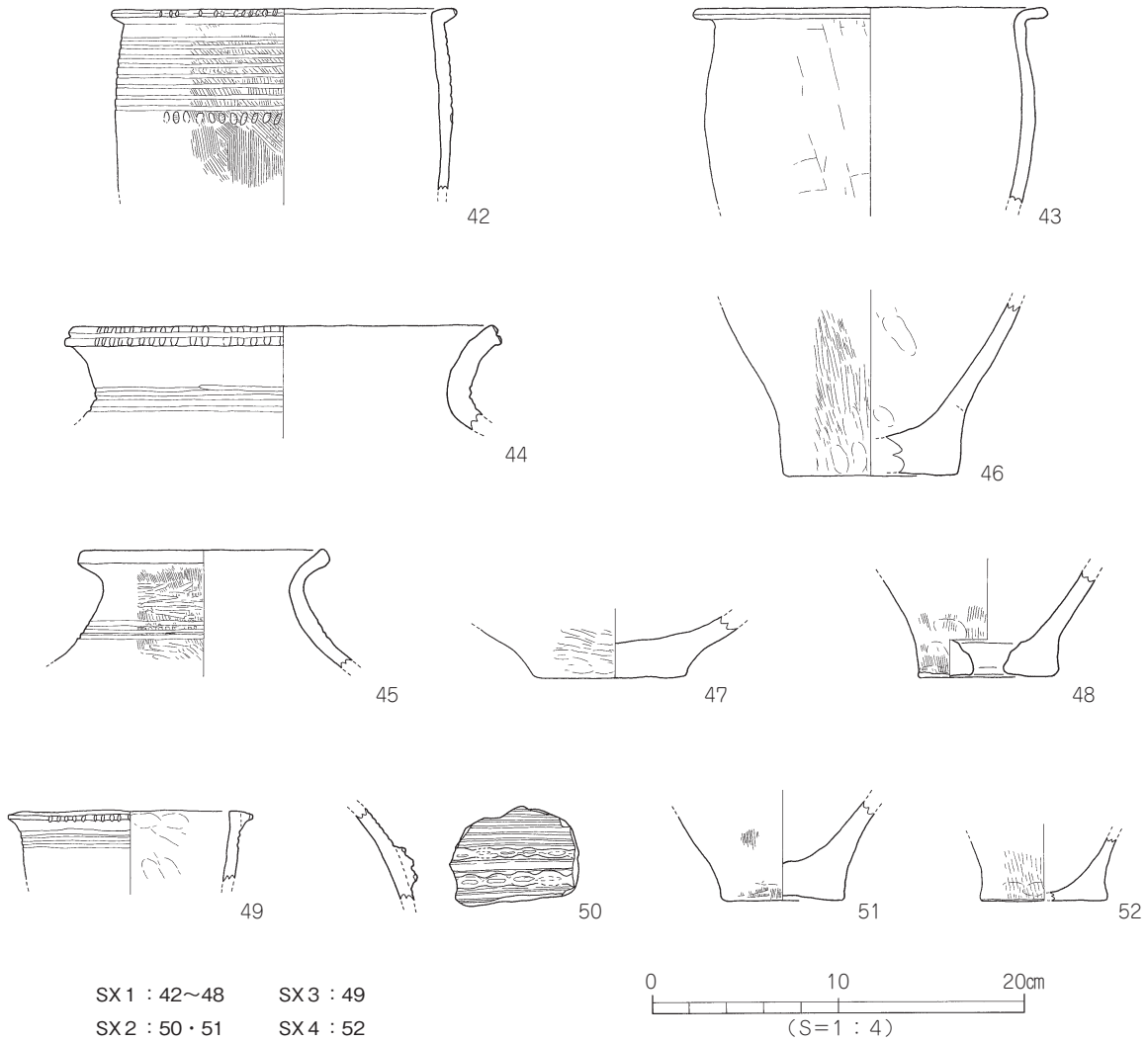
ＳＸ出土遺物

（第28図､写真図版10）

42 ～ 48はSX1、50･51はSX2、49はSX3、52はSX4出 土 品。42･43は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するもので、42の口縁下端面に刻目、胴部にはヘラ描き沈線文８条(2条1組)と刺突文１列を施す。42の胴部外面はハケメ調整、内面にはミガキ痕を残す。44･45は壺形土器。44は大型品で口縁部は短く外反し、口縁端面にはヘラ描き沈線文１条と刻目、頸部にヘラ描き沈線文４条を施す。45は広口壺で内傾する頸部に短く外反する口縁部をもち、頸部にはハケメ調整後、ヘラ描き沈線文３条を施す。46は甕形土器、47は壺形土器の底部で、46は厚みのある上げ底、47は平底をなす。48は所謂「コシキ」への転用品で、壺形土器の底部に径1.6㎝大の穿孔を施す。49は甕形土器。推定口径11.8㎝を測る小型品で口縁端面に刻目、胴部にヘラ描き沈線文３条を施す。なお、口縁部は粘土紐の貼付により成形されている。50は壺形土器の胴部片で「M」字状の凸帯を貼り付け、凸帯上

段と下段には連鎖状刻目文を施す。なお、凸帯上部にはヘラ描き沈線文７条以上、凸帯下部には沈線文２条以上を施す。51は壺形土器、52は甕形土器の底部で、51は上げ底、52は平底をなし、外面にはハケメ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴より、SX１～4は弥生時代前期末から中期初頭とする。



第28図　SX１～４出土遺物実測図

〔２〕古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴住居３棟、掘立柱建物15棟、溝13条、土坑１基である。すべて第Ⅶ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅳ層中もしくは第Ⅳ層上面から掘削された遺構である。なお、検出した遺構は古墳時代後期から終末に時期比定される。

（１）竪穴住居

ＳＢ１（第29図）

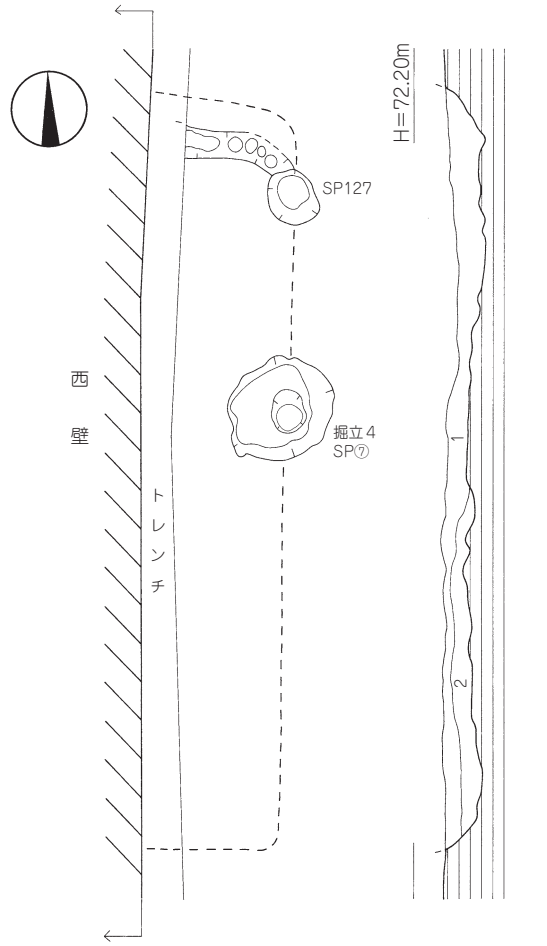
１区南西部Ａ３・４区に位置し、住居西側は調査区外に続く。平面調査では住居に伴う周壁溝の一部のみを検出したが、１区西壁の土層観察により住居掘り方や埋土を確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長4.70ｍ、東西検出長0.81ｍ、壁高24㎝を測る。住居埋土は二種類あり、上層は黒褐色（10YR3/1）を呈する粘質シルト、下層は褐色（7.5YR4/4）を呈する粘質シルトである。周壁溝は住居北側にて検出され、幅15㎝、深さ８㎝を測り、埋土は黒褐色シルト単層である。遺物は周壁溝内より土師器と須恵器の小片が少量出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や出土遺物よりSB1の廃棄･埋没時期は概ね古墳時代後期、６世紀後半とする。

ＳＢ２（第30図）

２区南東部M11～Ｎ12区に位置し、住居北東部や南西部は掘立9柱穴に削平されている。平面調査では、住居東側壁体と住居埋土や周壁溝の一部を検出した。平面形態は長方形を呈するものと考えられ､規模は東西長4.40ｍ、南北長3.96ｍ、壁高は６㎝を測る｡住居埋土は黒褐色（10YR3/1）を呈する粘質シルトに､黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。住居北側壁体中央部にて焼土塊（15㎝×15㎝×29㎝）を検出したが、検出状況からカマドが存在した可能性がある。住居底面からは径40～45㎝､深さ15㎝を測るピットのほか、径３～５㎝､深さ３～７㎝を測る小ピットを多数検出した。これらのピット埋土は、すべて黒褐色シルトである。このほか、住居北西部にて径0.8～1.7ｍ、深さ３～５㎝を測る楕円形状の土坑２基（SK①・②）を検出したが、住居に伴うものかは判断できなかった。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が少量出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが掘立9との切り合いや出土遺物より、SB2の廃

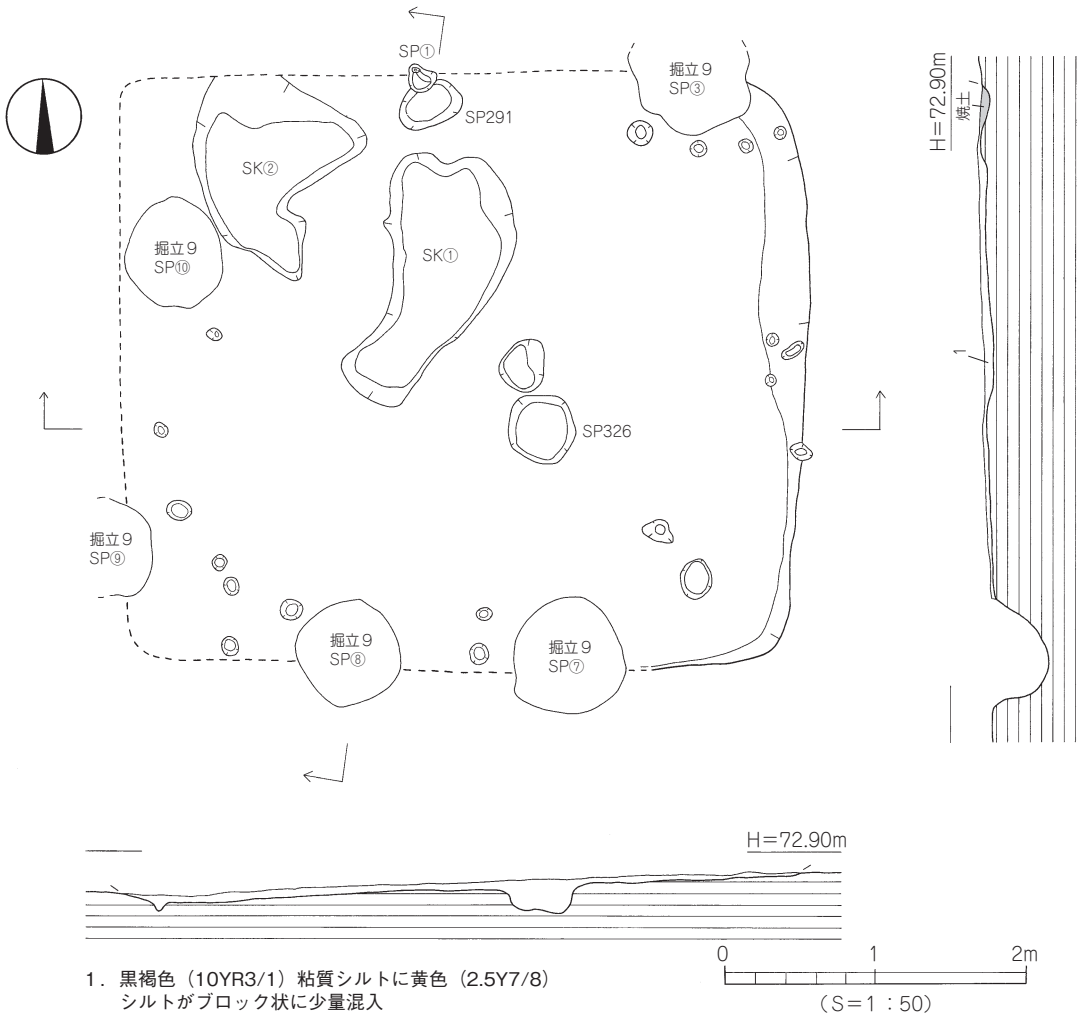


第29図　SB１測量図

棄・埋没時期は概ね古墳時代終末以前とする。

ＳＢ３（第31･32図、写真図版６）

１区南側Ｄ･Ｅ３区に位置し、住居北側や南側は掘立14に一部削平されている。調査では、住居に伴う周壁溝や住居埋土の一部を検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長4.60ｍ、東西長4.20ｍ、壁高は４㎝を測る。住居埋土や周壁溝埋土は、黒褐色（10YR3/1）を呈する粘質シルト単層である。住居北側壁体中央部にて、造り付けカマドを検出した。カマドは馬蹄形状を呈するものと思われ、調査では左右の袖部のみが残存していた。カマドは長さ90㎝、幅80㎝、深さ13㎝程度の凹みを掘削後、灰褐色土や黒褐色土のほか焼土を用いて構築されている。このほか、周壁溝はほぼ全周しており、幅６～15㎝、深さ４～７㎝を測る。住居床面からは、径３～40㎝、深さ５～25㎝を測るピットを多数検出した。ピット埋土は、すべて黒褐色シルトである。遺物は住居埋土中より、土師器や須恵器の小片が数点出土した。このうち、図化しうる遺物を１点掲載した。



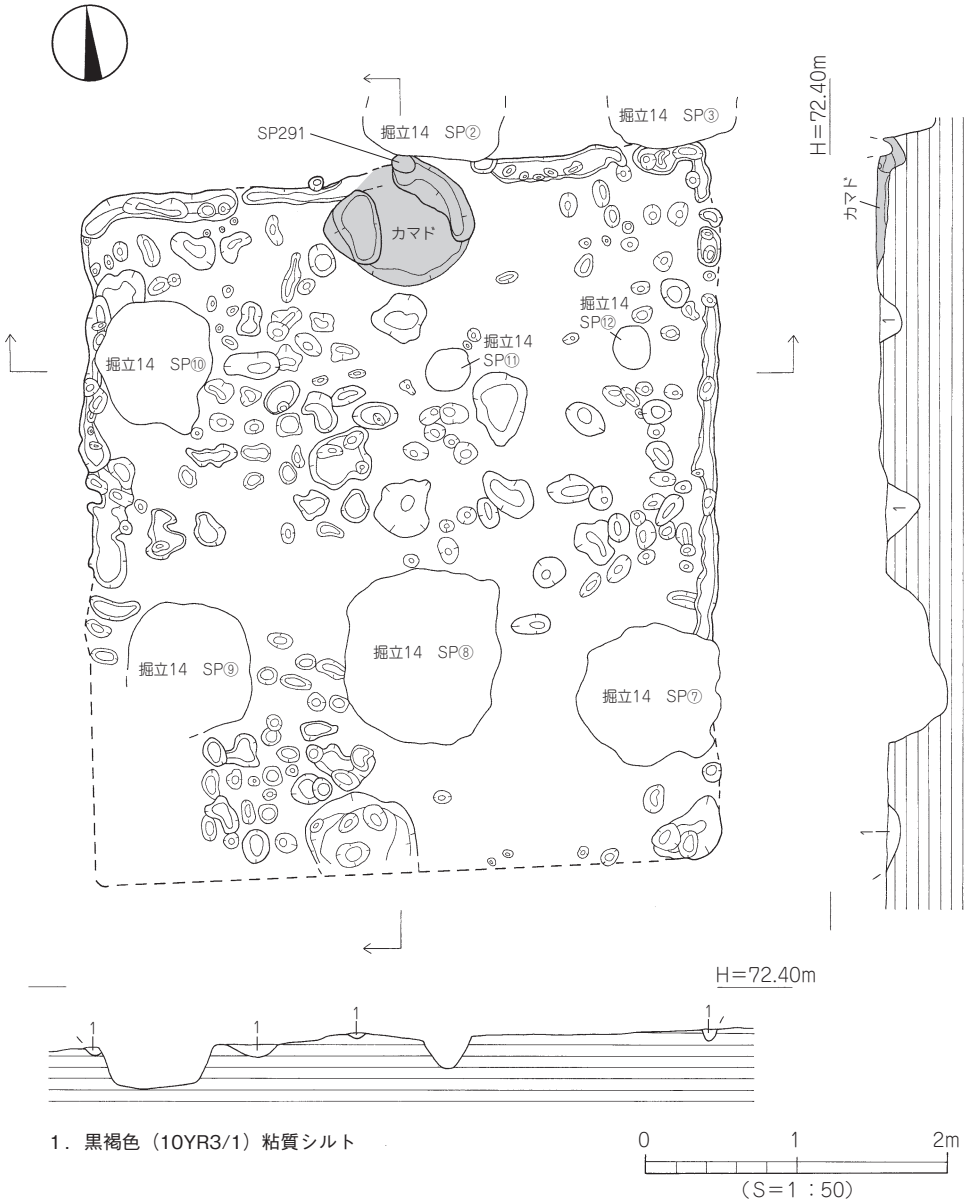
1．黒褐色（10YR3/1）粘質シルトに黄色（2.5Y7/8）
シルトがブロック状に少量混入

第30図　SB２測量図

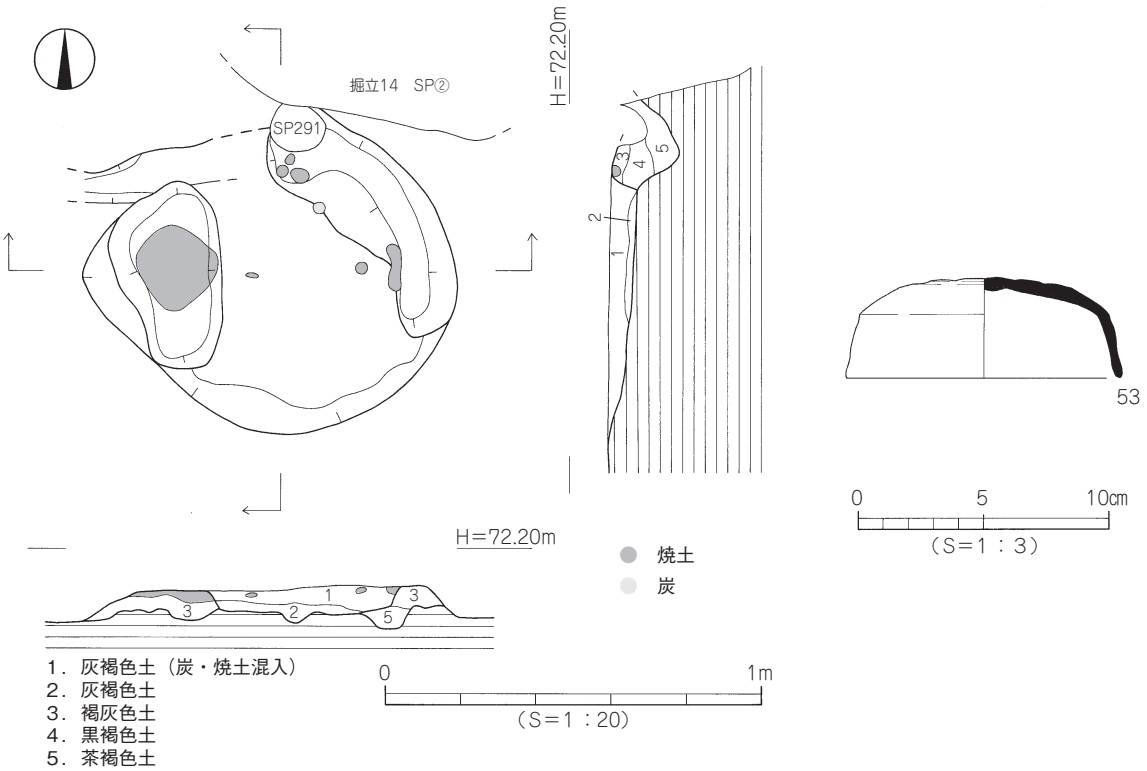
出土遺物（写真図版10）

53は須恵器坏蓋。1/5の残存で、推定口径10.8cm、器高3.9cmを測る。天井部は平坦で、口縁端部は尖り気味である。天井部外面には回転ヘラケズリを施すが、回転台から切り離す際のヘラ切り痕が残る。

時期：出土遺物の特徴と掘立14に先行することから、SB3の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、６世紀後半とする。



第31図　SB３測量図



第32図　SB３カマド測量図・SB３出土遺物実測図

（２）掘立柱建物

掘立柱建物は15棟（１区:10棟、２区: ５棟）を検出した。建物を構成する柱穴からの遺物の出土は少なく時期特定は難しいが、切り合いや埋土等から概ね古墳時代終末期以降に構築された建物である。なお、建物方位で分類すると、以下の三種類（建物Ａ～Ｃ類）となる。また、建物規模では１×２間の建物をはじめ、２×２間、３×２間及び４×１間以上の建物などがあり、床面積では最小の建物が9.39㎡、最大の建物は19.91㎡を測る。ここでは、建物の方位別に詳細を説明する。

建物Ａ類：真北方向　　：２棟〔掘立2･3〕
建物Ｂ類：北西－南東方向：３棟〔掘立1･8･11〕
建物Ｃ類：北東－南西方向：10棟〔掘立4･5･6･7･9･10･12･13･14･15〕

１）建物Ａ類

掘立２（第33図）

１区南側Ｃ１～Ｄ２区に位置する側柱構造の建物で、建物南側柱穴の一部は溝SD1に削平され、建物北側と東側及び南西側の柱穴は掘立3柱穴と切り合い、掘立2が掘立3に先行する。３×２間規模を測る南北棟で、10基の柱穴で構成される。桁行長4.86m、梁行長3.90m、床面積18.95㎡を測り、柱穴間隔は桁間1.5 ～ 1.7m、梁間1.9 ～ 2.0mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.64 ～

1.05m、深さ11 ～ 37㎝を測る。柱穴埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に少量混入するものである。柱痕は４基の柱穴(SP①･②･④･⑥)で検出されたが、断面観察では確認することができず柱痕埋土は不明である。遺物は弥生土器や土師器、須恵器の破片が数点出土した。このうち、SP①とSP④から出土した遺物を図化して掲載した。

出土遺物

54･55はSP④、56はSP①出土品。54は弥生土器の甕形土器。口縁部は逆「Ｌ」字状を呈し、口縁端面に刻目、胴部には凸帯を貼り付け凸帯上に押圧を加える。弥生時代中期中葉。55･56は須恵器坏身の小片。推定ではあるが、55のたちあがり径は11.8㎝、56は14.0㎝を測る。たちあがりは短く内傾し、55の受部は上外方にひねり出され、56の受部端には沈線状の凹みが巡る。

時期：出土した須恵器の特徴より、掘立2は7世紀初頭～前半の建物とする。

掘立３（第34図）

１区南側Ｃ１～Ｄ２区に位置する側柱構造の建物で、検出状況から掘立2を建て替えた建物である。建物北西隅の柱穴は掘立2の柱穴を使用し、その他の柱穴は掘立2と同じ位置にて掘削されている。３×３間規模の建物で、12基の柱穴で構成される。桁行長4.04m、梁行長3.90m、床面積15.75㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.2 ～ 1.5m、梁間1.0 ～ 1.5mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.42 ～ 0.86m、深さ８～ 29㎝を測る。柱穴掘り方埋土は黒色(5Y2/1)シルトに、黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に少量混入するものである。柱痕は４基の柱穴(SP④･⑧･⑨･⑪)で検出され、規模は径10 ～ 15㎝、柱痕埋土は褐灰色(10YR4/2)シルトである。遺物は柱穴掘り方埋土内より、弥生土器や土師器、須恵器の破片が少量出土した。このうち、SP⑥から出土した遺物を図化して掲載した。

出土遺物(写真図版10)

57は須恵器坏身。1/4の残存で、たちあがり径は約10.4㎝、器高4.2㎝を測る。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部を尖り気味に仕上げる。底部は平底で、底部外面1/3の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。なお、底部外面には自然釉が付着している。

時期：出土遺物の特徴と掘立2との前後関係より、掘立3は７世紀前半の建物とする。

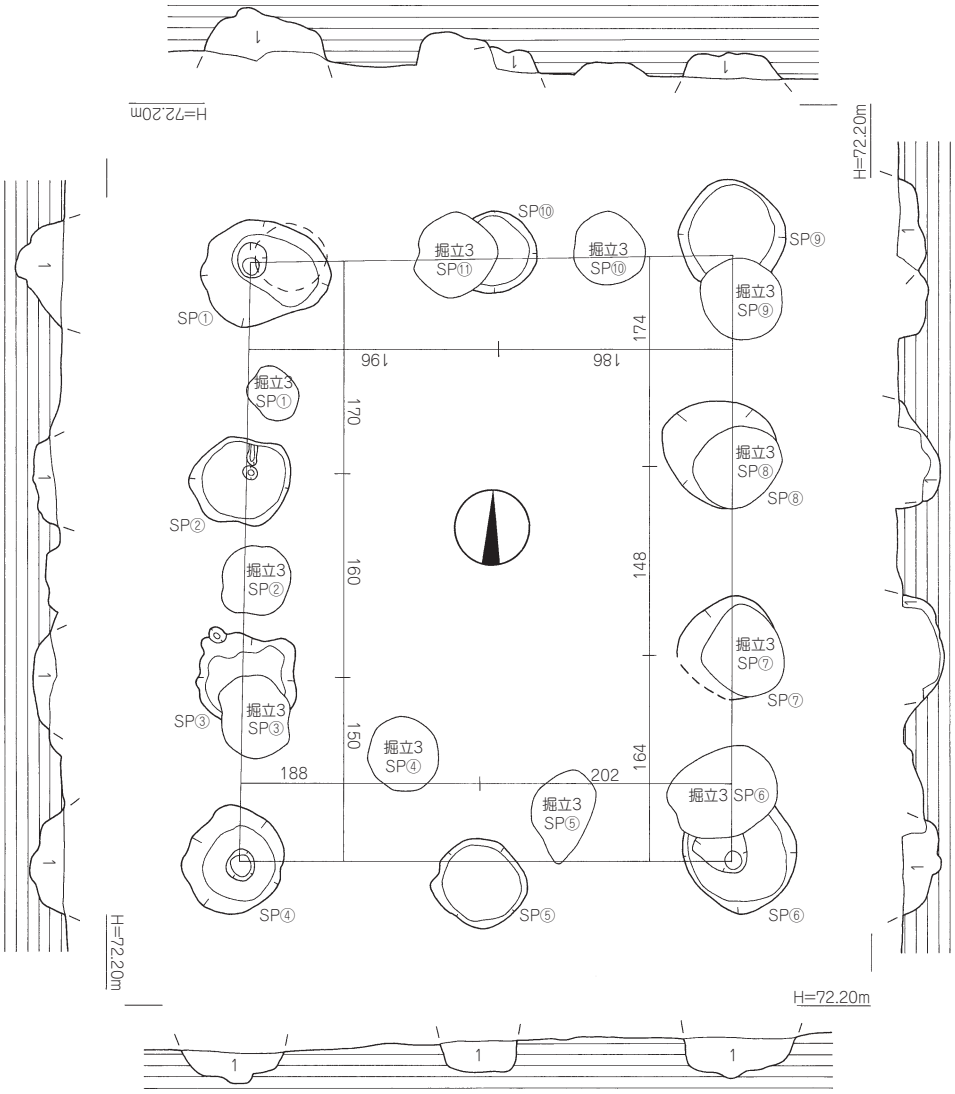
２）建物Ｂ類

掘立８（第35図）

２区南西部Ｊ･Ｋ12区に位置する東西棟で、東西２間、南北２間規模の側柱構造建物であり、７基の柱穴を検出した。建物方位はN－9°－Wであり、桁行長4.50m、梁行長3.43m、床面積15.43㎡を測る。柱穴間隔は、桁間2.0 ～ 2.5m、梁間1.6 ～ 1.8mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.70 ～ 0.80m、深さ40 ～ 50㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色(10YR3/1)シルトである。柱痕はSP⑤にて検出されたが断面観察では確認しておらず、柱痕埋土は不明である。遺物は土師器や須恵器の小片が数点出土した。このうち、SP②とSP⑤から出土した遺物を図化して掲載した。

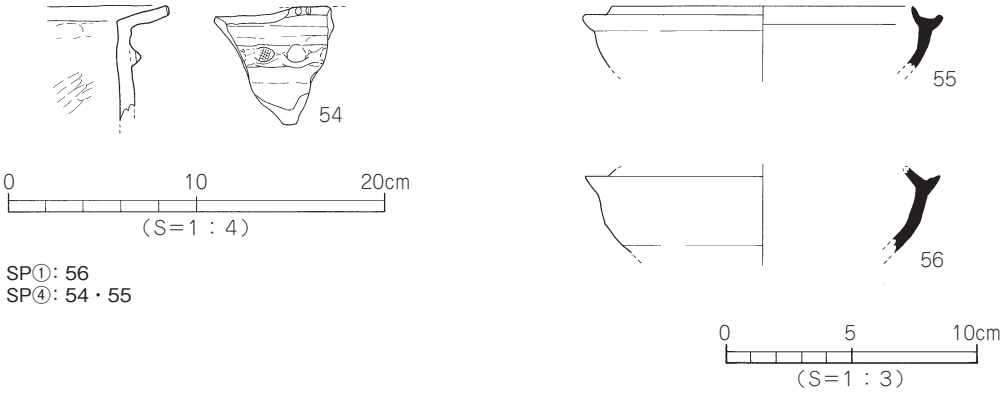
出土遺物

58はSP②、59はSP⑤出土品。58･59は須恵器坏身の小片。推定ではあるが、58のたちあがり径は12.2㎝を測る。たちあがりは短く内傾し、受部は太く上外方に短くのびる。59は赤橙色を呈する赤焼け土器で、胎土中に赤色酸化土粒を少量含む。両者共に、たちあがり端部を尖り気味に仕上げる。



1．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入

0　1　2m
（S＝1：60）



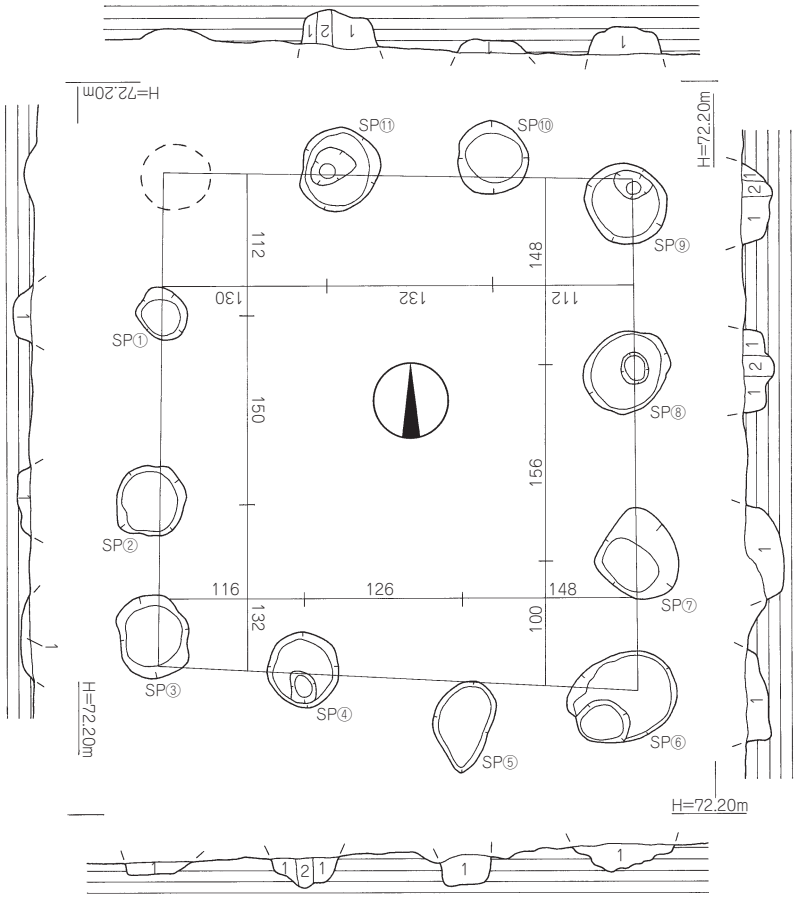
SP①: 56
SP④: 54・55

第33図　掘立２測量図・出土遺物実測図

時期：出土遺物の特徴より、掘立8は７世紀初頭～前半の建物とする。

掘立11（第36図）

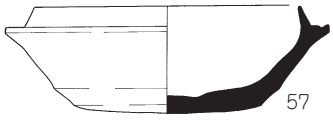
２区中央部西寄り、Ｊ13～Ｋ14区に位置する東西棟で、建物南側柱穴は土坑SK17を切っている。２×２間規模の側柱構造建物で、８基の柱穴で構成される。建物方位はN－5°－Wであり、桁行長3.83m、梁行長3.49m、床面積13.36㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.7～2.1m、梁間1.6～1.9mである。各柱穴の平



1．黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入
2．褐灰色（10YR4/2）シルト〔柱痕〕

0　1　2m
（S＝1：60）

SP⑥：57



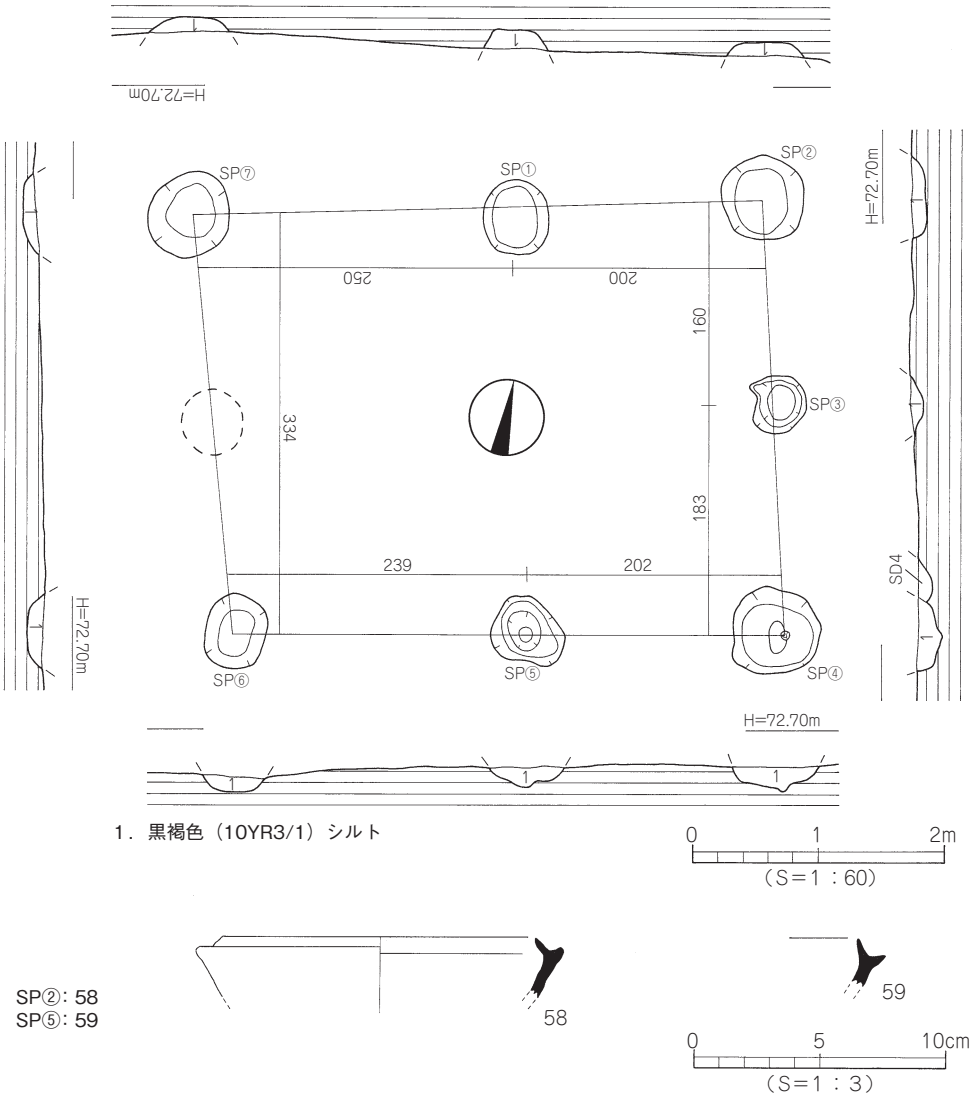
0　5　10cm
（S＝1：3）

第34図　掘立３測量図・出土遺物実測図

面形態は円形または楕円形を呈し、径0.57 ～ 0.96m、深さ24 ～ 47cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。柱痕は、検出されていない。遺物は弥生土器や土師器、須恵器の破片が比較的数多く出土した。このうち、SP①･②･⑥･⑧から出土した遺物を図化して掲載した。

出土遺物（第37図）

60 ～ 62･64･65･69はSP⑥、63･66はSP⑧、67はSP①、68はSP②出土品。60 ～ 66は須恵器。60 ～ 62は坏蓋片で、推定口径12.0 ～ 14.2cmを測る。天井部と口縁部との境界はわずかに稜をなし、口縁端部は尖る。なお、62は色調がにぶい赤褐色を呈する赤焼け土器である。63･64は坏身で、63のたちあがり径は推定12.0cm、64は推定11.0cmを測る。65は無蓋高坏の坏部片で坏部中位に沈線１条が巡り、口縁部には焼け歪みがみられる。66は甕の口頸部片で口縁部は長方形状に肥厚し、口縁部内面は上方に拡張される。66は、色調が橙色を呈する赤焼け土器である。67は土師器の椀で口縁端部は丸く仕上げ、体部



第35図　掘立８測量図・出土遺物実測図

外面にはヘラケズリを施す。68は弥生土器。甕形土器の口頸部片で、頸部内面にはヨコ方向の細かなヘラミガキを施す。弥生前期。69は鉄製の刀子である。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、掘立11は７世紀初頭～前半の建物とする。

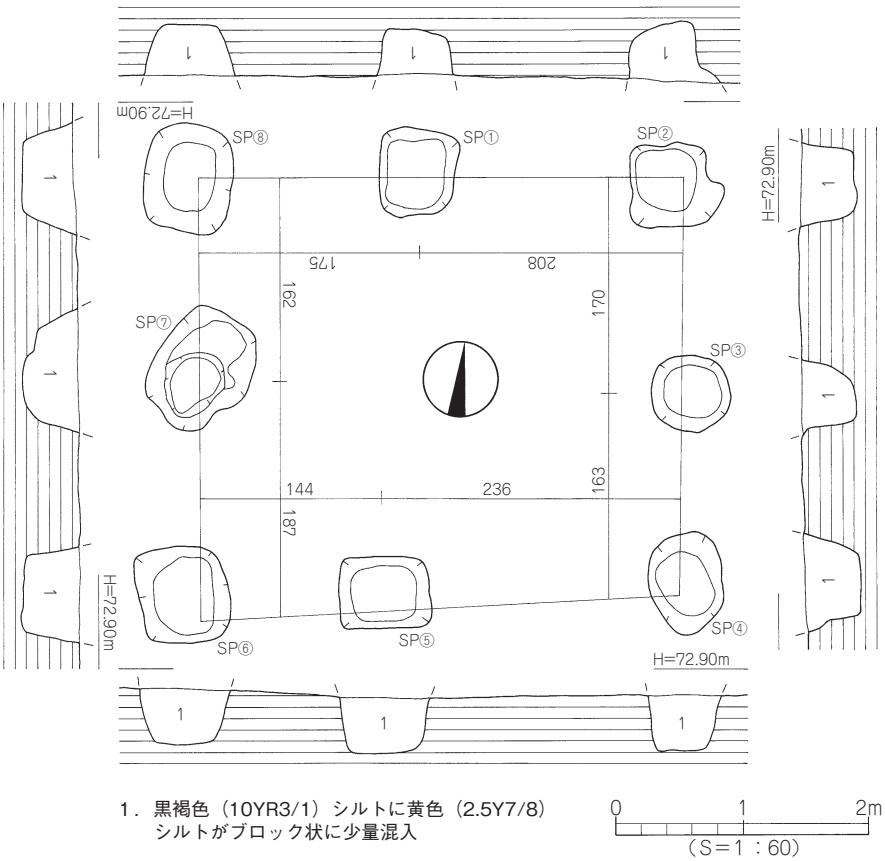
掘立１（第38図）

１区南西隅Ａ１・２区に位置する建物で、南北３間、東西１間分を検出した。建物方位は、N－2°－Eであり、南北長4.62m、東西検出長1.66m、検出床面積7.66㎡を測る。柱穴間隔は、1.4 ～ 1.7mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.36 ～ 0.72m、深さ12 ～ 26cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/1）を呈するシルトである。柱痕は３基の柱穴（SP③・④・⑤）で検出され、径15 ～ 20cm、深さ16 ～ 20cmを測り、柱痕埋土は黒色（10YR2/2）を呈する粘質シルトである。遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器や須恵器の小片が数点出土した。このうち、SP③から出土した遺物を図化して掲載した。

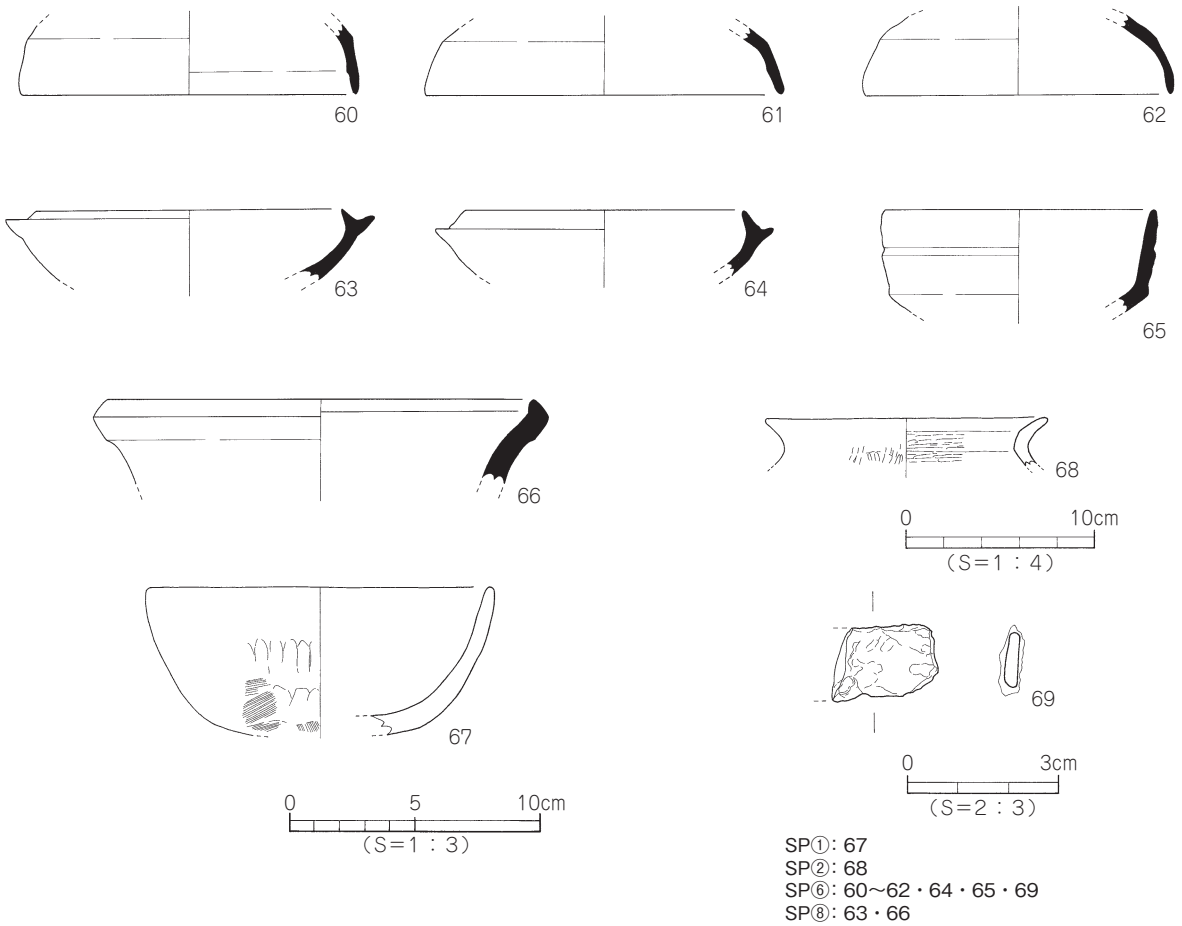
出土遺物

70は弥生土器の甕形土器。くびれをもつ上げ底の底部片で、外面には一部ミガキ痕を残す。弥生時代中期後半。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、掘り方埋土が掘立8に酷似することや出土した須恵器



第36図　掘立11測量図



第37図　掘立11出土遺物実測図

などから、掘立1は７世紀初頭～前半の建物とする。

３）建物Ｃ類

掘立13（第39図、写真図版６・７）

１区北側Ｄ８～Ｅ９に位置する東西棟で、東西３間、南北２間規模の総柱構造の建物であり、12基の柱穴で構成される。建物内側には、床を支えるための束柱と思われる柱穴２基（SP⑪･⑫）を検出した。建物方位はN－25°－Eであり、桁行長4.86m、梁行長3.85m、床面積18.71㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.4 ～ 1.7m、梁間1.9mである。側柱を構成する柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は径0.70 ～ 1.26m、深さ52 ～ 72cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/1）シルトを基調とし、柱穴下部には褐色（7.5YR4/4)シルトや黄色（2.5Y7/8）シルトが堆積する。柱痕は８基の柱穴（SP①～③･⑥～⑩）で検出され、径15 ～ 20cm、深さ45 ～ 55cmを測る。柱痕埋土は、褐灰色（10YR4/1）シルトである。束柱を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径35 ～ 45cm、深さ５～ 12cmを測る。柱穴掘り方埋土は、側柱柱穴と同様の黒褐色（10YR3/1）シルトである。柱痕は２基の柱穴で検出され、径10 ～ 15cmを測り、柱痕埋土

は褐灰色(10YR4/1)シルトである。遺物は、側柱を構成する柱穴掘り方埋土内より弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか石鏃や剥片などが出土した。このうち、SP②･⑨･⑩から出土した遺物を図化して掲載した。

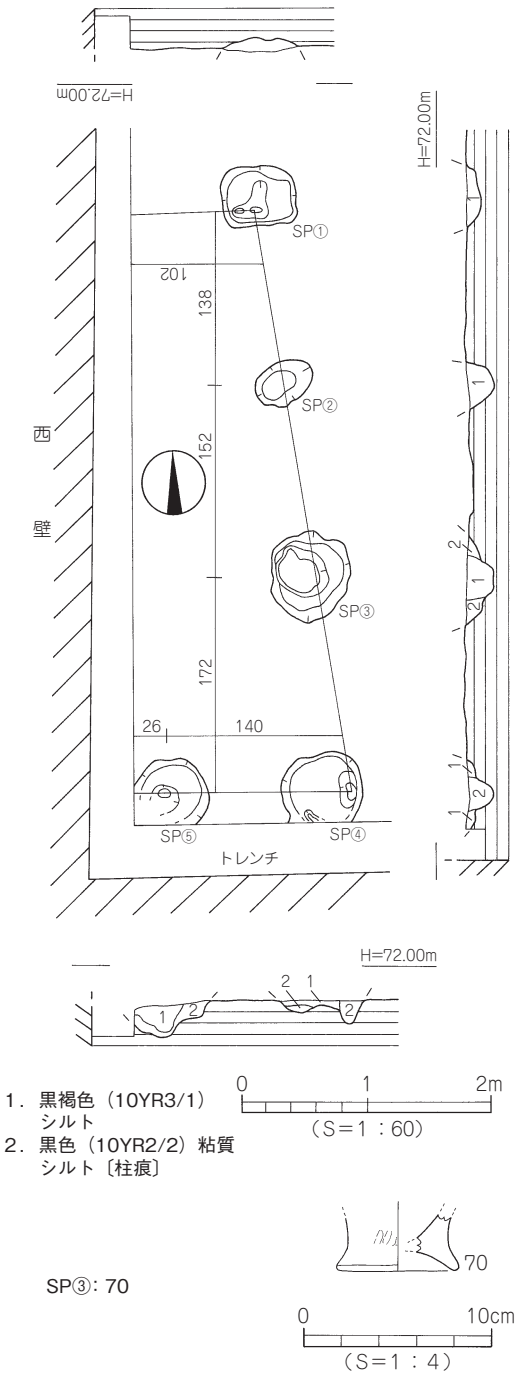
出土遺物（第40図、写真図版10）

71は須恵器坏身。1/5の残存で、たちあがり径は推定11.6cm、器高3.6cmを測る。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖る。受部は上外方に短くひねり出され、底部は平底である。72･73は弥生土器の甕形土器。わずかに上げ底を呈する底部で、72の胴部外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。弥生前期。74は板状の剥片で、一部敲打痕を残す。結晶片岩製。75は平基無茎式の石鏃で、先端部と側部を一部欠損する。平面形態は正三角形状を呈し、中央部には自然面を残す。サヌカイト製。

時期：出土した須恵器の特徴より、掘立13は７世紀初頭～前半の建物とする。

掘立14（第41図、写真図版７）

１区南側Ｄ～Ｆ３区に位置する東西棟で、東西３間、南北２間規模の総柱構造の建物であり、12基の柱穴で構成される。建物内側には、床を支えるための束柱と思われる柱穴２基（SP⑪･⑫）を検出した。建物方位はN－8°－Eであり、桁行長5.16m、梁行長3.86m、床面積19.91㎡を測る。掘立14は、本調査における最大規模の建物である。柱穴間隔は桁間1.6～1.8m、梁間1.8～2.0mである。側柱を構成する柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は径0.66～1.26m、深さ45～50cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色（10YR3/1）シルトや褐色(7.5YR4/4)シルトを基調とし、柱穴下部には黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入する。柱痕は６基の柱穴(SP⑤～⑩)で検出され、規模は径15～20cmを測る。束柱を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は20～25cm、深さ15～18cmを測る。柱穴掘り方埋土は、側柱柱穴と同様の黒褐色（10YR3/1）シルトである。遺物は側柱柱穴の掘り方埋土内より弥生土器片や土師器片、須恵器片が数点出土した。このうち、SP④･⑨･⑩から出土した遺物を図化して掲載した。

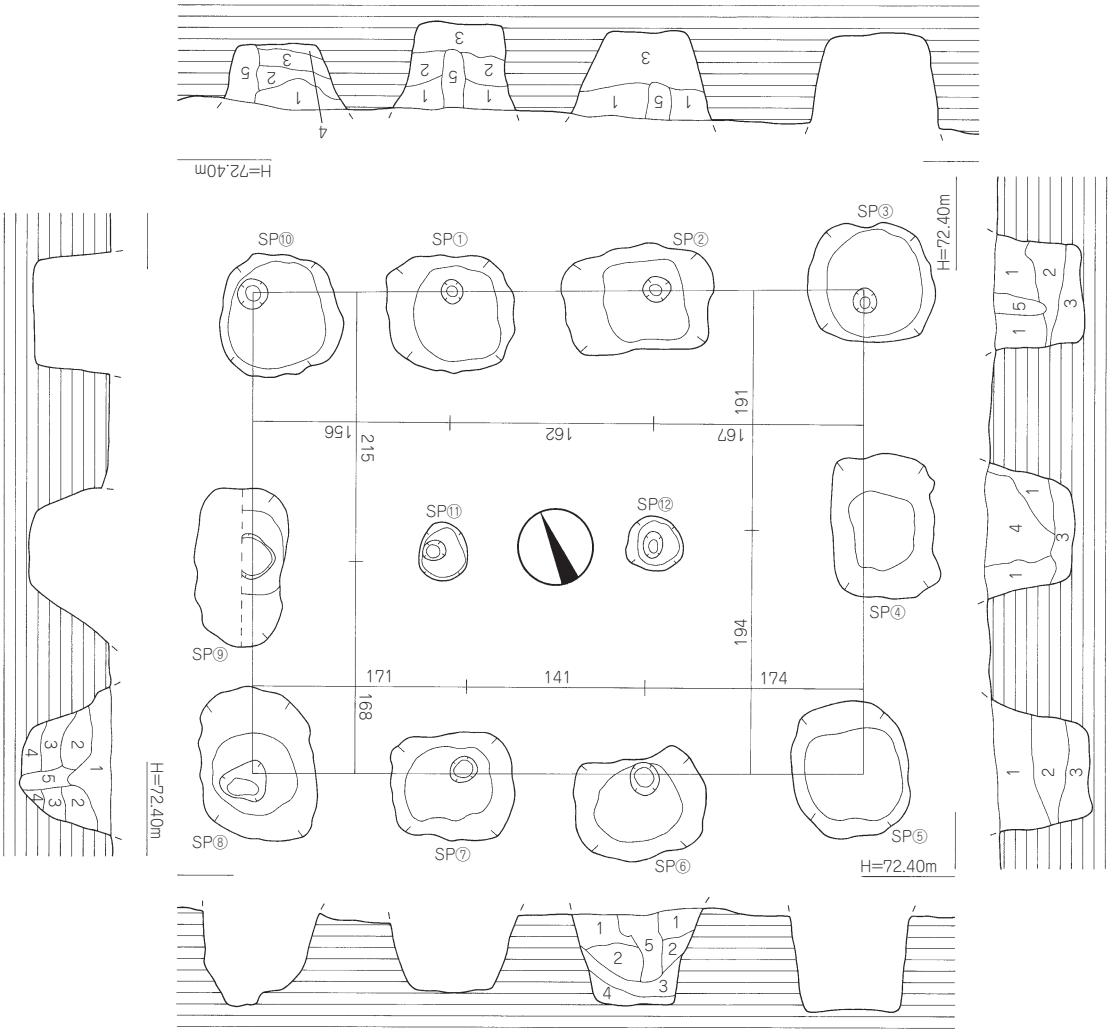


第38図　掘立１測量図・出土遺物実測図

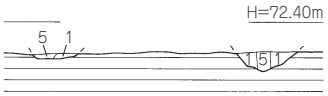
出土遺物

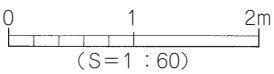
76はSP⑨、77はSP⑩、78はSP④出土品。76は弥生土器の甕形土器。貼り付けにより口縁部を成形するもので、口縁端面に刻目、胴部にはヘラ描き沈線文３条以上（2条1組）を施す。弥生前期。77･78は須恵器。77は坏身片で、たちあがり径は推定12.4cmを測る。たちあがり端部は尖り、受部は短く上外方にのびる。底部外面には、回転ヘラケズリ痕を残す。78は短頸壺の肩胴部片で、肩部の張りは弱い。

時期：出土した須恵器の特徴より、掘立14は７世紀初頭～前半の建物とする。

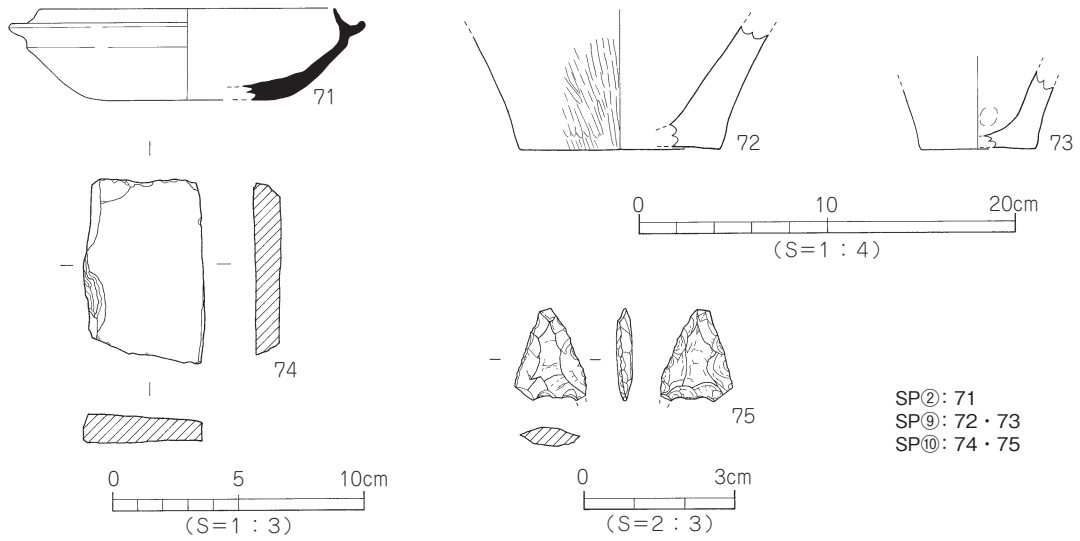


1．黒褐色（10YR3/1）シルト
2．褐色（7.5YR4/4）シルトに黄色
（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入
3．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色
（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入
4．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色
（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入
5．褐灰色（10YR4/1）シルト〔柱痕〕





第39図　掘立13測量図



第40図　掘立13出土遺物実測図

掘立10（第42図）

２区中央部Ｌ13･14区に位置する東西棟で、東西２間、南北２間規模の側柱構造建物であり８基の柱穴で構成される。建物方位はN－25°－Eであり、桁行長3.65m、梁行長2.91m、床面積10.02㎡を測る。柱穴間隔は桁間1.6～1.8m、梁間1.3～1.5mである。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.59～0.80m、深さ10～22cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。柱痕は５基の柱穴（SP②･③･④･⑦･⑧）で検出したが、断面観察では確認できず柱痕埋土は不明である。遺物は柱穴掘り方埋土内より、弥生土器片や須恵器片が少量出土した。このうち、SP③･SP⑤から出土した遺物を図化して掲載した。

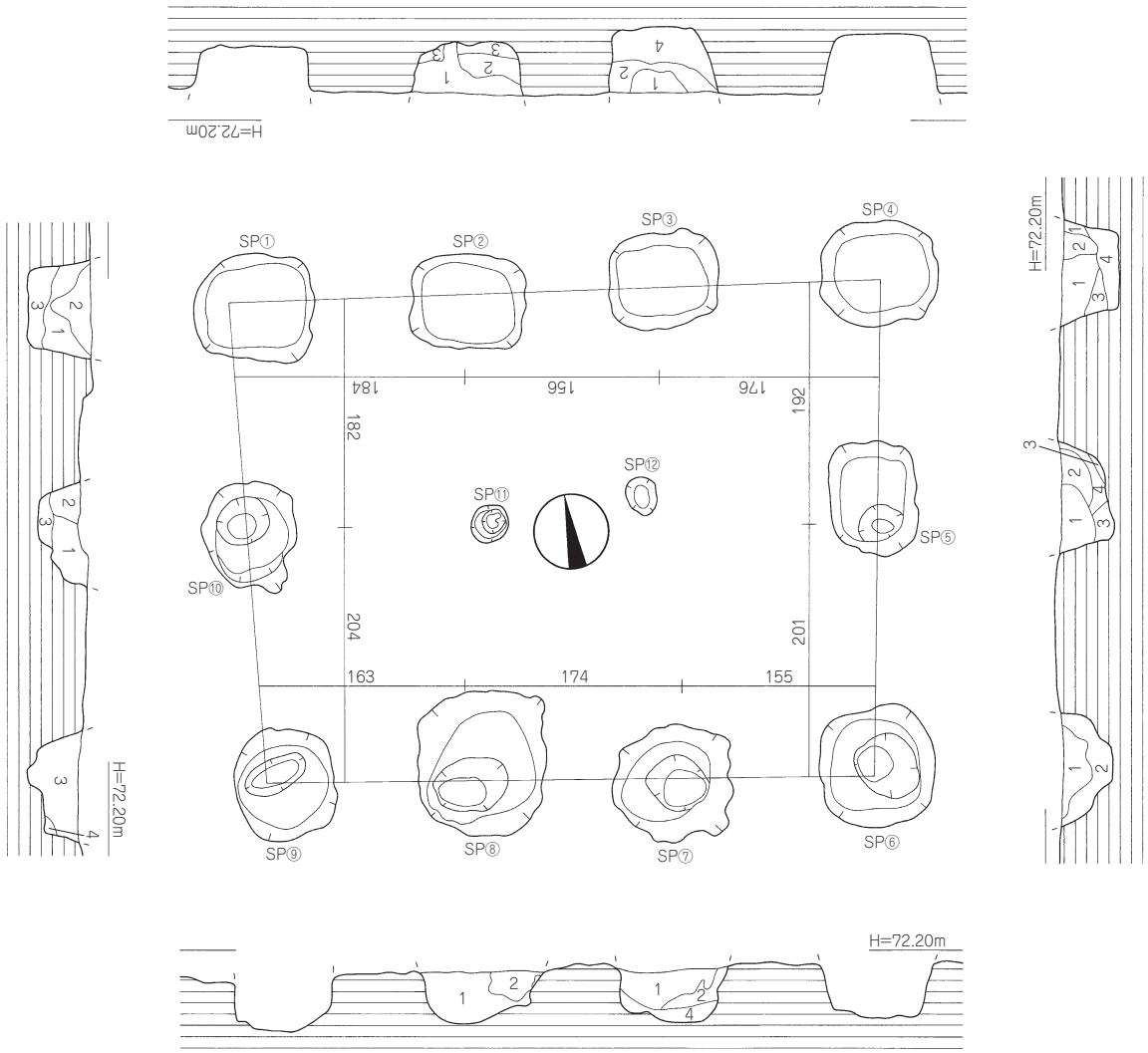
出土遺物

79はSP⑤、80はSP③出土品。79は須恵器坏身の小片。推定口径14.0cmを測り、たちあがりは短く内傾する。80は弥生土器の甕形土器。底部は平底で、胴部外面にはハケメ調整を施す。弥生時代後期。

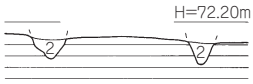
時期：出土した須恵器の特徴より、掘立10は７世紀初頭～前半の建物とする。

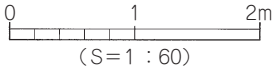
掘立４（第43図）

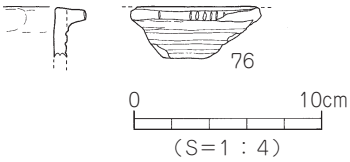
１区南西部Ａ３～Ｂ４区に位置する東西棟で、建物西側は調査区外に続く。１区西壁の土層観察により、掘立4は第Ⅳ層上面から掘削された遺構である。東西２間以上、南北２間規模の側柱構造建物で、建物方位をN－12°－Eにとる。建物規模は東西検出長4.38m、南北長4.01m、検出床面積17.56㎡を測る。柱穴間隔は桁間1.0～1.7m、梁間1.9～2.1mである。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.55～0.83m、深さ17～57cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色（10YR2/2）シルトを基調とし、黒褐色（10YR3/1）シルトや黄色（2.5Y7/8）シルトが混在するものである。柱痕は５基の柱穴（SP①･④～⑦）で検出され、径12～18cmを測る。柱痕埋土は、褐灰色（10YR4/1）シルトである。遺物は柱穴掘り方埋土内より、弥生土器片や須恵器小片が数点出土した。このうち、SP④から出土した遺物を図化して掲載した。



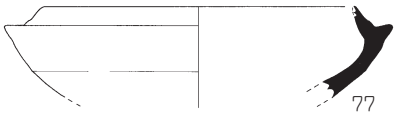
1．褐色（7.5YR4/4）シルトに黄色（2.5Y7/8）
　シルトがブロック状に少量混入
2．黒褐色（10YR3/1）シルト
3．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）
　シルトがブロック状に少量混入
4．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）
　シルトがブロック状に混入

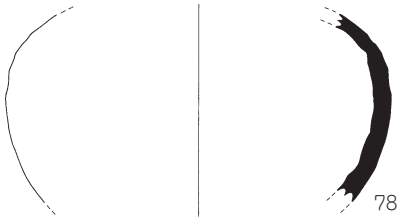


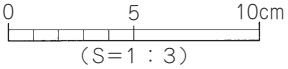




SP④：78
SP⑨：76
SP⑩：77







第41図　掘立14測量図・出土遺物実測図

出土遺物

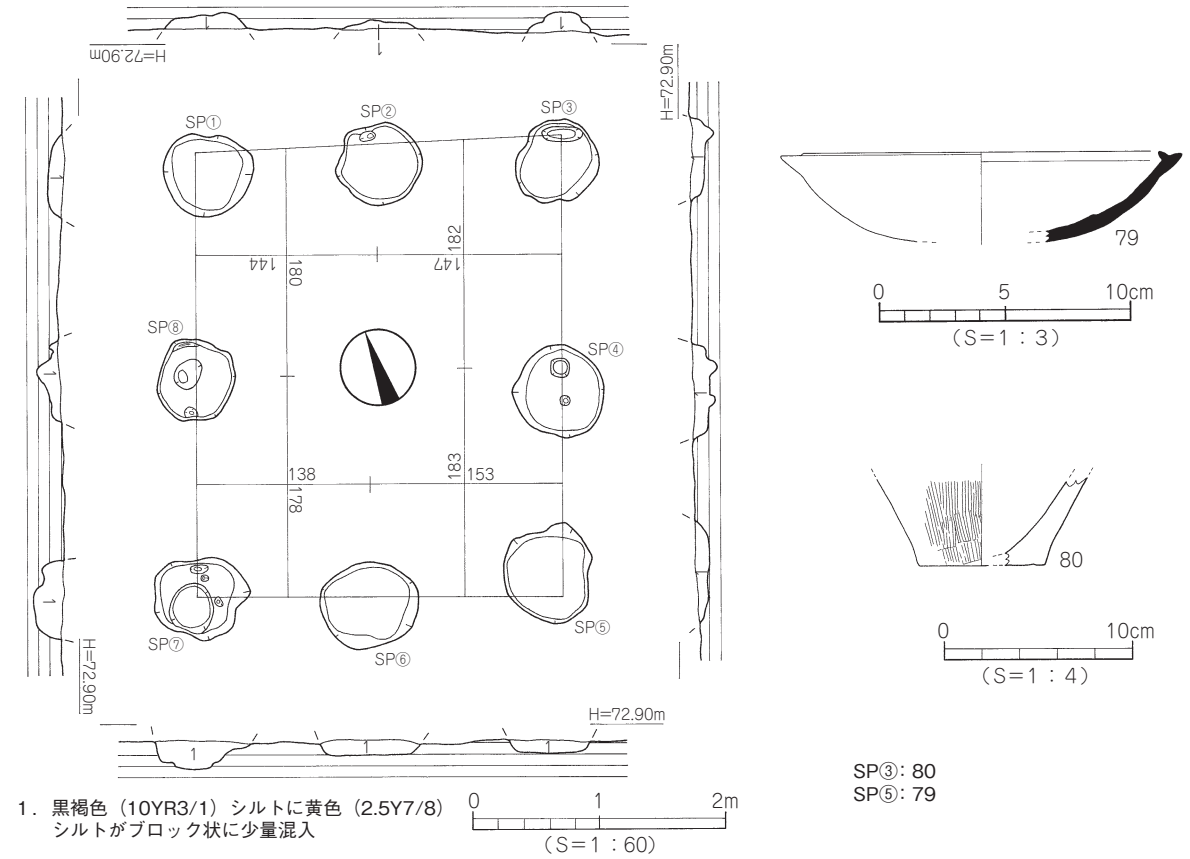
81は弥生土器の甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するもので、胴部にヘラ描き沈線文３条を施す。小片。弥生前期。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが柱穴掘り方埋土が掘立3と類似することから、掘立4は概ね７世紀前半の建物とする。

掘立５（第44図）

１区南西部Ｂ３～Ｃ４区に位置する南北棟で、東西１間、南北２間規模の側柱構造建物である。建物方位はN－15°－Eであり、桁行長3.80m、梁行長3.20m、床面積12.16㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.7～2.1mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.30～0.80m、深さ11～35cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒色(5Y2/1)シルトを基調とし、柱穴下部には黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入する。柱痕はSP⑥にて検出したが、断面観察では確認できず柱痕埋土は不明である。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが柱穴埋土が掘立4に類似することから、掘立5は概ね７世紀前半の建物とする。

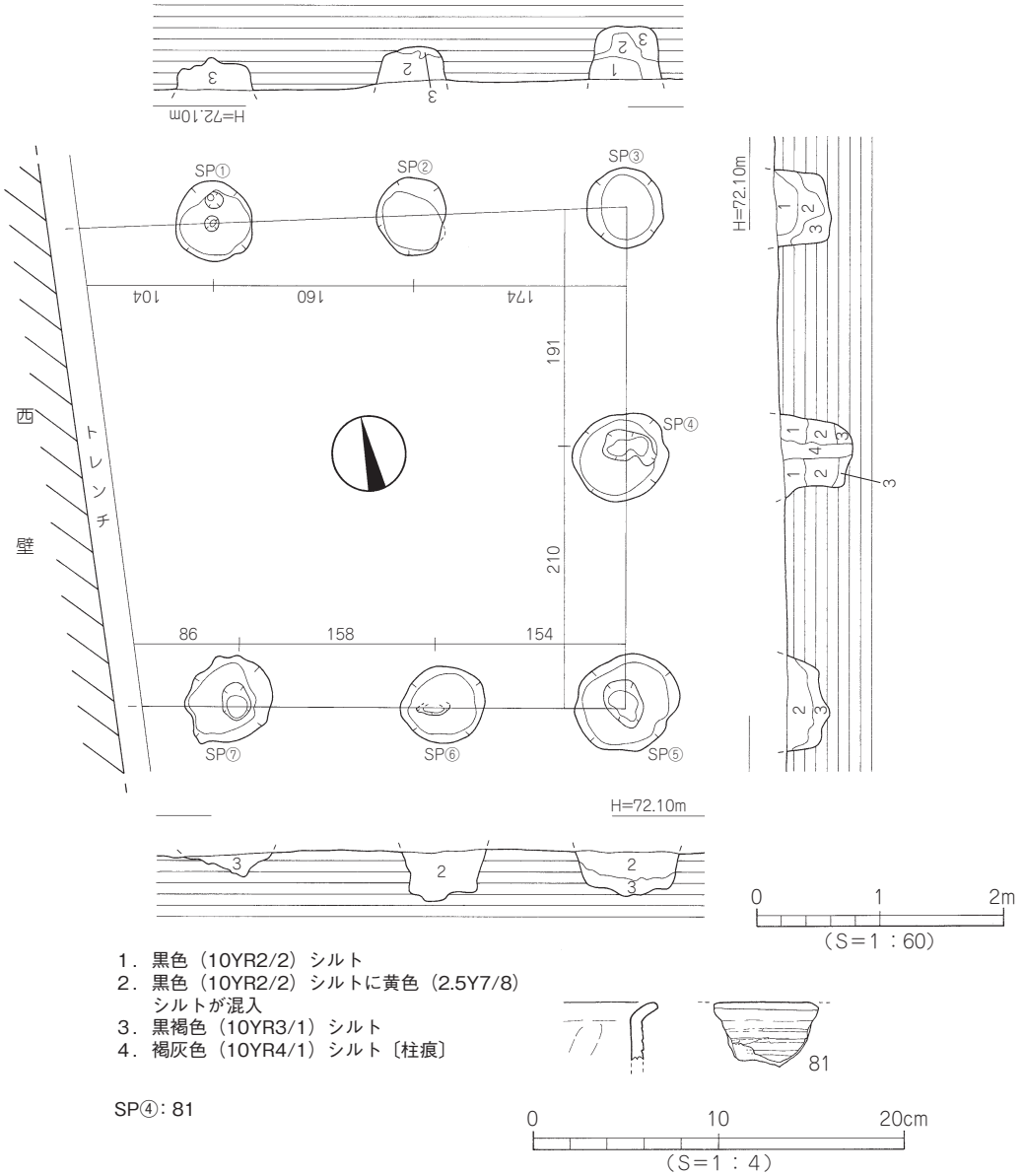


第42図　掘立10測量図・出土遺物実測図

掘立６（第45図）

１区南西部Ｂ２～Ｃ３区に位置する南北棟で、東西２間、南北２間規模の側柱構造の建物である。建物方位はN－13°－Eであり、桁行長3.24m、梁行長2.96m、床面積9.59㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.6～1.7m、梁間1.5mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.29～0.90m、深さ5～26cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入するものである。柱痕は、５基の柱穴（SP①・③・④・⑤・⑥）で検出された。柱痕規模は径10～20cmを測り、柱痕埋土は黒色（10YR2/2）を呈する粘質シルトである。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが柱穴埋土が掘立4や掘立5に類似することから、掘立6は概ね７世紀前半の建物とする。



第43図　掘立４測量図・出土遺物実測図

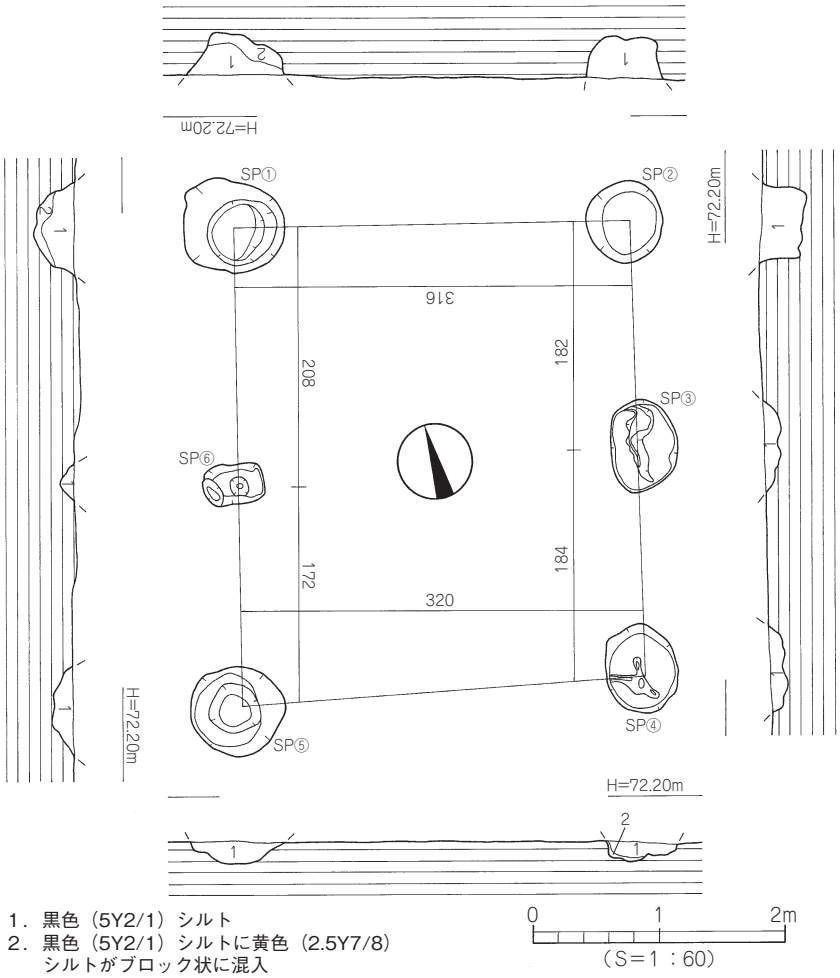
掘立７（第46図）

１区北西部Ｃ７～Ｄ８区に位置する南北棟で、東西２間、南北２間規模の側柱構造の建物であり、建物北東部の柱穴（SP③）は土坑SK7を切っている。建物方位はN－29°－Eであり、桁行長3.92m、梁行長3.46m、床面積13.49㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.8～2.1m、梁間1.5～2.0mである。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.38～0.71m、深さ８～42㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入するものである。柱痕は検出されなかった。遺物は柱穴内より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが柱穴埋土が掘立5や掘立6と酷似することから、掘立7は概ね７世紀前半の建物とする。

掘立９（第47図）

２区南東隅M11～N12区に位置する東西棟で、東西３間、南北２間規模の側柱構造建物である。SB2と重複しており、切り合い関係から掘立9がSB2に後出する。また、掘立9は２区東壁の土層観察により、第Ⅳ層上面から掘削された遺構である。建物方位はN－14°－Eであり、桁行長4.99m、梁行長3.94m、床



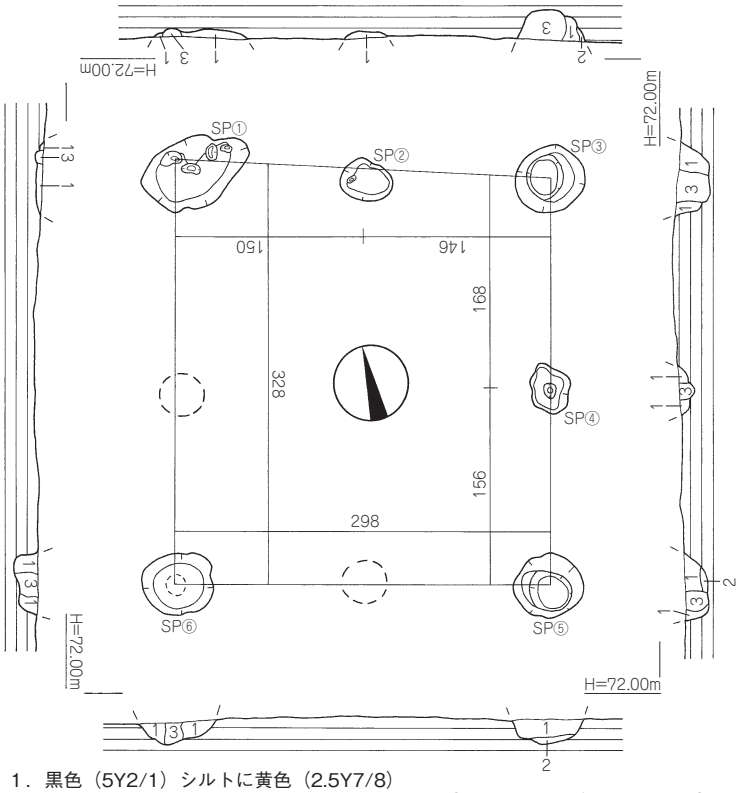
第44図　掘立５測量図

面積19.66㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.4 ～ 1.8m、梁間1.9 ～ 2.0mである。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.60 ～ 0.91m、深さ12 ～ 40㎝を測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色（10YR3/1）シルトを基調とし、黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入する柱穴がある。柱痕はSP④で検出したが、断面観察では確認しておらず柱痕埋土は不明である。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが柱穴埋土が掘立10や掘立11などと酷似することから、掘立9は概ね７世紀初頭～前半の建物とする。

掘立12（第48図）

２区南西隅Ｉ～Ｋ11に位置する建物で、東西４間分を検出した。２区南壁の土層観察により、掘立12は第Ⅳ層上面から掘削された遺構である。建物方位はN－8°－Eであり、桁行長8.28mを測る。柱穴間隔は、桁間1.7 ～ 2.4mである。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.57 ～ 1.03m、深さ14 ～ 38㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入するものである。柱痕は３基の柱穴（SP①･②･③）で検出されたが断面観察では確認されておらず、柱痕埋土は不明である。遺物は柱穴内より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

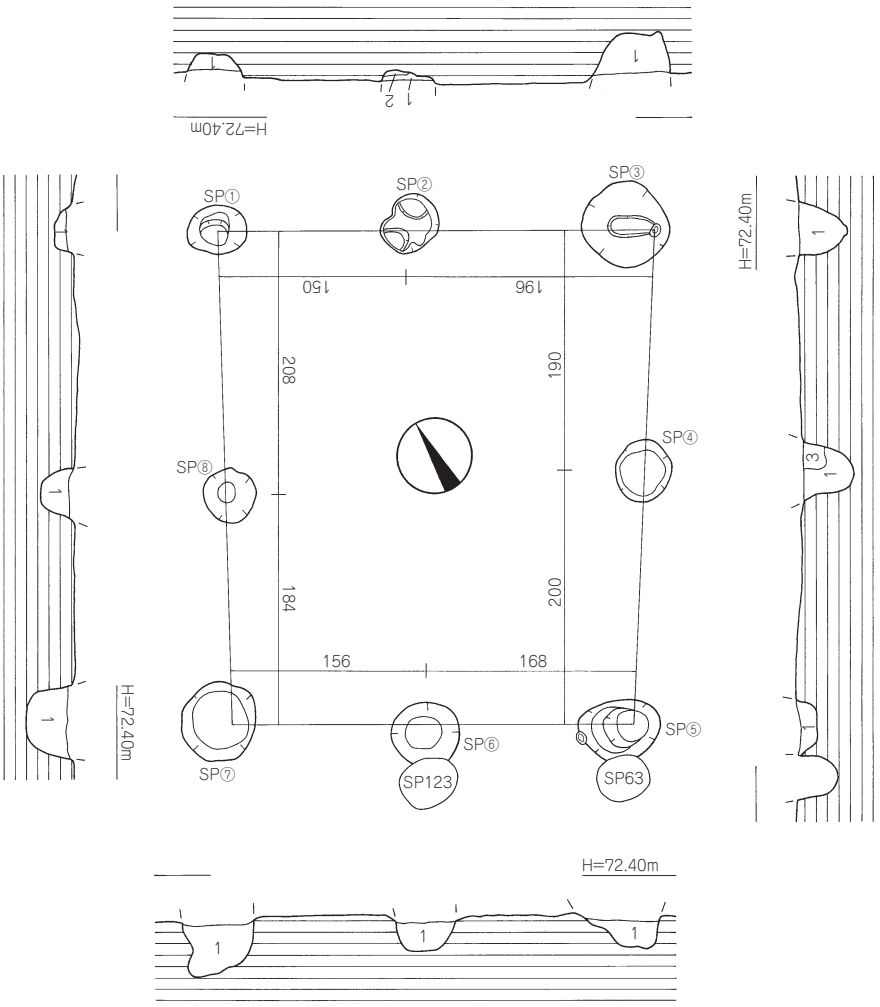


第45図　掘立６測量図

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが検出層位や柱穴埋土が掘立8と酷似することなどから、掘立12は概ね７世紀初頭～前半の建物とする。

掘立15（第49図）

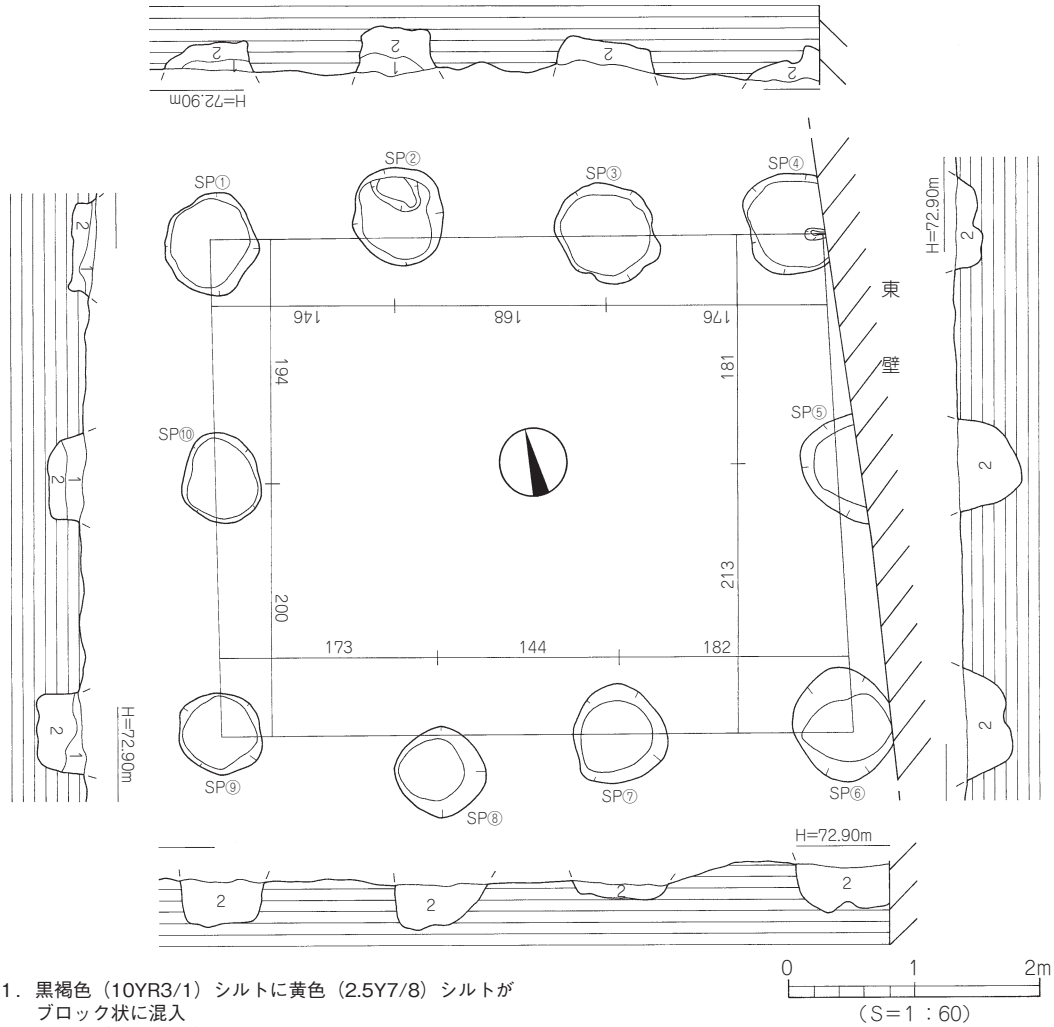
１区中央部Ｄ４～Ｅ５に位置する東西棟で、切り合い関係から掘立15が溝SD12より後出する。東西２間、南北１間規模の側柱構造建物で、建物方位はN－20°－Eである。建物規模は桁行長3.67m、梁行長2.56m、床面積9.39㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.8～1.9mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.44～0.60m、深さ13～32㎝を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に少量混入するものである。柱痕は２基の柱穴（SP①・⑥）で検出したが、断面観察では確認できておらず柱痕埋土は不明である。遺物は柱穴内より弥生土器の胴部片や須恵器小片が数



1．黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入
2．黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトが混入
3．黄色（2.5Y7/8）シルト

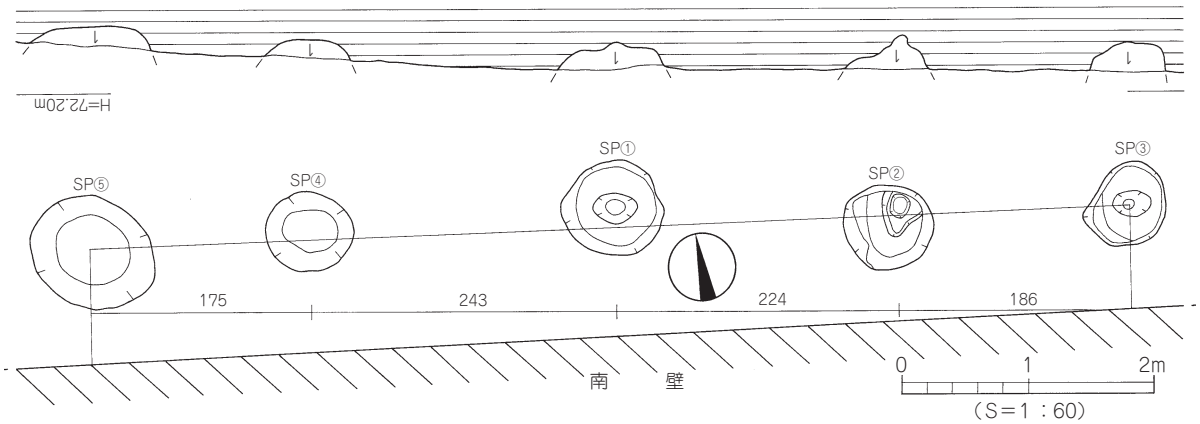
0　1　2m
（S＝1：60）

第46図　掘立７測量図



1．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入
2．黒褐色（10YR3/1）シルト

第47図　掘立９測量図

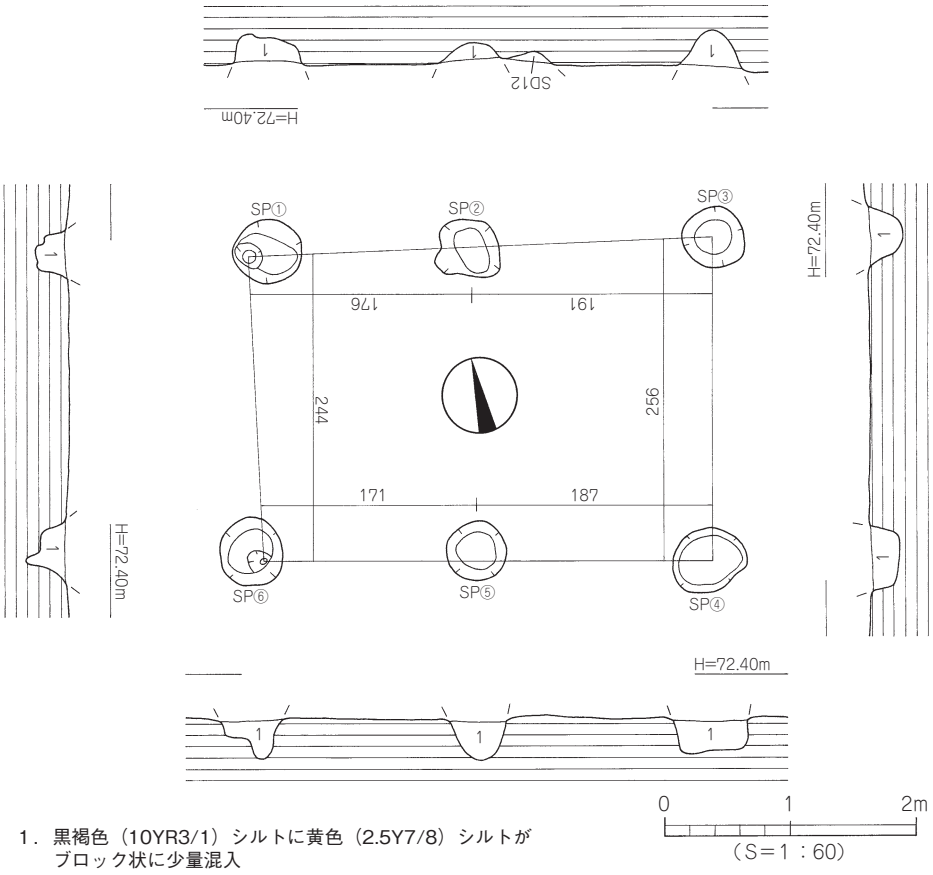


1．黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入

第48図　掘立12測量図

点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが柱穴埋土が掘立9や掘立11などと酷似することから、掘立15は概ね７世紀初頭～前半の建物とする。



第49図　掘立15測量図

（３） 溝

溝は13条（SD3 ～ 15）を検出した。すべて第Ⅶ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第Ⅵ層や第Ⅴ層上面から掘削された遺構であり、第Ⅳ層が溝上面を覆う。出土遺物や他の遺構との重複関係より、検出した13条の溝は古墳時代終末期、または、それ以前に掘削された遺構と考えられるが時期特定しうる遺物が僅少であり、明確な時期は判断しえなかった。なお、１区では10条（SD3･7 ～ 15）、２区では３条（SD4 ～ 6）の溝を検出した。

ＳＤ３（第50図）

１区北西部Ａ７～Ｄ10区で検出した北東－南西方向の溝で、溝南側は土坑SK11と重複し、溝南端は調査区外に続く。１区西壁の土層観察により、本来は第Ⅵ層上面から掘削された遺構であり溝上面は第Ⅳ層が覆う。規模は検出長17.10m、幅0.49 ～ 1.25m、深さは最深部で検出面下14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色（10YR3/1）を呈するシルト単層である。溝基底面は、北東側から南西側に向けて傾斜をなす（比高差６cm）。なお、溝基底面にて径10 ～ 30cm、深さ３～７cmを測る小ピットを数基検出したが、ピット埋土はすべて溝埋土と同様の黒褐色シルトである。遺物は埋土内より、弥生土器や須恵器の小片が数点出土した。図化しうる遺物を２点掲載した。

出土遺物（第53図）

82･83はSD3出土品。82･83は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するもので、口縁端面に刻目、83の胴部外面にはヘラ描き沈線文１条を施す。弥生前期末。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、第Ⅳ層が溝上面を覆うことや須恵器が出土していることなどから、SD3は概ね古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ４（第50図、写真図版８）

２区南側Ｊ～Ｌ12区で検出した東西方向の溝で、溝北側は土坑SK21と重複し、溝南側は掘立8柱穴に一部削平され、溝西端は消失している。規模は検出長15.00m、幅0.25 ～ 0.88m、深さは検出面下12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト単層である。溝基底面は、東側から西側に向けて緩やかな傾斜をなす（比高差４cm）。遺物は埋土内より、弥生土器や須恵器の破片が数点出土した。

出土遺物（第53図）

84･85･87はSD4出土品。84･85は弥生土器。84は甕形土器、85は壺形土器の底部で、84はわずかに上げ底、85は平底をなす。87は須恵器坏身の小片で、たちあがり径は推定8.9cmを測る。

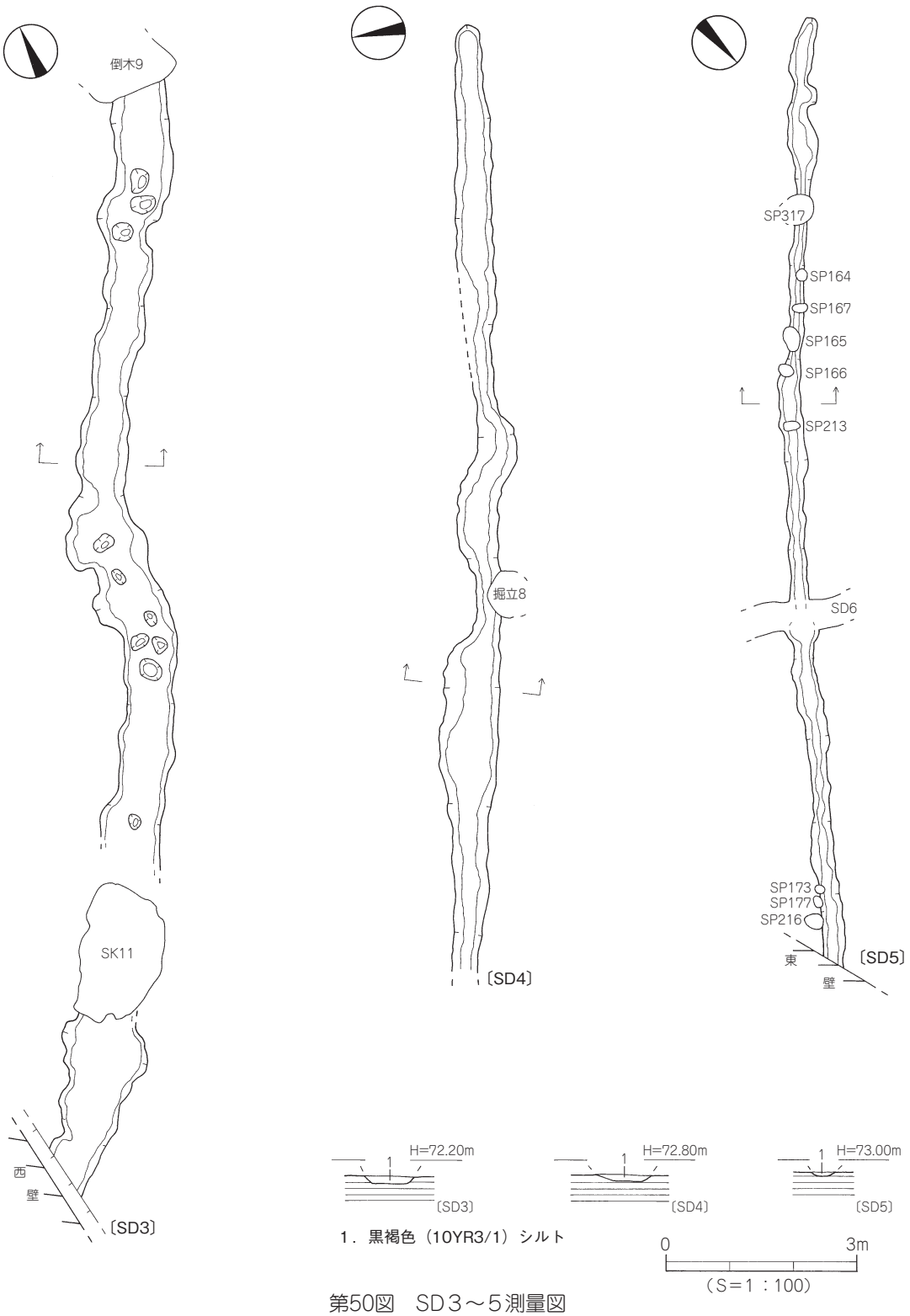
時期：出土した須恵器の特徴や埋土、及び掘立8に先行することなどから、SD4は古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ５（第50図）

２区北東部Ｋ14 ～Ｎ16区で検出した北東－南西方向の溝で溝東端は調査区外に続き、東側と西側は９基の柱穴に切られ、溝中央部は溝SD6と重複しており、溝西端は消失している。２区東壁の土層観察により、本来は第Ⅴ層上面から掘削された遺構であり、第Ⅳ層が溝上面を覆う。規模は検出長15.50m、幅0.14 ～ 0.56m、深さは最深部で８cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト単層である。溝基底面は、北東部から南西部に向けて緩傾斜をなす（比高差４cm）。遺物は埋土内よ

り土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

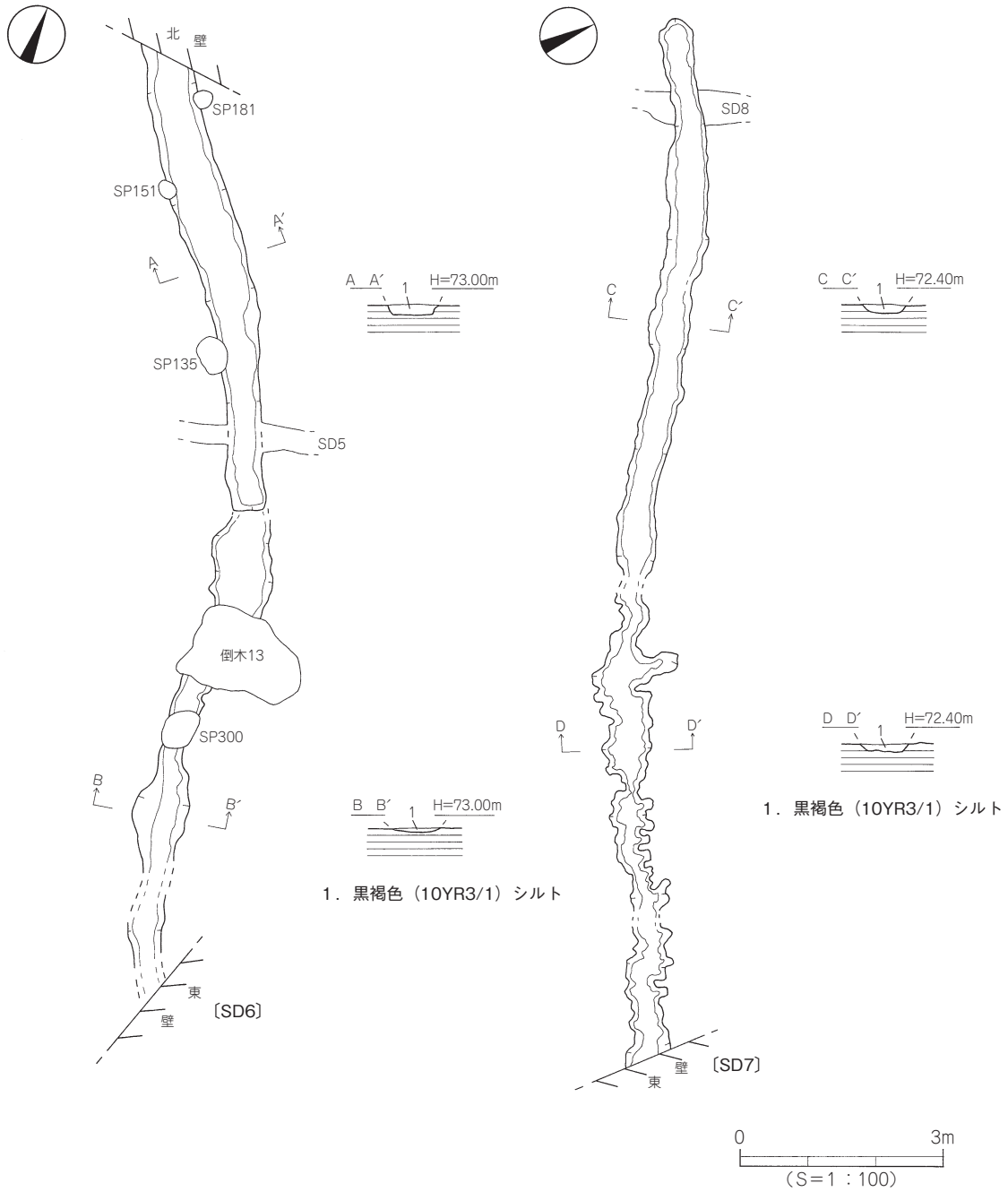
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、須恵器の出土や溝埋土がSD3やSD4と酷似することなどから、SD5は概ね古墳時代終末以前の溝とする。



第50図　SD３～５測量図

ＳＤ６（第51図）

２区北東部Ｌ16～Ｎ14区で検出した北西－南東方向の溝で、溝北側と南側は４基の柱穴に切られ、溝中央部は溝SD5と重複し、溝両端は調査区外に続く。２区北壁と東壁の土層観察により、本来は第Ⅴ層上面から掘削された遺構であり第Ⅳ層が溝上面を覆う。規模は検出長13.82m、幅0.27～0.92m、深さは最深部で16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト単層である。溝基底面は、北西部から南東部に向けて緩傾斜をなす（比高差６cm）。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。



第51図　SD６・７測量図

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や溝埋土がSD3やSD4などと酷似することから、SD6は概ね古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ７（第51図）

１区北東部Ｄ10～Ｇ8区で検出した北西－南東方向の溝で、溝西側は溝SD8と切り合い、溝東端は調査区外に続く。１区東壁の土層観察により、本来は第Ｖ層上面から掘削された遺構であり、溝上面を第Ⅳ層が覆う。規模は検出長15.42m、幅0.08～0.68m、深さは最深部で17cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト単層である。溝基底面は、北西部から南東部に向けて傾斜をなす（比高差８cm）。なお、溝基底面には凹凸が数多くみられる。遺物は埋土中より、須恵器片や土師器片、瓦質土器の破片などが少量出土した。

出土遺物（第53図）

88～90はSD7出土品。88は須恵器甕の頸部片で、沈線１条と波状文３条以上を施す。なお、胎土中には黒色酸化土粒が多量に含まれている。89は須恵器提瓶の口縁部で、口縁端部は丸く仕上げる。90は瓦質の鍋で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。

時期：出土した遺物の特徴と検出層位から、SD7は7世紀前半の溝とする。

ＳＤ８（第52図）

１区北壁中央部Ｄ９～Ｅ10区で検出した南北方向の短い溝で、溝北側は溝SD7に切られ溝北端は調査区外に続き、溝南端は消失している。１区北壁の土層観察により、本来は第Ｖ層上面から掘削された遺構であり、溝上面は第Ⅳ層が覆う。規模は検出長4.50m、幅0.26～0.56m、深さは最深部で18cmを測る。断面形態は丸みのある皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、溝SD7に先行することや検出層位から、SD8は概ね7世紀前半以前の溝とする。

ＳＤ９（第52図）

１区北東隅Ｆ・Ｇ10区で検出した東西方向の短い溝で、溝北側は調査区外に続く。１区北壁の土層観察により、本来は第Ｖ層上面から掘削された遺構であり溝上面は第Ⅳ層が覆う。規模は検出長3.97m、幅1.08～1.42m、深さは最深部で17cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝基底面はほぼ平坦であり、凹凸はみられない。溝内からは、弥生土器や土師器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが検出層位や溝埋土等より、SD9は古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ10（第52図）

１区北東部Ｆ９･10区で検出した南北方向の短い溝で、溝北側は調査区外に続き、溝南端は消失している。1区北壁の土層観察により、溝上面を第Ⅳ層が覆う。規模は検出長2.44m、幅0.60～0.94m、深さは最深部で20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝基底面は

ほぼ平坦であり、凹凸はみられない。溝内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが検出層位や埋土等より、SD10は概ね古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ11（第52図）

１区東壁中央部Ｇ５区で検出した東西方向の短い溝で、溝東側は調査区外に続く。１区東壁の土層観察により、溝上面を第Ⅳ層が覆う。規模は検出長3.04m、幅0.54 ～ 1.04m、深さは最深部で21cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色（10YR3/1）シルト単層である。溝基底面はほぼ平坦であり、凹凸はみられない。遺物は埋土中より須恵器小片や石器片は少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、須恵器の出土や検出層位、埋土等より、SD11は古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ12（第52図）

１区中央部Ｄ５区で検出した南北方向の短い溝で、溝中央部は掘立15柱穴に削平されていおり、溝両端は消失している。規模は検出長4.82m、幅0.40 ～ 0.96m、深さは最深部で10cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝基底面は北側から南側に向けて傾斜をなし（比高差４cm）、基底面全域に径５～８cm、深さ３～６cmを測る小ピットを数多く検出した。なお、ピット埋土は溝埋土と同様の黒色シルトである。遺物は埋土中より、弥生土器片や須恵器小片が数点出土した。図化しうる遺物を１点掲載した。

出土遺物（第53図）

86はSD12出土品。86は甕形土器の底部で、わずかに上げ底をなす。弥生前期。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、須恵器の出土や埋土等より、SD12は古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ13（第52図）

１区中央部東寄りＦ５区で検出した湾曲する短い溝で、溝両端は消失している。規模は検出長4.42m、幅0.23 ～ 1.18m、深さは最深部で13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝基底面はほぼ平坦であり、凹凸はみられない。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうる遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、土師器や須恵器の出土や埋土より、SD13は古墳時代終末以前の溝とする。

ＳＤ14（第52図）

１区南側中央部Ｄ３区で検出した短い溝で溝北端はSP15〔埋土：黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入〕に削平され、南端は消失している。規模は検出長0.72m、幅0.15 ～ 0.20m、深さは最深部で11cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からは、遺物の出土はない。

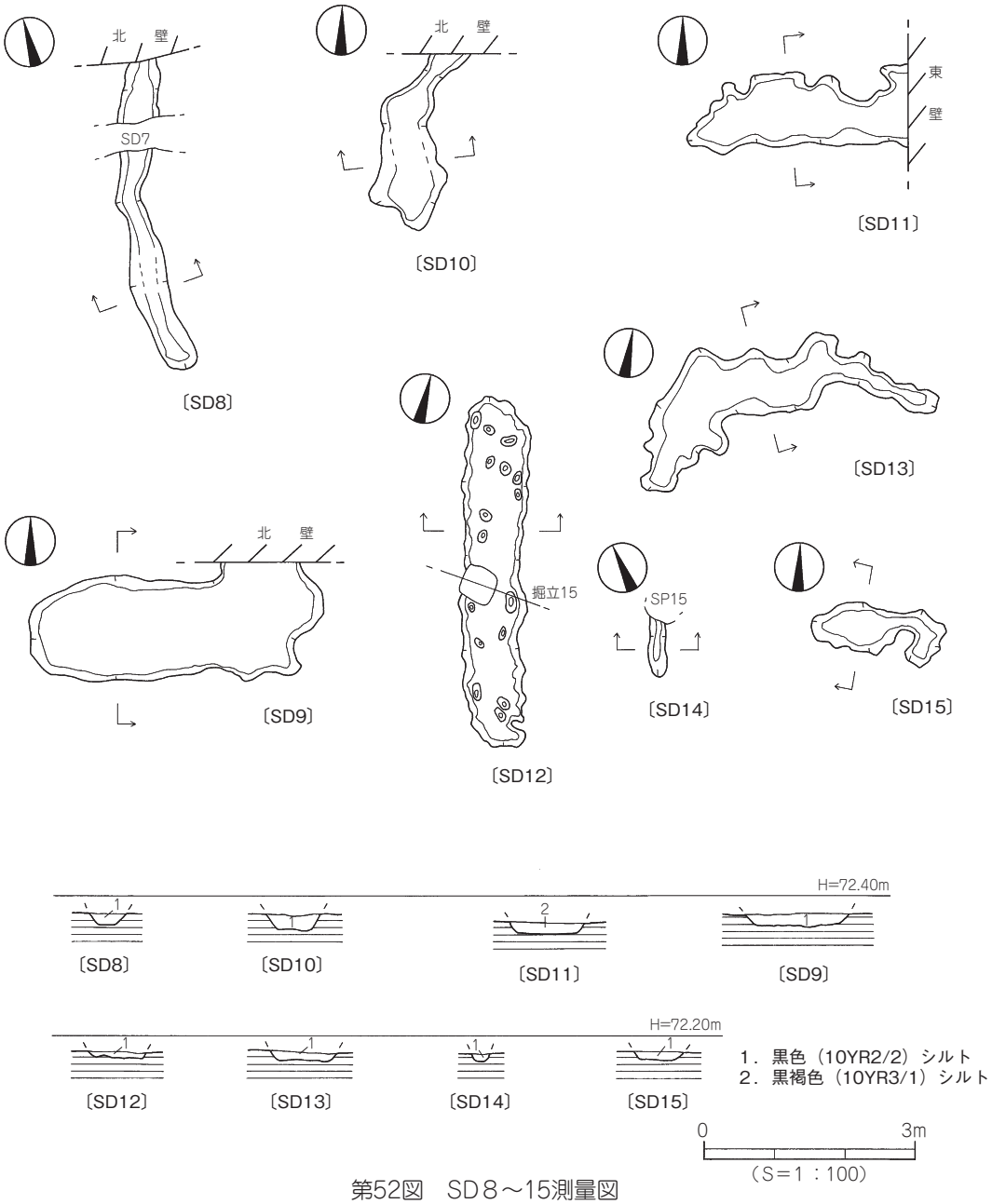
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、溝埋土がSD8やSD9と酷似することから、SD14

は概ね古墳時代終末以前の溝とする。

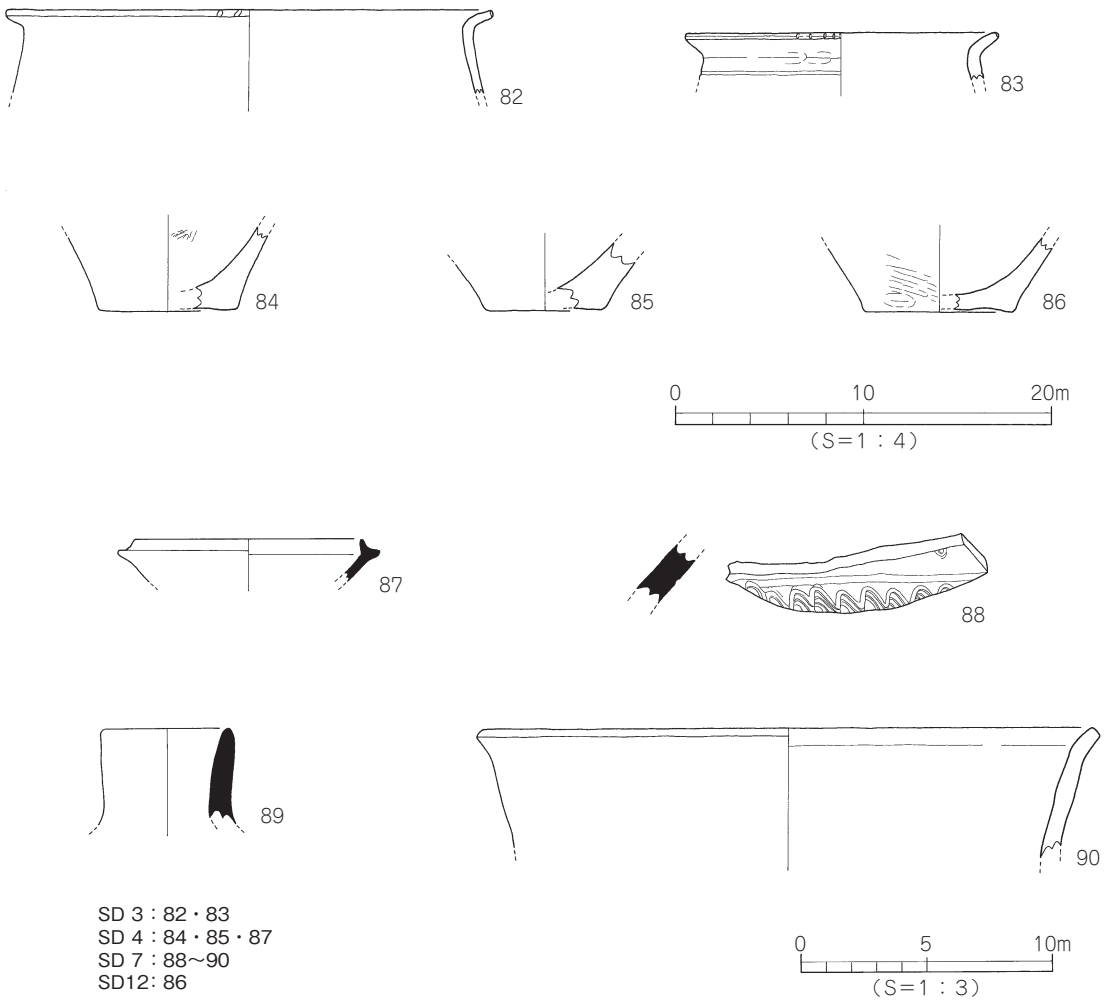
ＳＤ15（第52図）

１区南東部Ｆ３区で検出した東西方向の短い溝で、溝両端は消失している。規模は検出長1.94m、幅0.25～0.73m、深さは最深部で８㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色（10YR2/2）シルト単層である。溝基底面はほぼ平坦であり、凹凸はみられない。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、溝埋土がSD8やSD9と酷似することから、SD15は概ね古墳時代終末以前の溝とする。



第52図　SD８～15測量図



第53図　SD３・４・７・12出土遺物実測図

（4）土　坑

ＳＫ17（第54図）

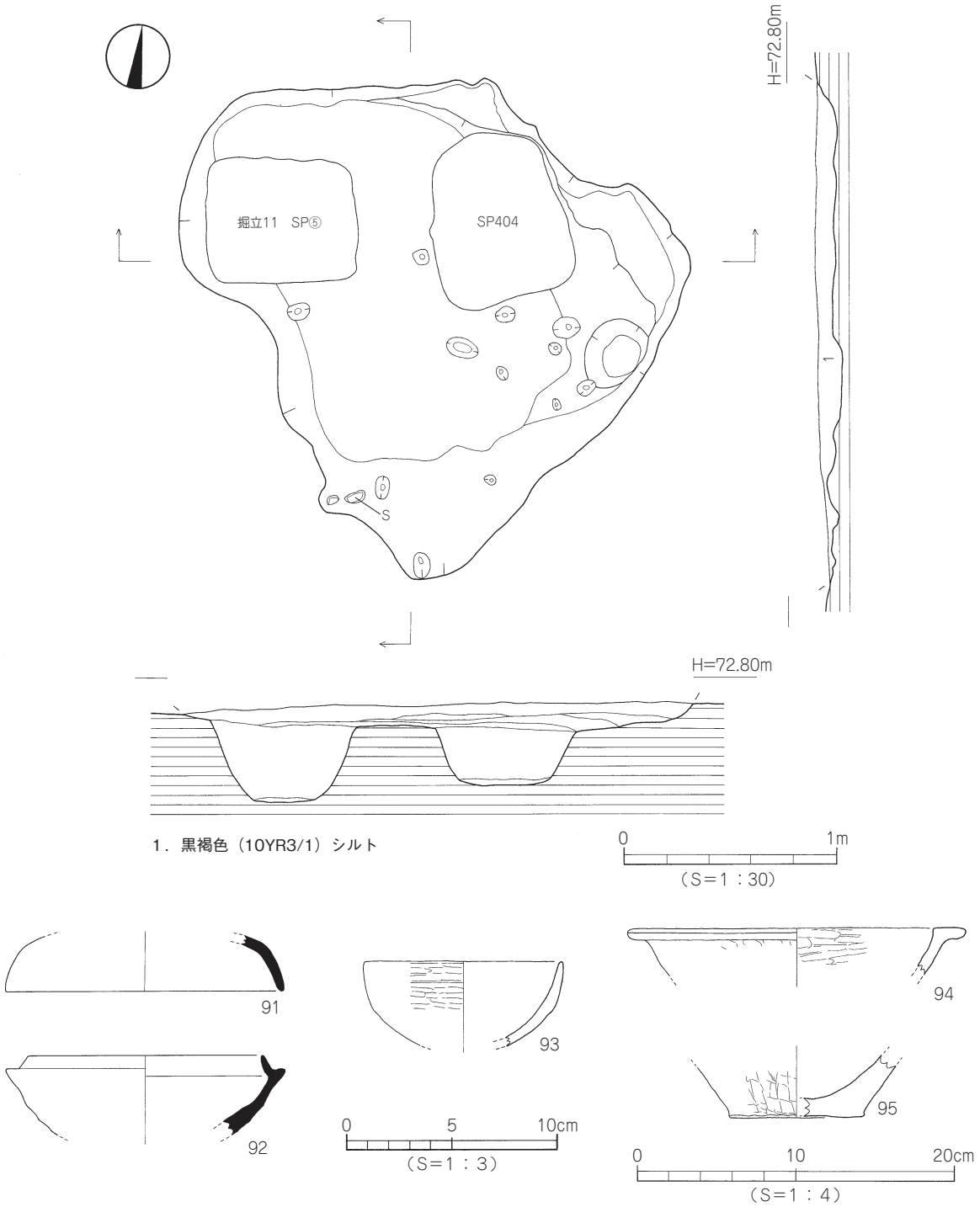
２区中央部西寄りＪ・Ｋ13区に位置し、土坑北側は掘立11柱穴とSP404〔埋土：黒褐色(10YR3/1)シルトに黄色(2.5Y7/8)シルトがブロック状に混入〕に一部削平されている。平面形態は不定形状を呈し、規模は南北長2.41ｍ、東西長2.32ｍ、深さは最深部で12㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑北西部及び南側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色(10YR3/1)を呈するシルト単層である。土坑北東部にはテラス状の平坦部をもち、基底面は北西部から南東部に向けて緩やかな傾斜をなす。なお、基底面にて径３～14㎝、深さ３～８㎝大の小ピットを数基検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様の黒褐色シルトである。遺物は埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物

91･92は須恵器。91は坏蓋片で、推定口径12.9㎝を測る。92は坏身片で、たちあがり径は推定11.0㎝を

測る。93は土師器椀で体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。94･95は弥生土器。94は高坏形土器で口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。弥生中期中葉。95は壺形土器の底部で平底をなし、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。弥生前期。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴より、SK17は７世紀初頭～前半の土坑とする。



第54図　SK17測量図・出土遺物実測図

〔３〕中近世の遺構と遺物

中世の遺構は土坑１基(SK25)、近世では溝１条(SD1)を検出した。

（1） 溝

ＳＤ１（第３図）

１区南側Ａ～Ｇ２区で検出した東西方向の溝で、溝中央部は掘立2･3柱穴や土坑24を一部削平し、溝両端は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、１区東壁及び西壁の土層観察により本来は第Ⅱ層上面から掘削された遺構である。規模は検出長29.50m、幅0.30 ～ 0.80m、深さは検出面下16cm（壁面観察では44cm）を測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰オリーブ色(5Y6/2)を呈する砂質シルト単層である。溝基底面は、東側から西側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差５cm)。遺物は埋土中より土師器片や陶磁器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが陶磁器片の特徴より概ね近世、江戸時代以降の溝とする。

（2）土　坑

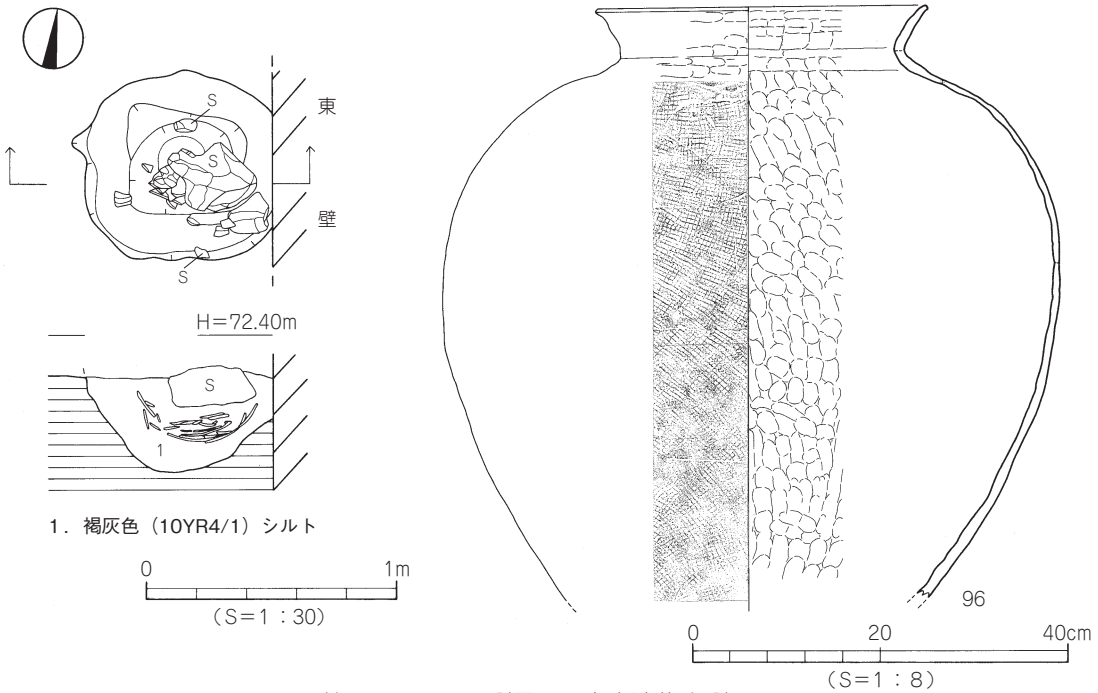
ＳＫ25（第55図、写真図版８）

１区北東隅Ｇ９区に位置し、土坑東側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、１区東壁の土層観察により、本来は第Ⅲ層上面から掘削された遺構である。平面形態は円形を呈し、規模は径0.74m、深さ37cmを測る。断面形態はやや舟底状を呈し、埋土は褐灰色(10YR4/1)を呈するシルト単層である。土坑基底面は、やや丸みを帯びている。遺物は、甕の破片が埋土中位付近に重なり合って出土したほか、土坑中央部の埋土上位にて径15 ～ 30cm、厚さ10cm大の河原石が１点出土した。

出土遺物（写真図版10）

96は東播系須恵器の大甕で口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。胴部外面には正格子叩き、内面は指頭痕を顕著に残す。

時期：出土遺物の特徴よりSK25は中世、13世紀代の土坑とする。



第55図　SK25測量図・出土遺物実測図

〔４〕その他の遺構と遺物

調査では、柱穴457基（掘立柱柱穴121基を含む）や倒木址を検出した。また、重機掘削時や包含層掘り下げ時に遺物が出土した。ここでは、これらの遺構や遺物を「その他の遺構と遺物」として掲載する。

（１）柱　穴

調査では、柱穴457基を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の六種類（Ａ～Ｆ）となる。なお、掘立柱建物を構成する柱穴は柱穴Ｂ・Ｃ・Ｄである。また、遺構一覧表には柱穴埋土をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆで表記している。

柱穴Ａ	灰オリーブ色（5Y6/2）シルト	： 45基
柱穴Ｂ	黒色（5Y2/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入	： 24基
柱穴Ｃ	黒褐色（10YR3/1）シルト	： 20基
柱穴Ｄ	黒褐色（10YR3/1）シルトに黄色（2.5Y7/8）シルトがブロック状に混入	： 28基
柱穴Ｅ	暗褐色（10YR3/3）シルト	：170基
柱穴Ｆ	暗灰色（10YR3/4）シルト	： 49基

出土遺物（第56図、写真図版11）

97･100はSP229（柱穴Ｅ）、98はSP230（柱穴Ｂ）、99はSP237（柱穴Ｂ）、101はSP337（柱穴Ａ）、102はSP137（柱穴Ｅ）、103はSP239（柱穴Ｅ）、104はSP405（柱穴Ｆ）、105はSP254（柱穴Ｅ）出土品。97 ～ 101は須恵器。97･98は坏蓋片で97の天井部は丸みをもち、口縁端部は尖り気味に仕上げる。99 ～ 101は坏身片で、99の受部端には沈線状の凹みが巡る。102 ～ 105は弥生土器。102･103は壺形土器の広口壺。102は口縁端面にヘラ描き沈線文１条を施し、口縁部内面には凸帯の剥離痕を残す。103は頸部上位に不明瞭な段をもち、口縁端部は丸く仕上げる。104･105は甕形土器。104は胴部片で、ヘラ描き沈線文２条を施す。105は底部片で、平底をなす。

（２）倒木址

調査では、14基の倒木址を検出した。内訳は、１区が９基（倒木1 ～ 9）、２区が５基（倒木10 ～ 14）である。規模は径1.0 ～ 4.4mを測るが、調査期間の都合上、平面プランと倒壊方向の確認にとどめた。なお、倒壊方向は第３・４図に矢印で表示している。

（３）包含層出土遺物

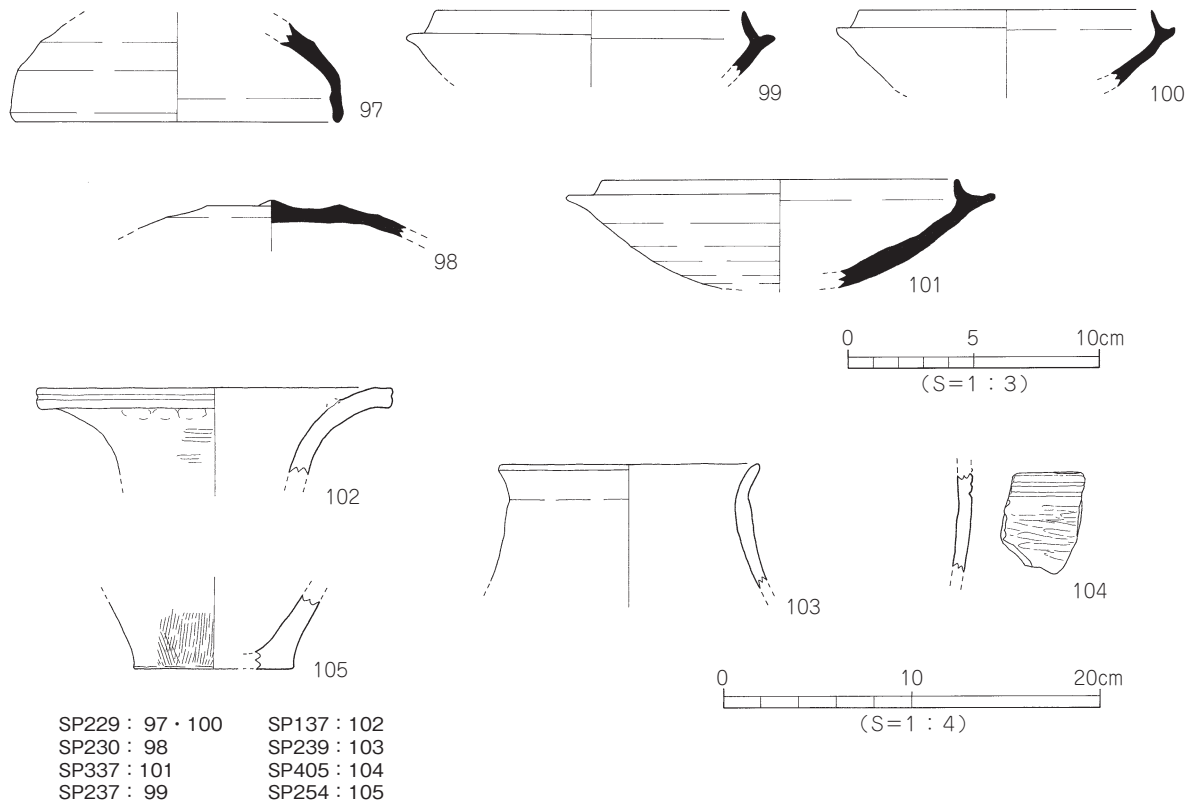
調査では、第Ⅲ層・第Ⅳ層及び第Ⅴ層掘り下げ時に遺物が数多く出土した。ここでは、土層別に出土した遺物を報告する。

１）第Ⅴ層出土遺物（第57～59図、写真図版11・12）

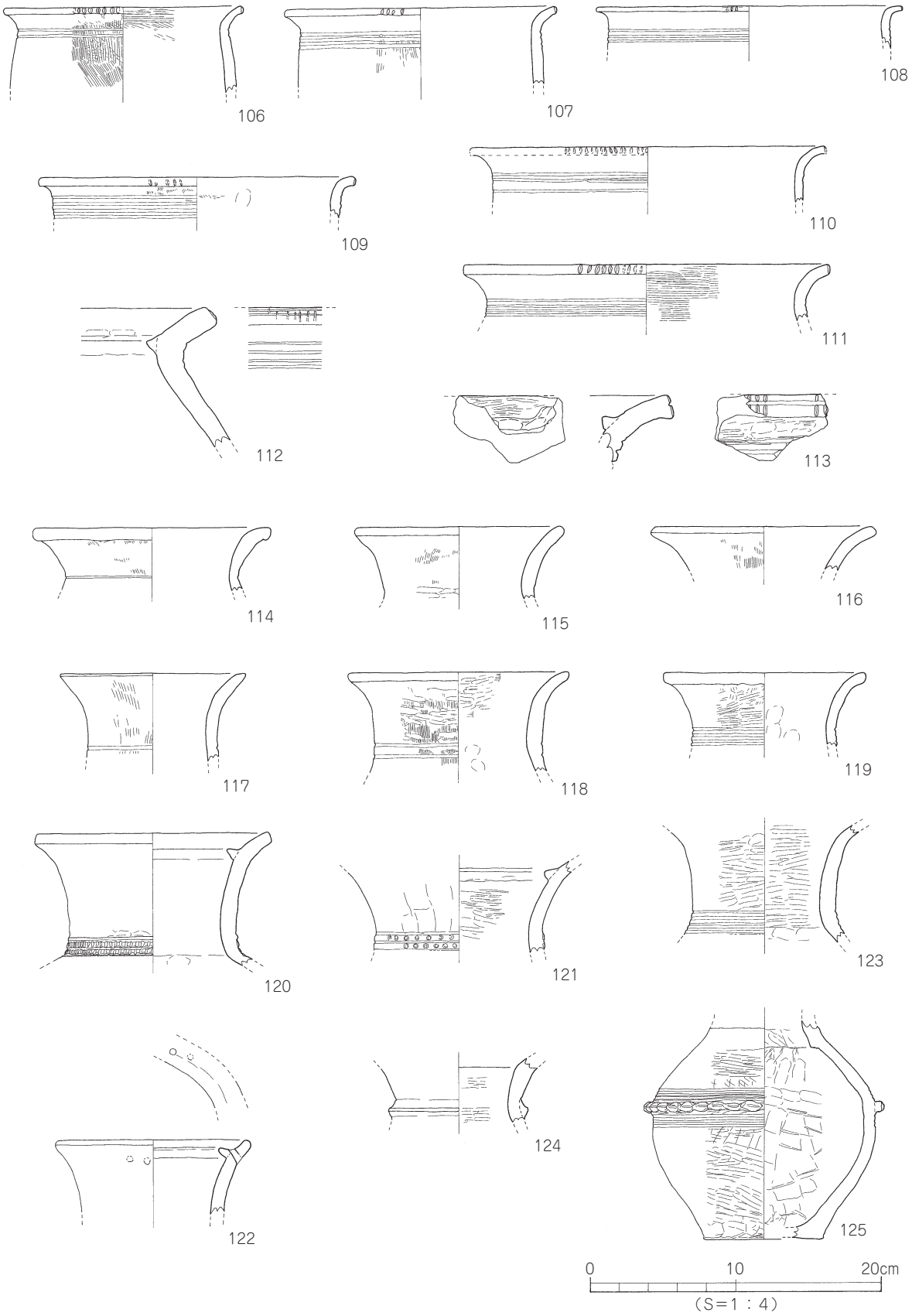
第Ⅴ層中からは、主に弥生時代前期に時期比定される土器や石器が出土した。このうち、石庖丁や石斧には製作段階に破損・廃棄したと思われる未成品が多く含まれている。106 ～ 111は甕形土器。折り曲げにより口縁部を成形するもので口縁端面に刻目を施し、胴部にはヘラ描き沈線文を施す（106 ～ 108･110･111：2条1組、109：3条1組）。112 ～ 129は壺形土器。112･113は大型品で、口縁端面にはヘラ描き沈線文１条と刻目、頸部にヘラ描き沈線文、口縁部内面には凸帯を貼り付ける。なお、113の凸帯は一部が注口状を呈する。114 ～ 116は内傾する頸部に短く外反する口縁部をもつもので、114の頸部外

面にはヘラ描き沈線文１条を施す。117 ～ 119は筒状の頸部に短く外反する口縁部をもつもので、頸部にヘラ描き沈線文を施す。117･118の頸部外面はハケメ調整、119はヘラミガキを施す。120 ～ 124は筒状の長い頸部をもつもので、120 ～ 122の口縁部内面には凸帯を貼り付ける。120の頸部にはヘラ描き沈線文３条と刺突文２列、121は沈線文３条以上と竹管文２列を施す。122は口縁部に円孔２ヶを穿ち、123は頸部に沈線文５条以上、124は断面三角形状の凸帯を貼り付ける。125は広口壺で、胴部中位に凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。また、凸帯上部と下部にはヘラ描き沈線文を施す。126･127は肩部片で126は沈線文３条と竹管文３列、127は３条１組のヘラ状工具による沈線文を施す。128･129は胴部片で、128の外面にはヨコ方向の細かなヘラミガキがみられる。129は大型品で凸帯を貼り付け、凸帯上にヘラ描き沈線文４条を施す。130は鉢形土器で、口縁部は緩やかに外反する。131 ～ 134は蓋形土器で、131･132のつまみ中央部は凹む。133･134は口縁部が外反し、133は内面に、134は外面にヘラミガキを施す。なお、134の口縁部内面には一部煤が付着している。135 ～ 143は甕形土器、144 ～ 150は壺形土器の底部。136･138 ～ 140･144･145･147はわずかに上げ底、その他は平底をなす。

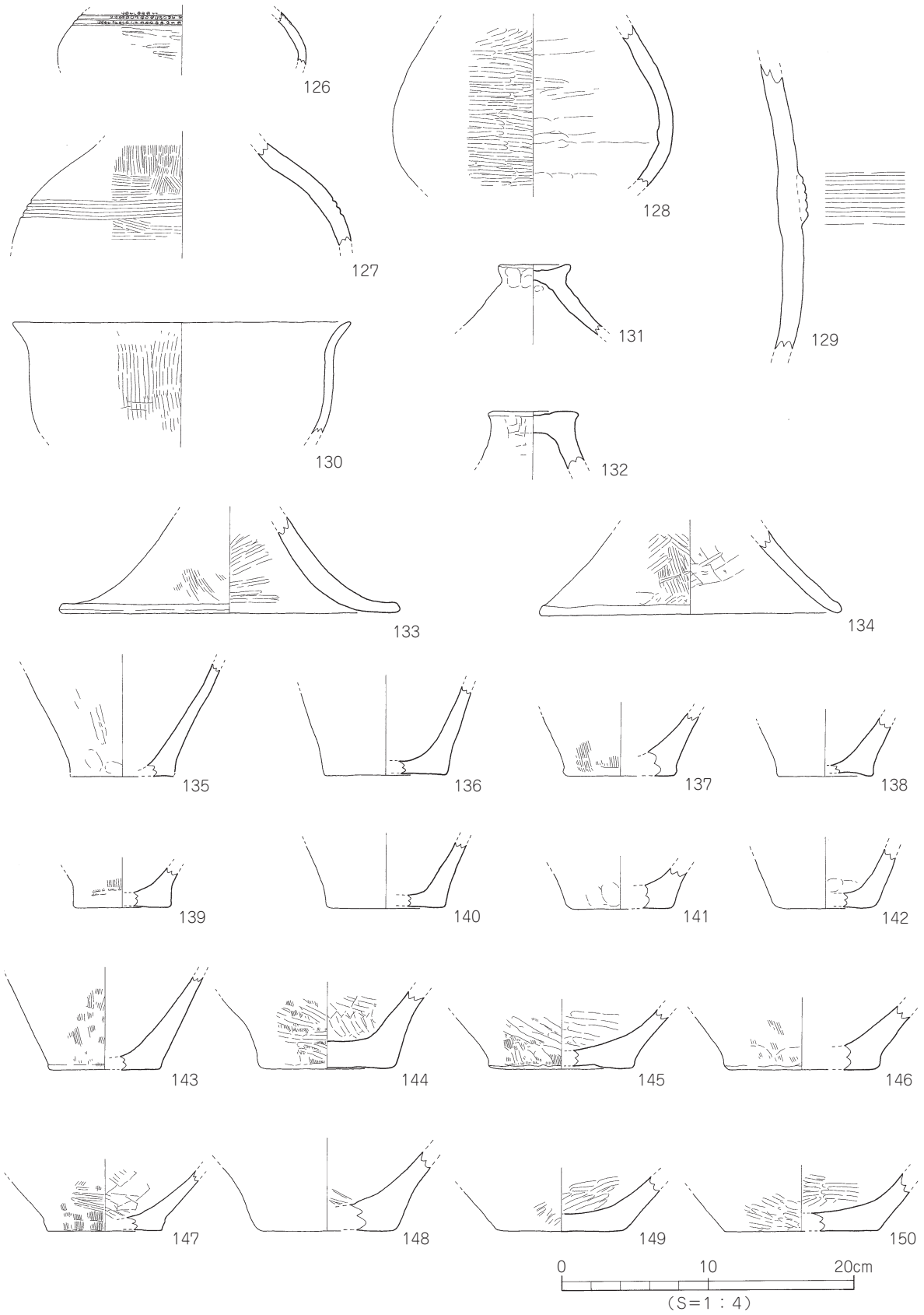
151 ～ 154は石庖丁。151は破損品で、貫孔は敲打により両面から施されており、ａ面には貫孔箇所以外に貫孔に伴うと思われる敲打痕が認められる。刃部はａ面の鎬は明瞭であるが、ｂ面は不明瞭であり、いわゆる扁両刃となっている。152･153は粗割後の敲打段階に破損した未成品であり、153は背部に貫孔のための敲打痕を残す。154は研磨段階の未成品で、刃部は扁両刃となっている。両面共に、一部研磨痕を残す。結晶片岩製。155 ～ 158は扁平片刃石斧。155は刃部を一部欠損する成品で基部に



第56図　柱穴出土遺物実測図



第57図　第Ⅴ層出土遺物実測図（1）



第58図　第Ⅴ層出土遺物実測図（2）

くらべ刃部の幅は広く、側面はやや丸みを帯びている。鎬は明瞭であり、研磨は全面に施されている。156･157は研磨段階の未成品で、側面には粗い研磨が残る。158はノミ形石斧の破損品である。扁両刃で刃部はやや丸みを帯び、全面に丁寧な研磨が施されている。結晶片岩製。159は柱状片刃石斧。粗割段階の未成品で、両面に自然面を残す。160･161は伐採斧。刃部の破損品で、161の側面には粗い研磨を施す。刃部には丁寧な研磨が施され、使用による刃こぼれが部分的に認められる。結晶片岩製。

２）第Ⅳ層出土遺物（第60図、写真図版12）

第Ⅳ層中からは、主に古墳時代に時期比定される土師器や須恵器のほか瓦片が出土した。162 ～ 165は須恵器。162は坏身片で、たちあがりの推定径11.2cmを測る。163は高坏の坏柱部片、164は脚裾部片で、164の裾部端面には凹線状の凹みが巡る。165は甕の口縁部片で口縁部は長方形状に肥厚し、口縁部内面は上内方に拡張される。166は土師器高坏で、脚柱部外面は面取りされる。167は瓦質土器。甕の肩部片で、外面には格子叩きを施す。

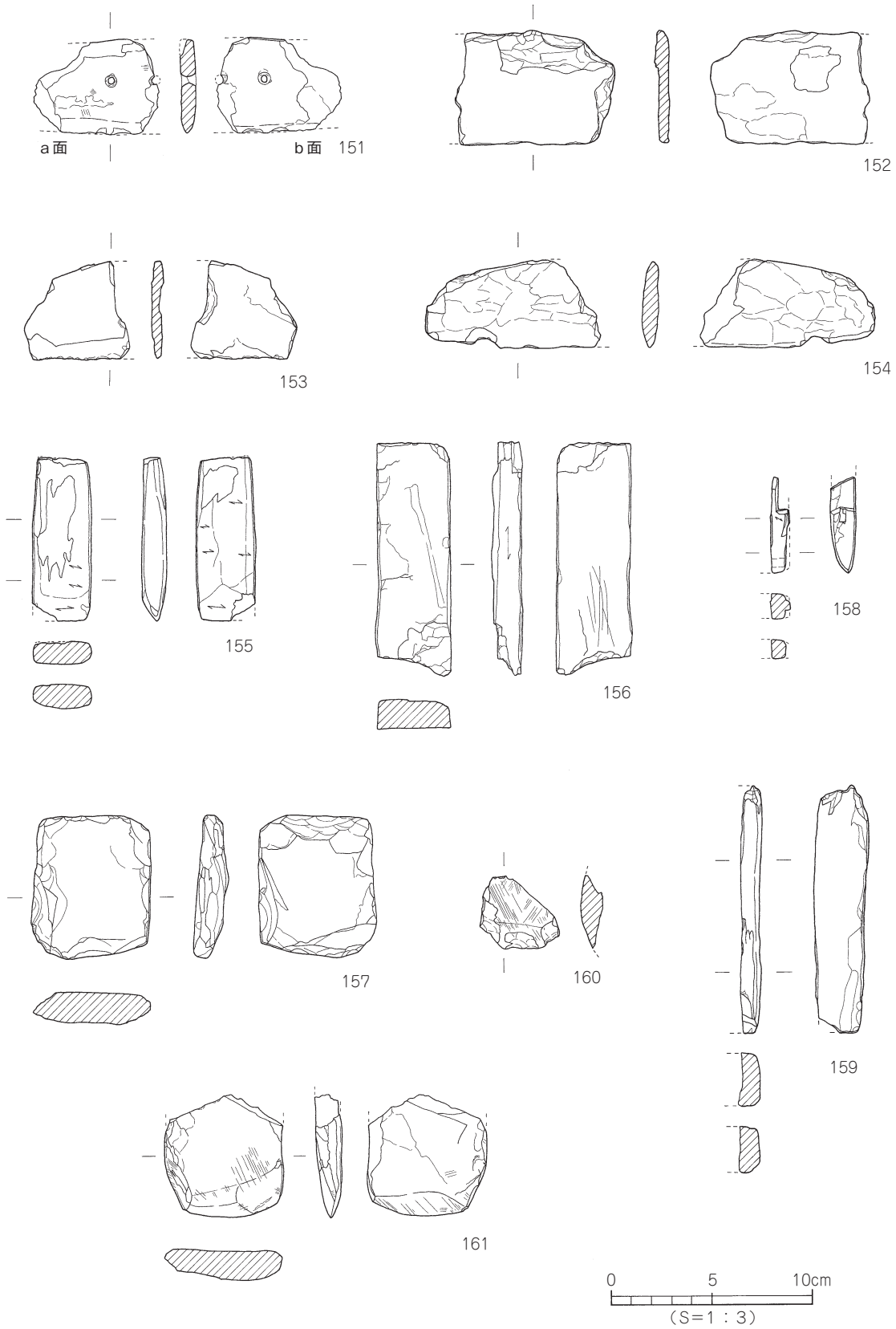
３）第Ⅲ層出土遺物（第61図）

第Ⅲ層中からは古墳時代から奈良、平安時代に時期比定される土師器や須恵器が出土した。168 ～ 176は須恵器。168 ～ 170は坏蓋で、口径12.8 ～ 14.0cmを測る。171は坏身片で、たちあがりは低く内傾し端部は尖り気味に仕上げる。172･173は坏の口縁部片で、172は口縁中位に不明瞭な稜をもつ。174は坏の底部で、外面に回転ヘラキリ痕を残す。175は椀で体部は内湾し、底部外面に回転ヘラケズリを施す。176は瑳で、口縁下に２条の凸線が巡る。177は土師器甕の口縁部片で、口縁端部は内傾する平坦面をもち、内面には粗いハケメ調整を施す。

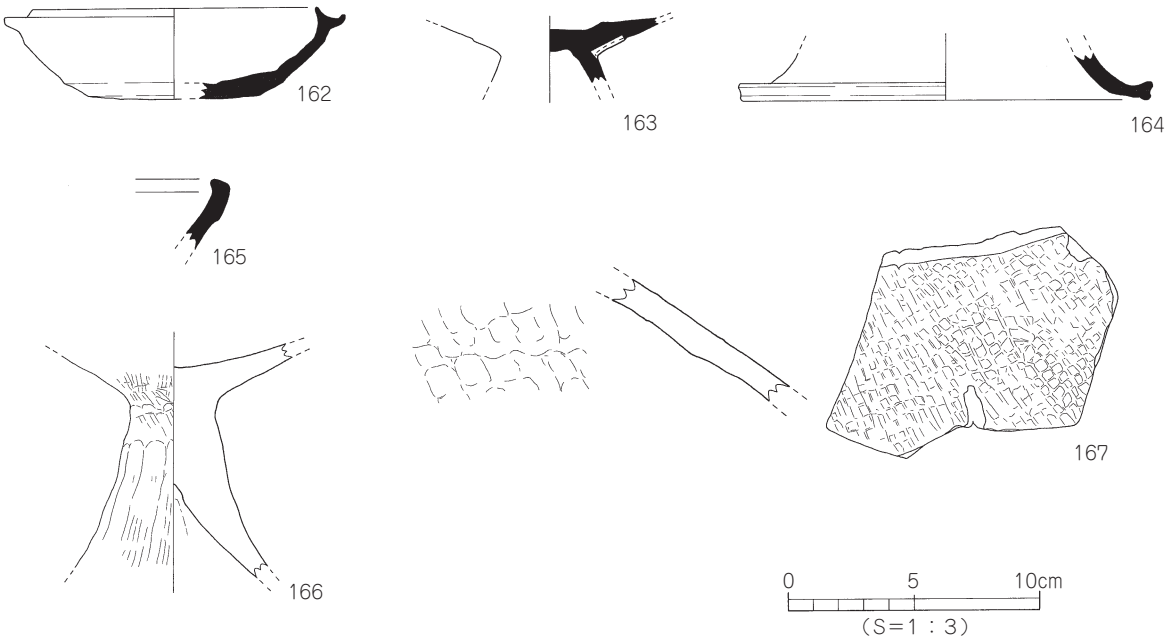
（４）地点不明出土遺物（第62図、写真図版12）

調査では、重機による表土掘削時や調査壁沿いに設定したトレンチ、近現代坑などから遺物が出土した。これらの中には出土層位や出土位置が不明な遺物があり、ここでは、一括して「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。なお、遺物には弥生時代や古墳時代の土器のほかに、中世や近世の土師器や陶磁器などが含まれている。

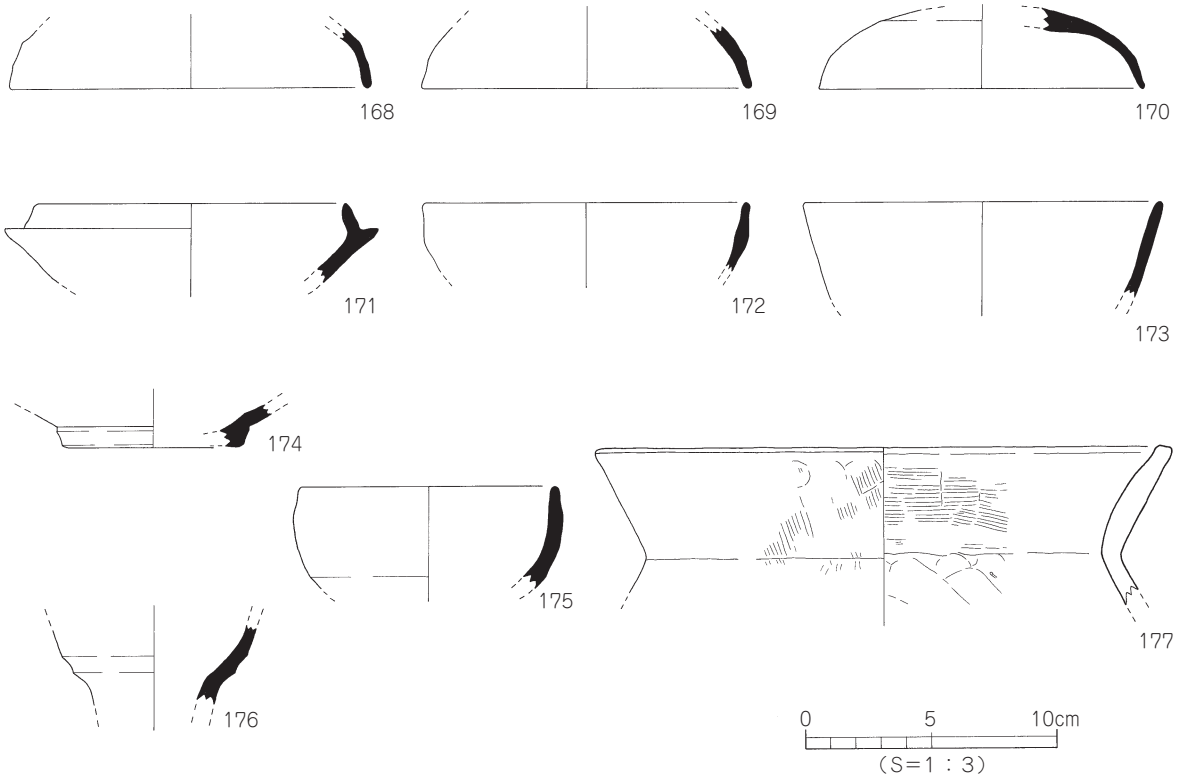
178 ～ 190は弥生土器。178･179は甕形土器。口縁部は折り曲げにより成形され、178の胴部外面には２条１組のヘラ状工具による沈線文４条を施す。180･181は広口壺。180は内傾する頸部に短く外反する口縁部をもち、頸部に「M」字状の凸帯を貼り付ける。182は壺形土器の胴部片で、ヘラ描き沈線文５条以上を施す。183･184は甕形土器、185 ～ 189は壺形土器の底部、190は所謂「コシキ」である。190は壺形土器の転用品で径1.5cm大の孔を穿ち、内外面共にヨコ方向のヘラミガキを施す。弥生前期。191 ～ 194は須恵器。191･192は坏身、193は提瓶、194は甑の把手部である。古墳後期。195は肥前系の陶器碗で、内面に刷毛目文様を施す。胎土は灰黄白色を呈し、全面に透明釉が掛けられている。江戸後期。196は石庖丁で、粗割後の敲打段階の未成品である。結晶片岩製。197は砂岩製の石錘で、長さ8.7cm、幅7.3cm、厚さ1.2cmを測る。両面に自然面を残し、部分的に使用痕が認められる。



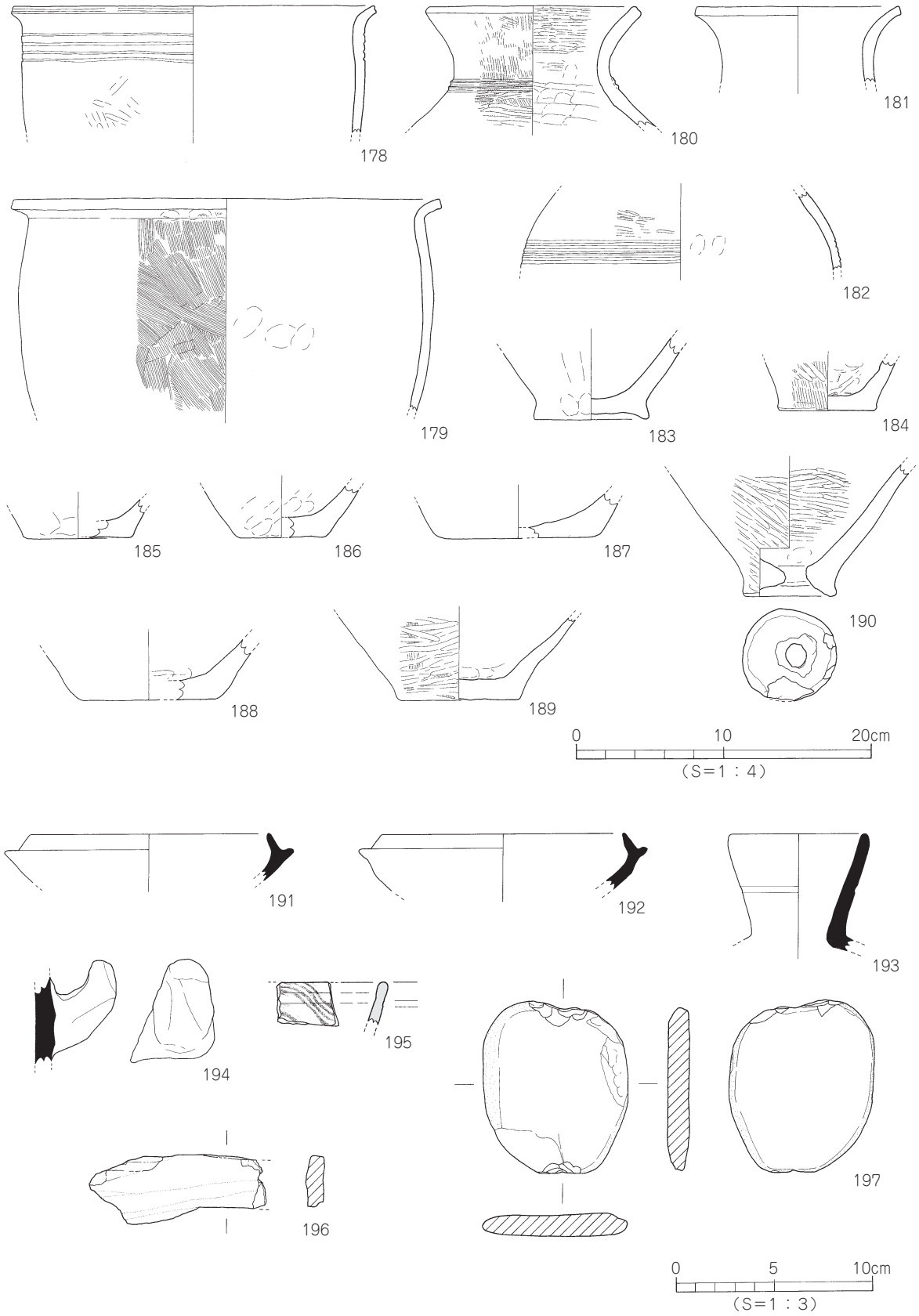
第59図　第Ⅴ層出土遺物実測図（3）



第60図　第Ⅳ層出土遺物実測図



第61図　第Ⅲ層出土遺物実測図



第62図　地点不明出土遺物実測図

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、た→たちあがり、頸→頸部、胴→胴部、体→体部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表2　竪穴住居一覧

番号(SB)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	内部施設	出土遺物	時　期	備考
1	1	A3・4	(方形)	4.70×(0.81)×0.24	黒褐色粘質シルト・褐色粘質シルト	周壁溝	土・須	6世紀後半	
2	2	M11～N12	長方形	4.40×3.96×0.06	黒褐色粘質シルト(黄色シルト混)	周壁溝・焼土	土・須	古墳終末以前	
3	1	D・E3	方形	4.60×4.20×0.04	黒褐色粘質シルト	カマド・周壁溝	土・須	6世紀後半	

表3　掘立柱建物一覧

番号(掘立)	区	地　区	方位	規模(間)	桁行長(m)	梁行長(m)	床面積(m)	柱穴埋土	出土遺物	時　期	備考
1	1	A1・2	南北	3×(1)	4.62	(1.66)	(7.66)	黒褐色シルト	弥・須	7世紀初～前半	
2	1	C1～D2	南北	3×2	4.86	3.90	18.95	黒褐色シルト(黄色シルト混)	弥・土・須	7世紀初～前半	
3	1	C1～D2	南北	3×3	4.04	3.90	15.75	黒色シルト(黄色シルト混)	弥・土・須	7世紀前半	
4	1	A3～B4	東西	(2)×2	(4.38)	4.01	(17.56)	黒色シルト	弥・須	7世紀前半	
5	1	B3～C4	南北	1×2	3.80	3.20	12.16	黒色シルト	土・須	7世紀前半	
6	1	B2～C3	南北	2×2	3.24	2.96	9.59	黒色シルト(黄色シルト混)	土・須	7世紀前半	
7	1	C7～D8	南北	2×2	3.92	3.46	13.49	黒色シルト(黄色シルト混)	土・須	7世紀前半	
8	2	J・K12	東西	2×2	4.50	3.43	15.43	黒褐色シルト	土・須	7世紀初～前半	
9	2	M11～N12	東西	3×2	4.99	3.94	19.66	黒褐色シルト	土・須	7世紀初～前半	
10	2	L13・14	東西	2×2	3.48	2.88	10.02	黒褐色シルト(黄色シルト混)	弥・須	7世紀初～前半	
11	2	J13～K14	東西	2×2	3.83	3.49	13.36	黒褐色シルト(黄色シルト混)	弥・土・須	7世紀初～前半	
12	2	I～K11	東西	4×(1)	8.28	(0.90)	(7.45)	黒褐色シルト(黄色シルト混)	土・須	7世紀初～前半	
13	1	D8～E9	東西	3×2	4.86	3.85	18.71	黒褐色シルト(黄色・褐色シルト混)	弥・土・須・石	7世紀初～前半	
14	1	D～F3	東西	3×2	5.16	3.86	19.91	黒褐色シルト(黄色・褐色シルト混)	弥・土・須	7世紀初～前半	
15	1	D4～E5	東西	2×1	3.67	2.56	9.39	黒褐色シルト(黄色シルト混)	弥・須	7世紀初～前半	

表4　溝一覧　(1)

番号(SD)	区	地　区	方向	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備考
1	1	A～G2	東西	U字状	29.50×0.80×0.16	灰オリーブ色砂質シルト	土・陶	近世以降	
2	1	A2～B3	東西	皿状	1.40×0.60×0.12	暗褐色粘質シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
3	1	A7～D10	北東→南西	皿状	17.10×1.25×0.14	黒褐色シルト	弥・須	古墳時代終末以前	
4	2	J～L12	東→西	皿状	15.00×0.88×0.12	黒褐色シルト	弥・須	古墳時代終末以前	
5	2	K14～N16	北東→南西	皿状	15.50×0.56×0.08	黒褐色シルト	土・須	古墳時代終末以前	
6	2	L16～N14	北西→南東	皿状	13.82×0.92×0.16	黒褐色シルト	土・須	古墳時代終末以前	
7	1	D10～G8	北西→南東	皿状	15.42×0.68×0.17	黒褐色シルト	土・須・瓦質	7世紀前半	
8	1	D9～E10	南北	皿状	4.50×0.56×0.18	黒色シルト	—	7世紀前半以前	
9	1	F・G10	東西	皿状	3.97×1.42×0.17	黒色シルト	弥・土	古墳時代終末以前	
10	1	F9・10	南北	皿状	2.44×0.94×0.20	黒色シルト	—	古墳時代終末以前	

溝一覧 (2)

番号(SD)	区	地　区	方向	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備考
11	1	G5	東西	皿状	3.04×1.04×0.21	黒褐色シルト	須・石	古墳時代終末以前	
12	1	D5	南北	皿状	4.82×0.96×0.10	黒色シルト	弥・須	古墳時代終末以前	
13	1	F5	東西	皿状	4.42×1.18×0.13	黒色シルト	土・須	古墳時代終末以前	
14	1	D3	東西	皿状	0.72×0.20×0.11	黒色シルト	—	古墳時代終末以前	
15	1	F3	東西	皿状	1.94×0.73×0.08	黒色シルト	—	古墳時代終末以前	

表5　土坑一覧

番号(SK)	区	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備考
1	1	C1	不整楕円形	逆台形状	1.50×0.80×0.20	暗褐色粘質シルト	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
2	1	C3	不整楕円形	逆台形状	1.38×0.95×0.16	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
3	1	B3	不整楕円形	逆台形状	1.65×1.52×0.06	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥	弥生前期末～中期初頭	
5	1	A5	円形	筒状	1.09×1.07×0.31	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
6	1	C5	楕円形	逆台形状	1.10×0.84×0.18	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
7	1	D8	不整楕円形	舟底状	2.53×1.17×0.52	暗褐色粘質シルト 他	弥	弥生前期末～中期初頭	
11	1	B7	不整楕円形	逆台形状	2.14×1.28×0.27	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
14	1	A・B5	不整楕円形	逆台形状	1.24×0.77×0.21	暗褐色シルト(黄色シルト混)	弥	弥生前期末～中期初頭	
15	2	M14	楕円形	筒状	1.15×0.83×0.34	暗褐色粘質シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
17	2	J・K13	不定形	逆台形状	2.41×2.32×0.12	黒褐色シルト	弥・土・須	7世紀初～前半	
18	2	M12・13	楕円形	逆台形状	3.23×1.41×0.11	暗褐色粘質シルト	弥	弥生後期後半	
20	2	J・K16	不定形	舟底状	(1.35)×1.26×0.44	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
21	2	L12	楕円形	逆台形状	1.14×0.80×0.25	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
23	1	F4	長方形	逆台形状	2.60×1.88×0.20	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
24	1	D1・2	円形	筒状	1.50×1.50×0.27	暗褐色シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
25	1	G9	円形	舟底状	0.74×(0.72)×0.37	褐灰色シルト	須・石	13世紀	
26	1	G9	不整楕円形	逆台形状	0.72×(0.49)×0.05	暗褐色シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
27	1	G1	楕円形	逆台形状	(1.20)×(1.19)×0.39	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥	弥生前期末～中期初頭	
28	1	F・G1	円形	逆台形状	0.91×0.91×0.22	暗褐色粘質シルト(黄色シルト混)	弥	弥生前期末～中期初頭	
29	1	F2	不整楕円形	逆台形状	1.32×1.12×0.13	暗褐色シルト(黄色シルト混)	弥・石	弥生前期末～中期初頭	
30	1	F2	不整楕円形	逆台形状	1.63×0.82×0.06	暗褐色粘質シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
31	1	E2	不整楕円形	逆台形状	1.71×1.02×0.09	暗褐色シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
32	1	F5	不定形	逆台形状	1.88×1.26×0.06	暗褐色シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
33	1	E1	楕円形	逆台形状	1.00×(0.75)×0.12	暗褐色粘質シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	
34	2	L12～M13	不整長方形	逆台形状	2.53×1.72×0.18	暗褐色粘質シルト	弥	弥生前期末～中期初頭	

表6　柱穴一覧 (1)

番号(SP)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考
2	1	C2	楕円形	0.53×0.46×0.27	E	弥	
3	1	C1	楕円形	0.48×0.33×0.12	E		
4	1	C2	円形	0.28×0.28×0.06	E		柱痕
5	1	C3	円形	0.24×0.23×0.18	E		
6	1	C3	楕円形	0.30×0.18×0.08	A		
7	1	D3	円形	0.48×0.47×0.10	E		
8	1	C3	円形	0.28×0.28×0.04	E		
9	1	C3	楕円形	0.20×0.12×0.10	E		
10	1	C3	楕円形	0.18×0.10×0.06	E		
11	1	C3	円形	0.42×0.42×0.06	E		
12	1	C3	円形	0.18×0.18×0.25	E	弥・石	
13	1	D2	円形	0.28×0.26×0.06	E		柱痕
14	1	D2	円形	0.54×0.50×0.11	E		柱痕
15	1	D3	(円形)	0.44×(0.32)×0.22	D		掘立14に切られる。
16	1	C3	円形	0.30×0.30×0.04	E		
17	1	C3	楕円形	0.34×0.22×0.05	E		
18	1	C3	円形	0.28×0.28×0.10	E		
19	1	B2	円形	0.20×0.19×0.08	E		
20	1	B2	円形	0.21×0.20×0.11	E		
21	1	B3	円形	0.44×0.42×0.10	E		

柱穴一覧 (2)

番号(SP)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考
22	1	B3	円形	0.20×0.20×0.04	E		
23	1	C4	楕円形	0.48×0.30×0.07	A		
24	1	C4	楕円形	0.26×0.20×0.04	E		
25	1	C4	楕円形	0.33×0.25×0.12	A		
26	1	C4	円形	0.32×0.30×0.14	F		
27	1	B4	楕円形	0.40×0.28×0.04	E		
28	1	B4	楕円形	0.25×0.17×0.16	E	弥	
29	1	A4	円形	0.14×0.13×0.06	E		
30	1	F4	円形	0.40×0.38×0.22	F	土･須	
31	1	A7	(円形)	0.44×(0.40)×0.23	E		
32	1	A4	楕円形	0.46×0.40×0.04	A		柱痕
33	1	C2	楕円形	0.68×0.50×0.04	C		倒木4上面検出
34	1	B5	円形	0.19×0.19×0.12	E		倒木6上面検出
35	1	A5	(楕円形)	(0.50)×0.34×0.12	A		
36	1	B5	楕円形	0.63×0.50×0.04	E		柱痕
37	1	B5	円形	0.22×0.21×0.05	E		
38	1	C5	円形	0.35×0.35×0.10	E	弥	柱痕
39	1	B6	円形	0.38×0.34×0.27	C		
40	1	B6	円形	0.24×0.24×0.20	A	土	
41	1	B6	円形	0.24×0.24×0.13	E		
42	1	B6	楕円形	0.52×0.40×0.16	E	弥	
43	1	B6	円形	0.30×0.29×0.11	E		
44	1	C6	楕円形	0.28×0.18×0.05	E		
45	1	C6	円形	0.23×0.22×0.07	E		
46	1	C6	円形	0.24×0.23×0.11	E		
47	1	C6	円形	0.28×0.28×0.10	E		
48	1	C6	円形	0.22×0.22×0.09	E		
49	1	C6	円形	0.32×0.32×0.09	E		
50	1	C6	円形	0.30×0.30×0.16	E		
51	1	C6	楕円形	0.44×0.39×0.11	E		
52	1	D6	円形	0.30×0.30×0.08	E		
53	1	D6	円形	0.25×0.25×0.10	E		
54	1	C･D6	円形	0.30×0.30×0.11	A		
55	1	C6	円形	0.22×0.20×0.10	A		
56	1	D7	楕円形	0.40×0.30×0.12	E		
57	1	C6	楕円形	0.62×0.52×0.08	A		柱痕
58	1	B7	楕円形	0.60×0.48×0.40	F	土･須･石	
59	1	B7	円形	0.46×0.44×0.05	F		
60	1	B6	楕円形	0.65×0.60×0.32	E	弥	
61	1	A6	円形	0.28×0.27×0.58	A	土･須	倒木8上面検出
62	1	C7	円形	0.30×0.30×0.06	F		
63	1	C7	楕円形	0.46×0.36×0.30	F	須	掘立7を切る。
64	1	C7	円形	0.44×0.42×0.18	E		
65	1	D6	(円形)	0.40×(0.36)×0.08	E		柱痕
66	1	C7	楕円形	0.40×0.34×0.12	E		
67	1	D10	円形	0.26×0.25×0.20	E		
68	1	C8	不定形	1.00×0.64×0.16	E	弥	
69	1	D7･8	円形	0.33×0.31×0.10	E		
70	1	C8	楕円形	0.35×0.28×0.30	E	弥	柱痕
71	1	C8	円形	0.18×0.17×0.06	E		
72	1	C8	円形	0.23×0.22×0.14	E		
73	1	C8	円形	0.40×0.40×0.13	E		
74	1	B7	円形	0.28×0.28×0.60	A	土･須	
75	1	G3	楕円形	0.28×0.19×0.10	E		
76	1	B8	円形	0.16×0.16×0.08	C		
77	1	B8	楕円形	0.54×0.38×0.38	F	弥･土･須	
78	1	A8	楕円形	0.24×0.20×0.08	F		
79	1	A8	(円形)	0.30×(0.20)×0.08	E		
80	1	B8	円形	0.22×0.22×0.06	E		
81	1	B8	円形	0.20×0.20×0.15	E		
82	1	B8	楕円形	0.43×0.35×0.19	E	弥	
83	1	B8	(円形)	0.24×(0.20)×0.10	E		
84	1	B8･9	楕円形	0.42×0.35×0.04	E		
85	1	D10	円形	0.32×0.32×0.04	E		柱痕

柱穴一覧 (3)

番号(SP)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考
86	1	D10	(円形)	0.60×(0.40)×0.10	E	弥・石	
87	1	C10	円形	0.24×0.24×0.06	E		
88	1	C10	円形	0.16×0.16×0.27	E		
89	1	C10	円形	0.28×0.27×0.17	F	土	
90	1	C10	円形	0.25×0.25×0.16	E		
91	1	C10	円形	0.36×0.34×0.10	E		
92	1	C10	円形	0.37×0.37×0.07	E		柱痕
93	1	D9	楕円形	0.26×0.22×0.06	E		
94	1	D9	円形	0.27×0.27×0.10	E		
95	1	F4	円形	0.35×0.33×0.09	E		
96	1	C8	楕円形	0.30×0.20×0.08	F		
97	1	B7	楕円形	0.90×0.75×0.30	E	弥・石	
98	1	B7	楕円形	0.32×0.27×0.10	F		
99	1	C7	楕円形	0.35×0.15×0.18	D	弥	柱痕
100	1	C6	楕円形	0.25×0.18×0.10	E		
101	1	C6	楕円形	0.30×0.22×0.03	E		
102	1	C6	円形	0.18×0.18×0.07	E		
103	1	B6	楕円形	0.27×0.21×0.09	E		
104	1	B6	楕円形	0.63×0.46×0.09	E		柱痕
105	1	B6	楕円形	0.24×0.20×0.13	E		
106	1	A・B7	円形	0.24×0.23×0.11	E		
107	1	A6・7	(楕円形)	(0.56)×0.44×0.16	E	弥	
108	1	A7	楕円形	0.28×0.18×0.08	E		
109	1	A8	円形	0.15×0.15×0.09	E		
110	1	B8	円形	0.63×0.60×0.12	E		
111	1	F4	円形	0.26×0.25×0.07	E		
112	1	F4	円形	0.30×0.29×0.04	F		
113	1	F4	楕円形	0.30×0.20×0.06	E		柱痕
114	1	C7	楕円形	0.25×0.18×0.04	F		柱痕
115	1	C7	楕円形	0.30×0.18×0.10	C		
116	1	B・C7	楕円形	0.35×0.25×0.10	E		柱痕
117	1	C8	円形	0.27×0.26×0.30	E	弥・石	
118	1	B8	円形	0.28×0.27×0.06	E		
119	1	G3	円形	0.20×0.20×0.10	E		
120	1	A6	円形	0.24×0.23×0.16	F	土	
121	1	A・B5	円形	0.53×0.48×0.20	A		
122	1	C1	楕円形	0.68×0.57×0.08	D		SK1を切る。
123	1	C7	楕円形	0.45×0.38×0.05	B		掘立7を切る。
124	1	A2・3	楕円形	0.64×0.48×0.25	B	土・須	SD2を切る。
125	1	C5・6	円形	0.20×0.20×0.13	C		
126	1	B5	楕円形	0.35×0.25×0.07	C		
127	1	A4	楕円形	0.37×0.23×0.14	B	土・須	SB1を切る。
128	2	M16	楕円形	0.25×0.18×0.07	E		
129	2	M16	楕円形	0.19×0.11×0.07	D		
130	2	N16	円形	0.20×0.20×0.07	D		
131	2	N16	円形	0.20×0.20×0.13	D		
132	2	N16	円形	0.24×0.23×0.04	E		
133	1	G3	円形	0.18×0.18×0.12	F		
134	1	F3	円形	0.22×0.21×0.06	D		
135	2	M16	楕円形	0.57×0.40×0.28	B	土・須	SD6を切る。
136	1	G3	円形	0.20×0.20×0.06	E		
137	2	M15	円形	0.44×0.42×0.08	E	弥	SD5を切る。
138	2	M16	楕円形	0.28×0.20×0.07	D		
139	2	K11	円形	0.32×0.31×0.16	F		
140	2	K11	円形	0.24×0.23×0.24	F	須	
141	2	K11	円形	0.26×0.26×0.10	E		
142	2	L15	楕円形	0.45×0.38×0.11	E		
143	1	F3	円形	0.17×0.16×0.04	D		
144	2	K11	円形	0.31×0.30×0.36	E	弥	
145	2	K12	楕円形	0.38×0.24×0.18	C		
146	2	J・K15	楕円形	1.20×0.44×0.05	A		
147	2	M14	円形	0.30×0.30×0.05	E		柱痕
148	2	J14	円形	0.18×0.17×0.25	E	弥・石	
149	2	K14	円形	0.21×0.20×0.11	B		

柱穴一覧 (4)

番号(SP)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考
150	2	N16	円形	0.32×0.32×0.12	D		
151	2	M15	円形	0.24×0.23×0.04	A		SD6を切る。
152	2	M16	楕円形	0.55×0.22×0.06	D		
153	2	M16	円形	0.24×0.22×0.07	D		
154	2	M16	円形	0.26×0.26×0.10	E		
155	2	L15	円形	0.26×0.25×0.11	E		
156	2	N16	楕円形	0.40×0.34×0.20	D	土･須	
157	2	M16	楕円形	0.70×0.45×0.05	D	土	柱痕
158	2	M14	楕円形	0.60×0.36×0.10	E		柱痕
159	2	J･K14	楕円形	0.50×0.40×0.17	E		
160	2	K14	円形	0.24×0.24×0.30	E	弥･石	
161	2	K14	円形	0.17×0.17×0.11	E		
162	2	K14	楕円形	0.50×0.30×0.26	F	土･須	
163	2	K14	円形	0.21×0.20×0.20	F		
164	2	L15	円形	0.26×0.25×0.06	F		SD5を切る。
165	2	L15	楕円形	0.40×0.22×0.07	F		SD5を切る。
166	2	L15	楕円形	0.22×0.17×0.07	F		SD5を切る。
167	2	L15	楕円形	0.28×0.11×0.06	F		SD5を切る。
168	2	L14	円形	0.44×0.42×0.20	A	土	柱痕
169	2	M14	円形	0.13×0.12×0.05	B		
170	2	M･N14	円形	0.18×0.18×0.28	B		
172	2	M14	円形	0.21×0.20×0.10	E		
173	2	N16	円形	0.12×0.11×0.06	A		SD5を切る。
174	2	M14	円形	0.15×0.15×0.05	E		
175	2	M14	円形	0.23×0.23×0.15	E		
176	2	M14	円形	0.20×0.20×0.10	E		
177	2	N16	楕円形	0.20×0.16×0.08	B		SD5を切る。
178	2	M16	円形	0.28×0.28×0.18	E		
179	2	M16	円形	0.27×0.27×0.05	E		
180	2	M14	円形	0.22×0.21×0.06	E		
181	2	M16	円形	0.29×0.28×0.16	D		SD6を切る。
182	2	M14	円形	0.28×0.28×0.06	E		
183	2	M14	円形	0.20×0.20×0.27	E	弥	
184	2	N13	円形	0.14×0.13×0.07	F		
185	2	J14	楕円形	0.47×0.30×0.21	E		
186	2	M11	円形	0.20×0.20×0.20	E		
187	2	M11	円形	0.18×0.18×0.06	E		
188	2	M14	円形	0.15×0.15×0.09	E		
189	2	M15	円形	0.22×0.21×0.04	E		
190	2	M15	円形	0.11×0.10×0.06	E		
191	2	M15	円形	0.10×0.09×0.04	E		
192	2	M16	円形	0.17×0.16×0.07	D		
193	2	M16	円形	0.15×0.15×0.10	D		
194	2	M16	円形	0.17×0.16×0.10	D		
196	2	M15	楕円形	0.40×0.36×0.04	E		
197	2	M15	楕円形	0.30×0.22×0.18	E		
198	2	M16	円形	0.10×0.10×0.04	E		
199	2	M16	円形	0.10×0.10×0.04	D		
200	2	M16	円形	0.11×0.10×0.04	D		
201	2	M16	円形	0.20×0.20×0.04	E		
202	2	M14	円形	0.35×0.34×0.11	E		
203	2	M16	楕円形	0.26×0.21×0.04	D		
204	2	M14	円形	0.14×0.14×0.06	C		
205	2	M14	円形	0.28×0.28×0.20	C	土･須･石	
206	2	M14	円形	0.37×0.36×0.05	C		柱痕
207	2	N14	円形	0.16×0.16×0.04	E		
208	2	N14	円形	0.15×0.15×0.06	F		
209	2	M13	(円形)	0.32×(0.16)×0.09	E		
210	2	N13	円形	0.19×0.18×0.05	F		
212	2	M･N13	円形	0.15×0.15×0.14	E		
213	2	M15	楕円形	0.32×0.12×0.07	F		SD5を切る。
214	2	M13	円形	0.15×0.14×0.08	F		
215	2	M13	円形	0.31×0.30×0.23	F	弥	
216	2	N16	楕円形	0.36×0.22×0.11	B		SD5を切る。

柱穴一覧 (5)

番号(SP)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考
217	2	M13	円形	0.24×0.24×0.09	E		
218	2	M13	円形	0.26×0.25×0.06	E		
219	2	M13	円形	0.19×0.18×0.06	E		
220	2	M13	円形	0.20×0.19×0.07	E		
221	2	M13	円形	0.19×0.19×0.10	E		
222	1	F1	楕円形	0.30×0.21×0.13	C	土・須	SK28を切る。
223	2	L13	円形	0.20×0.20×0.04	E		
227	2	M14	円形	0.24×0.23×0.08	C		
229	2	J13	円形	0.50×0.48×0.20	E	弥・土・須	
230	2	J13	楕円形	0.20×0.14×0.10	B	須	
233	2	J13	円形	0.15×0.15×0.06	D		
237	2	J13	円形	0.26×0.26×0.20	B	須	
238	2	N13	楕円形	0.26×0.17×0.06	E		
239	2	J13	円形	0.40×0.40×0.18	E	弥	
240	2	K12	円形	0.26×0.26×0.18	E		
241	2	K12	円形	0.22×0.22×0.10	E		
242	2	K12	円形	0.20×0.20×0.36	E	弥・石	
246	2	J13	円形	0.25×0.24×0.11	F		
247	2	J13	(円形)	0.12×(0.09)×0.08	E		
248	2	J14	楕円形	0.56×0.35×0.06	B		
253	2	J11	(円形)	0.30×(0.15)×0.17	B		
254	2	J11	(円形)	0.64×(0.35)×0.21	E	弥	
255	2	J11	(円形)	0.50×(0.26)×0.06	E		
257	2	K11	円形	0.18×0.18×0.20	E	弥	
258	2	K11	円形	0.26×0.25×0.10	E		
260	2	K11	(円形)	0.34×(0.22)×0.04	F		
261	2	K12	円形	0.30×0.30×0.08	F		
262	2	K11	(円形)	0.46×(0.22)×0.08	D		
263	2	N13	(円形)	(0.30)×(0.12)×0.07	C		
264	2	K11	(円形)	0.40×(0.22)×0.11	B		
265	2	N13	(円形)	(0.51)×(0.23)×0.11	F		
266	2	M12	円形	0.12×0.11×0.06	E		
267	2	N12	円形	0.13×0.13×0.06	E		
268	2	N12	円形	0.15×0.15×0.10	C		
269	2	M12	円形	0.20×0.20×0.11	C		
270	2	K11・12	楕円形	0.45×0.40×0.15	F	土・須	
271	2	K11	(円形)	0.30×(0.22)×0.08	F		
272	2	K11	(円形)	0.82×(0.45)×0.18	F		
273	2	L11	(円形)	(0.26)×(0.24)×0.10	E		
274	2	L11	(円形)	0.72×(0.40)×0.28	F	弥・石	
275	2	L11	(円形)	0.28×(0.16)×0.05	F		
279	2	M11	楕円形	0.48×0.28×0.16	F	弥・石	
280	2	M11	円形	0.20×0.20×0.13	F		
281	2	M11	円形	0.22×0.21×0.06	F		
282	2	M11	円形	0.21×0.21×0.07	F		
284	2	M11	楕円形	0.45×0.22×0.18	F	土・須	
287	2	M11	円形	0.22×0.21×0.10	E		
290	2	M12	楕円形	0.25×0.22×0.10	E		
291	2	M12	楕円形	0.42×0.28×0.08	D		
293	2	J13	円形	0.30×0.30×0.09	E		
295	2	J・K13	円形	0.50×0.48×0.06	E		
298	2	M14	円形	0.26×0.26×0.10	E		
299	2	N15	円形	0.39×0.38×0.09	E		
300	2	M・N15	楕円形	0.65×0.46×0.10	B	土・須	SD6を切る。
301	2	N16	(円形)	0.22×(0.36)×0.12	A		
302	2	N16	(円形)	0.34×(0.25)×0.04	D		
306	2	N16	円形	0.26×0.24×0.12	E		
309	2	M16	楕円形	0.21×0.13×0.07	E		
317	2	L15	楕円形	0.57×0.44×0.06	F		SD5を切る。
322	2	L11	楕円形	0.31×0.22×0.17	E		
324	2	L11	(円形)	0.33×(0.18)×0.11	F		
326	2	M12	円形	0.46×0.46×0.15	C	弥・土・須	
327	2	M12	楕円形	0.37×0.33×0.09	C		
337	2	K12	円形	0.28×0.27×0.24	A	土・須	

柱穴一覧 (6)

番号(SP)	区	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考
343	2	M15	円形	0.19×0.18×0.10	E		
344	2	N13	円形	0.16×0.16×0.06	F		
345	2	N14	円形	0.15×0.15×0.06	B		
347	1	G8	(楕円形)	0.36×(0.21)×0.14	A		
348	1	D2	円形	0.62×0.60×0.12	C		SK24を切る。
349	1	F1	円形	0.52×0.50×0.30	D	土･須･石	
350	1	F1	楕円形	0.31×0.27×0.29	A	土･須	
351	1	F1	円形	0.16×0.16×0.03	A		
352	1	F1	円形	0.20×0.20×0.03	A		
353	1	B8	(楕円形)	0.58×(0.43)×0.12	C		
354	1	F3	円形	0.27×0.24×0.08	A		
355	1	G3	楕円形	0.44×0.32×0.10	A	土	
356	1	G3	楕円形	0.48×0.24×0.07	A		
357	1	F3	円形	0.22×0.20×0.02	E		
359	1	E3	楕円形	0.28×0.24×0.05	A		
360	1	G2･3	(楕円形)	0.82×(0.28)×0.09	A	土･須･陶	
361	1	D1	円形	0.30×0.30×0.11	A		
362	1	F3	楕円形	0.30×0.22×0.24	A	土	
363	1	F3	楕円形	0.60×0.34×0.03	E		
364	1	E3	楕円形	0.86×0.48×0.19	D		
365	1	D3	円形	0.14×0.14×0.05	E		
366	1	D3	楕円形	0.26×0.22×0.13	E		
367	1	D3	楕円形	0.28×0.24×0.09	A		
368	1	D3	楕円形	0.20×0.16×0.09	E		
369	1	D3	楕円形	0.28×0.24×0.09	E		
370	1	D4	円形	0.16×0.16×0.05	E		
371	1	E4	楕円形	0.50×0.33×0.07	E	弥	
372	1	E4	楕円形	0.36×0.22×0.06	F		
373	1	F2	円形	0.28×0.27×0.10	F		SK30を切る。
374	1	G3	円形	0.26×0.26×0.08	E		
375	1	F2	円形	0.23×0.20×0.04	E		
376	1	G2	円形	0.26×0.24×0.08	A		
377	1	G2	楕円形	0.50×0.33×0.07	A		
378	1	G2	円形	0.33×0.32×0.08	A		
379	1	G2	楕円形	0.30×0.20×0.10	A		
380	1	G7	(楕円形)	0.76×(0.42)×0.15	A	土	
382	1	G6	(円形)	(0.22)×0.24×0.10	A		
383	1	G2	円形	0.27×0.26×0.06	E		SD1下面検出
384	1	G3	楕円形	0.28×0.20×0.06	A		
385	1	G4	円形	0.24×0.24×0.11	A		
386	1	G4	円形	0.18×0.17×0.09	A		
387	1	G4	楕円形	0.20×0.14×0.09	A		
388	1	G4	(円形)	(0.22)×0.24×0.06	A		
389	1	G4	(円形)	(0.20)×0.20×0.08	A		
390	1	G5･6	楕円形	0.50×0.44×0.08	A		
391	1	G5	楕円形	0.82×0.70×0.09	A		柱痕
392	1	E6	円形	0.28×0.28×0.05	B		
393	1	E6	円形	0.42×0.42×0.15	B		
394	1	F6	楕円形	0.60×0.40×0.12	B	土･須	
395	1	F6	楕円形	0.23×0.18×0.11	B		
396	1	F6	楕円形	0.60×0.50×0.24	B	弥･土･須	
397	1	D6	楕円形	0.40×0.38×0.10	C		
398	1	F･G8	楕円形	0.36×0.30×0.13	B	土	
399	1	G8	楕円形	0.40×0.30×0.19	B		
400	1	F5	楕円形	0.60×0.38×0.11	B		SK32を切る。
401	1	D5	円形	0.18×0.17×0.09	E		
402	1	D3	円形	0.52×0.51×0.26	A	土	柱痕
404	2	K13	楕円形	0.58×0.50×0.22	D		SK17を切る。
405	1	E7	楕円形	0.35×0.30×0.19	F	弥	
406	1	F10	円形	0.18×0.17×0.20	E		

表７　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	残高 9.2	折曲口縁。口縁端面に刻目。ヘラ沈線文３条。	マメツ	ナデ(マメツ)	にぶい黄橙色 にぶい褐色	石･長(1 ～ 5) ○		9
2	甕	口径 (19.8) 残高 7.4	折曲口縁。口縁端面に刻目。ヘラ沈線文３条。	ミガキ→ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(1 ～ 3) ○		9
3	蓋	つまみ径 (4.7) 残高 3.2	つまみ中央部は凹む。	天ナデ 口ハケ･ミガキ	ナデ	灰褐色 にぶい橙色	石･長(1) ○	黒斑	9

表８　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
4	壺	口径 (11.2) 残高 2.0	広口壺。短く外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状。	ヨコナデ ハケ(7本/cm) →ナデ	ナデ (一部ミガキ)	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(1 ～ 2) ◎		
5	壺	残高 4.7	広口壺。頸部に段あり。	マメツ(ミガキ) ハケ(8本/cm)	ミガキ	黄色 浅黄色	石･長(1 ～ 4) ◎		
6	鉢	底径 (5.0) 残高 2.4	突出する平底。	ナデ	ナデ	浅黄色 灰白色	石･長(1 ～ 2) ◎		

表９　ＳＫ 24 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	甕	口径 (21.8) 残高 4.9	貼付口縁。	マメツ	ミガキ	淡褐色 赤褐色	石･長(1 ～ 4) ○		9
8	甕	口径 (23.8) 残高 5.0	貼付口縁。クシ沈線文12条。	ヨコナデ	ミガキ→ナデ	黒褐色 暗褐色	石･長(1 ～ 3) ◎		9
9	甕	残高 12.7	折曲口縁。ヨコ方向のクシ沈線文16条＋タテ方向のクシ沈線文4条＋刺突文1列。	ミガキ	ミガキ	褐色 黒褐色	石･長(1 ～ 3)金 ◎	黒斑	9
10	甕	残高 6.0	１／４の残存。	マメツ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石･長(1 ～ 2) ○		

表 10　ＳＫ 28 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	壺	残高 6.0	ヘラ沈線文６条以上。	マメツ	マメツ	暗褐色 黒褐色	石･長(1 ～ 3) ○		

表 11　ＳＫ 21 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
12	蓋	つまみ径 5.7 口径 (20.0) 器高 8.5	２／３の残存。つまみ中央部は凹む。	つまみナデ 口ハケ→ミガキ	つまみナデ 口ミガキ	褐灰色 褐色	石･長(1 ～ 3)金 ○		9

表 12　ＳＫ 21 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
13	剥片	—	安山岩	16.9	14.4	2.2	670.0		9

表 13　ＳＫ 33 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
14	甕	口径 (17.1) 残高 4.0	折曲口縁。口縁下端面に刻目。	マメツ	マメツ	乳橙色 暗灰色	石･長(1 ～ 3) ◎		
15	甕	残高 7.0	折曲口縁。ヘラ沈線文３条。	マメツ(ミガキ)	マメツ(ミガキ)	赤褐色 黄褐色	石･長(1 ～ 2)砂粒 ◎		
16	甕	底径 (5.2) 残高 2.7	突出部をもつ平底。	マメツ	ナデ	乳橙色 灰黄色	石(1 ～ 2) ◎		

表 14　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
17	壺	口径 (13.4) 残高 3.9	広口壺。短く外反する口縁部。	マメツ(ナデ)	マメツ	にぶい黄色 灰色	石･長(1 ～ 4) ○		
18	甕	底径 (8.8) 残高 3.1	平底。	ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 灰黄色	石･長(1 ～ 3) ○		

表 15　ＳＫ１出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
19	磨石	完形	結晶片岩	15.3	8.0	3.9	525.0		9
20	器種不明品	―	安山岩	9.2	6.4	2.4	151.3		9
21	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.8	2.2	0.9	7.0		9
22	スクレイパー	完形	サヌカイト	4.0	2.9	0.7	5.7		9

表 16　ＳＫ２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	蓋	口径 (12.6) 残高 2.0	小片。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰白色	石･長(1 ～ 3) ○	煤付着	

表 17　ＳＫ３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
24	甕	口径 (15.6) 残高 5.4	折曲口縁。ヘラ沈線文６条。	マメツ	ナデ(マメツ)	灰黄褐色 灰黄褐色	石･長(1 ～ 4) ◎		

表 18　ＳＫ７出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	甕	底径 (3.6) 残高 6.2	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石･長(1) ◎		
26	甕	底径 (8.0) 残高 3.0	平底。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石･長(1 ～ 3) ◎		
27	甕	底径 (7.4) 残高 3.2	上げ底。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石･長(1) ○		

表 19　ＳＫ 11 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
28	壺	底径 (19.4) 残高 6.0	厚みのある平底。	マメツ	ナデ	灰白色 にぶい橙色	石･長(1 ～ 2)金 ◎		

表 20　ＳＫ 29 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
29	壺	残高 5.7	長頸壺。頸部外面と口縁部内面に押圧凸帯文。ヘラ沈線文１条以上。	ハケ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石･長(1 ～ 2) ○		
30	壺	残高 4.3	「M」字状凸帯。凸帯上段に連鎖状刻目文、下段に刻目。ヘラ沈線文２条。	ミガキ	マメツ	暗灰褐色 灰褐色	石･長(1 ～ 2)金 ○		9

表 21　ＳＫ 31 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	甕	底径 8.4 残高 5.8	平底。底部完形。	マメツ	マメツ	乳橙色 灰黄色	石･長(1) ◎		
32	壺	底径 8.9 残高 3.4	上げ底。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石･長(1 ～ 2) ○	黒斑	
33	コシキ	底径 (6.8) 残高 3.8	甕形土器の転用品。平底。 円孔(φ1.0cm)。	ハケ	マメツ	乳橙色 灰褐色	石･長(1 ～ 2)金 ◎	黒斑	

表 22　ＳＫ 23 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
34	甕	口径 (21.0) 残高 4.5	貼付口縁。口縁端面に刻目。 ヘラ沈線文３条。	(口)ナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ミガキ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石･長(1 ～ 2) ○	黒斑	
35	甕	口径 (15.8) 残高 3.6	折曲口縁。無文。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石･長(1 ～ 3) ○		
36	壺	残高 2.9	ヘラ沈線文７条以上＋斜格子目文。	ナデ	マメツ(ナデ)	淡褐色 褐灰色	石･長(1 ～ 4) ○		9

表 23　ＳＫ 23 出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
37	石鏃	一部欠損	サヌカイト	1.5	1.5	0.3	0.6	凹基無茎式	

表 24　ＳＫ 34 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
38	甕	底径 (8.7) 残高 4.4	わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	赤褐色 灰黄色	石･長(1 ～ 2) ◎		
39	壺	底径 (11.0) 残高 2.9	平底。	マメツ	マメツ	灰褐色 乳橙色	石･長(1 ～ 2) ◎		
40	コシキ	底径 (5.8) 残高 3.5	甕形土器の転用品。底部中央に孔(φ0.6 ～ 1.5cm)あり。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳黄色	石･長(1 ～ 4) ◎		

表 25　ＳＫ 18 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
41	高坏	残高 8.2	脚部片。	ナデ	ナデ (シボリ痕)	にぶい橙色 橙色	石･長(1 ～ 3) ◎		

表 26　ＳＸ出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
42	甕	口径 (18.2) 残高 9.7	折曲口縁。口縁下端面に刻目。胴部にヘラ沈線文８条＋刺突文１列。	口ナデ 胴ハケ (7 ～ 8本/cm)	マメツ (ミガキ)	褐色 乳橙色	石･長(1 ～ 2)金 ◎	SX1	10
43	甕	口径 (18.3) 残高 10.4	折曲口縁。無文。	口ヨコナデ 胴板ナデ	口ヨコナデ 胴ミガキ	黒褐色 褐色	石･長(1 ～ 3)金 ◎	SX1 黒斑	
44	壺	口径 (22.4) 残高 5.8	大型品。口縁端面にヘラ沈線文１条→刻目。頸部にヘラ沈線文４条。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石･長(1) 赤色酸化土粒 ◎	SX1	10
45	壺	口径 (12.7) 残高 6.3	広口壺。ヘラ沈線文３条。	口ヨコナデ 頸ハケ(7 ～ 8本/cm) →ミガキ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石･長(1 ～ 2) ○	SX1	10
46	甕	底径 (9.0) 残高 9.2	厚みのある上げ底。	胴ミガキ 底ナデ	胴ミガキ 底ナデ	赤褐色 赤褐色	石･長(1 ～ 3) ◎	SX1	
47	壺	底径 8.2 残高 3.3	平底。	ミガキ	ナデ	淡褐色 黄灰色	石･長(1 ～ 3) ◎	SX1	
48	コシキ	底径 7.2 残高 5.7	壺形土器の転用品。平底。円孔(φ1.6cm)。	ハケ(7本/cm)	ナデ	赤褐色 褐色	石･長(1 ～ 6)金 ◎	SX1	
49	甕	口径 (11.8) 残高 3.8	貼付口縁。口縁端面に刻目。ヘラ沈線文３条。	口ヨコナデ 胴ミガキ	口ヨコナデ 胴ナデ	暗褐色 淡褐色	石･長(1 ～ 2) ○	SX3 黒斑	
50	壺	残高 5.0	「M」字状凸帯。凸帯上に連鎖状刻目あり。ヘラ沈線文７条＋２条。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石･長(1 ～ 2) 赤色酸化土粒 ◎	SX2	10
51	壺	底径 (6.4) 残高 5.3	上げ底。	胴マメツ 底ハケ	マメツ	淡褐色 灰褐色	石･長(1 ～ 2) ◎	SX2	
52	甕	底径 (6.8) 残高 2.8	平底。	ハケ (4 ～ 5本/cm)	ナデ(マメツ)	赤褐色 黒色	石･長(1 ～ 3)金 ◎	SX4	

表 27　ＳＢ３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
53	坏蓋	口径 (10.8) 器高 3.9	扁平な天井部。口縁端部は尖り気味。天井部は回転ヘラ切り未調整。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	カマド	10

表 28　掘立２出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
54	甕	残高 6.0	折曲口縁。胴部に押圧凸帯文１条。口縁端面に刻目。	ヨコナデ	口マメツ 胴ミガキ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石･長(1 ～ 2) ◎	SP④	
55	坏身	たちあがり径 (11.8) 残高 2.4	たちあがり端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密 ◎	SP④	
56	坏身	たちあがり径 (14.0) 残高 3.3	たちあがり端部は欠損。	た回転ナデ 天回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP①	

表 29　掘立３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
57	坏身	たちあがり径 (10.4) 底径 (7.6) 器高 4.2	たちあがり端部は尖り気味。平底。1/4の残存。	た回転ナデ 底回転ヘラケズリ (1/3)	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	密 ◎	SP⑥ 自然釉	10

表 30　掘立 8 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
58	坏身	たちあがり径 (12.2) 残高 2.4	たちあがり端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP②	
59	坏身	残高 1.9	たちあがり端部は尖り気味。小片。赤焼け土器。	回転ナデ	回転ナデ	赤橙色 赤橙色	密 ◎	SP⑤	

表 31　掘立 11 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
60	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.7	口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP⑥	
61	坏蓋	口径 (14.2) 残高 2.6	口縁端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP⑥	
62	坏蓋	口径 (12.0) 残高 3.1	口縁端部は尖る。赤焼け土器。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	密 ◎	SP⑥	
63	坏身	たちあがり径 (12.0) 残高 2.8	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP⑧	
64	坏身	たちあがり径 (11.0) 残高 2.5	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP⑥	
65	高坏	口径 (10.6) 残高 4.0	坏部中位に沈線 1 条。焼け歪みあり。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎	SP⑥	
66	甕	口径 (16.8) 残高 3.3	口縁部は上内方へ肥厚。赤焼け土器。	回転ナデ	回転ナデ	橙色 橙色	密 ◎	SP⑧	
67	椀	口径 (13.4) 残高 5.7	口縁端部は丸い。	口ヨコナデ 体ケズリ→ナデ	ヨコナデ ナデ	橙色 淡黄色	砂粒 ◎	SP①	
68	壺	口径 (14.9) 残高 2.5	短く外反する口縁部。	口ヨコナデ 頸ミガキ	口ヨコナデ 頸ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1 ～ 2) ◎	SP②	

表 32　掘立 11 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
69	刀子	不明	鉄	2.1	1.4	0.5	2.6	SP⑥	

表 33　掘立 1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
70	甕	底径 (6.0) 残高 3.0	上げ底。	ミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1 ～ 3) ◎	SP③	

表 34　掘立 13 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
71	坏身	たちあがり径 (11.6) 器高 3.6	たちあがり端部は尖り気味。平底。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP②	10
72	甕	底径 (10.6) 残高 6.5	わずかに上げ底。	ミガキ	ナデ(マメツ)	にぶい褐色 橙色	石・長(1 ～ 4) ○	SP⑨	
73	甕	底径 (6.0) 残高 4.2	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	灰褐色 にぶい黄褐色	石・長(1 ～ 3) ○	SP⑨	

表 35　掘立 13 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
74	板状剥片	—	結晶片岩	7.3	4.7	1.2	72.8	SP⑩	
75	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	1.8	1.4	0.4	0.6	SP⑩、平基無茎式	

表 36　掘立 14 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
76	甕	残高 2.8	貼付口縁。口縁端面に刻目。ヘラ沈線文 3 条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1 ～ 2) ◎	SP⑨	
77	坏身	たちあがり径 (12.4) 残高 3.6	たちあがり端部は尖り気味。	た回転ナデ 底回転ヘラケズリ(1/2)	回転ナデ	灰オリーブ色 灰黄色	密 ◎	SP⑩	
78	壺	残高 7.4	扁球形の胴部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP④	

表 37　掘立 10 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
79	坏身	たちあがり径 (14.0) 残高 3.5	たちあがりは短く内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP⑤	
80	甕	底径 (6.6) 残高 4.6	平底。	ハケ(6本/cm)	マメツ	橙色 灰白色	石・長(1 ～ 3) ◎	SP③	

表 38　掘立 4 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
81	甕	残高 3.2	折曲口縁。ヘラ沈線文３条。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1 ～ 2) ◎	SP④	

表 39　ＳＤ出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
82	甕	口径 (25.6) 残高 4.4	折曲口縁。口縁端面に刻目。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石・長(1 ～ 3) ◎	SD3	
83	甕	口径 (16.4) 残高 2.3	口縁端面に刻目。胴部にヘラ沈線文１条。	ヨコナデ	マメツ	にぶい黄橙色 淡黄色	石・長(1 ～ 3) ○	SD3	
84	甕	底径 (7.2) 残高 4.4	わずかに上げ底。	ナデ	マメツ(ミガキ)	にぶい赤褐色 橙色	石・長(1 ～ 5) ○	SD4	
85	壺	底径 (6.0) 残高 3.4	平底。	ナデ	ナデ	黄褐色 灰白色	石・長(1 ～ 2) ◎	SD4	
86	甕	底径 (7.8) 残高 3.9	わずかに上げ底。	ナデ・ミガキ	ナデ(マメツ)	にぶい赤褐色 にぶい褐色	石・長(1 ～ 3) ◎	SD12	
87	坏身	たちあがり径 (8.9) 残高 1.7	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SD4	
88	甕	残高 2.3	波状文＋沈線＋波状文３条以上。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SD7	
89	提瓶	口径 (4.8) 残高 3.8	口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SD7	
90	鍋	口径 (24.0) 残高 5.2	口縁部は短く外反。口縁端部は「コ」字状。瓦質。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○	SD7	

表 40　ＳＫ 17 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
91	坏蓋	口径 (12.9) 残高 2.6	口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
92	坏身	たちあがり径 (11.0) 残高 3.7	たちあがり端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
93	椀	口径 (9.2) 残高 3.9	口縁端部は尖り気味。	ミガキ	マメツ	橙色 橙色	密 ◎		
94	高坏	口径 (21.2) 残高 3.0	口縁端部は丸く仕上げる。	ナデ	ヨコナデ ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1 ～ 3) ○		
95	壺	底径 (8.3) 残高 3.9	平底。	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1 ～ 6) ◎		

表 41　ＳＫ 25 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
96	甕	口径 34.7 残高 62.8	瓦質。東播系。	㊐回転ナデ ㊥正格子叩き	㊐回転ナデ ㊥指頭痕	淡灰色 淡灰色	密 ◎		10

表 42　柱穴出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
97	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.8	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP229	
98	坏蓋	残高 1.4	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP230	11
99	坏身	たちあがり径 (12.2) 残高 2.5	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎	SP237	

柱穴出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
100	坏身	たちあがり径 (11.6) 残高 3.0	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP229	
101	坏身	たちあがり径 (14.0) 残高 4.2	たちあがり端部は尖り気味。	㊟回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎	SP337 自然釉	11
102	壺	口径 (18.8) 残高 4.6	口縁端面にヘラ沈線文１条。	マメツ(ミガキ)	ナデ	黄灰色 灰色	石・長(1 ～ 2) ◎	SP137 黒斑	
103	壺	口径 (13.8) 残高 6.6	短く外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳黄色 黄灰色	長(1) ◎	SP239	
104	甕	残高 5.3	ヘラ沈線文２条以上。	ナデ	ナデ(ミガキ)	灰黄色 灰褐色	石・長(1) ◎	SP405	
105	甕	底径 (8.2) 残高 3.9	平底。	ハケ(5本/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1) ◎	SP254	

表 43　第Ⅴ層出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
106	甕	口径 (16.0) 残高 5.8	折曲口縁。口縁端面に刻目。 ヘラ沈線文２条(2条1組)。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ(6本/cm)	㊐ハケ(6本/cm) ㊥ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1 ～ 3)金 ◎	黒斑	11
107	甕	口径 (18.3) 残高 5.4	折曲口縁。口縁端面に刻目。 ヘラ沈線文３条(2条1組)。	㊐ナデ ㊥ハケ	ナデ(ミガキ)	にぶい黄橙色 にぶい褐色	石・長(1 ～ 2) ◎	黒斑	11
108	甕	口径 (20.7) 残高 2.9	折曲口縁。口縁端面に刻目。 ヘラ沈線文３条(2条1組)。	ナデ	ナデ	浅黄色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		
109	甕	口径 (21.2) 残高 2.8	折曲口縁。口縁端面に刻目。 ヘラ沈線文４条(3条1組)。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長(1 ～ 3) ◎		
110	甕	口径 (24.0) 残高 3.9	折曲口縁。口縁上端面に刻目。 ヘラ沈線文４条(2条1組)。	ナデ	マメツ	橙色 にぶい黄褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
111	甕	口径 (24.9) 残高 3.9	折曲口縁。口縁端面に刻目。 ヘラ沈線文４条(2条1組)。	ナデ	ハケ(5本/cm)	橙色 にぶい黄褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		11
112	壺	残高 9.5	大型品。内面凸帯。口縁端面にヘラ沈線文２条＋刻目、頸部にヘラ沈線文４条。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長(1 ～ 6) ○		
113	壺	残高 4.6	大型品。内面凸帯(注口状)。口縁端面にヘラ沈線文１条+刻目、頸部にヘラ沈線文２条。	ミガキ	ミガキ	橙色 橙色	石・長(1 ～ 2)金 ◎		
114	壺	口径 (15.8) 残高 4.4	ヘラ沈線文１条。	ハケ(マメツ)	マメツ	褐灰色 褐灰色	石・長(1 ～ 3) ◎		
115	壺	口径 (13.8) 残高 5.1	短く外反する口縁部。	ヨコナデ ハケ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1 ～ 3) ○		
116	壺	口径 (14.8) 残高 3.0	短く外反する口縁部。	ハケ(7本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) ◎		
117	壺	口径 (12.6) 残高 6.1	直立する頸部。ヘラ沈線文１条。	ハケ(4本/cm)	ミガキ	乳白色 乳白色	長(1 ～ 2) ○		
118	壺	口径 (14.9) 残高 6.8	直立する頸部。ヘラ沈線文２条。	ハケ(7本/cm) →ミガキ	㊐ミガキ ㊤ナデ	褐色 黄褐色	石(1 ～ 2)金 ◎		
119	壺	口径 (13.4) 残高 5.0	直立する頸部。ヘラ沈線文４条以上。	ミガキ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1 ～ 2)金 ◎		
120	壺	口径 (15.8) 残高 9.1	長い口頸部。ヘラ沈線文３条＋刺突文２列。内面凸帯。	ミガキ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1)金 ◎		11
121	壺	残高 6.2	内面凸帯。ヘラ沈線文３条以上＋竹管文２列。	工具ナデ	ミガキ	乳黄色 乳黄色	石・長(1 ～ 3) ◎		11
122	壺	口径 (12.6) 残高 5.1	内面凸帯。 口縁部に円孔２ヶ(φ0.4cm)。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1 ～ 3) ◎		11
123	壺	残高 8.0	ヘラ沈線文５条。	ミガキ	ミガキ	乳黄色 乳黄色	長(1)金 ◎		11
124	壺	残高 4.2	貼付凸帯１条。	ナデ	ミガキ	暗褐色 赤褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
125	壺	底径 (7.9) 残高 14.9	連鎖状刻目凸帯。ヘラ沈線文４条＋３条。	ミガキ	ナデ	乳白色 褐色	石・長(1 ～ 4)金 ◎	黒斑	11

第Ⅴ層出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
126	壺	残高 3.6	ヘラ沈線文３条＋竹管文３列。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～2)金 ◎		11
127	壺	残高 6.4	ヘラ沈線文３条(3条1組)。	ハケ (5～6本/cm)	ナデ	褐色 乳褐色	石・長(1～3) ○		
128	壺	残高 10.9	扁球形の胴部。	ミガキ	ナデ(ミガキ)	赤橙色 赤橙色	石・長(1～2)金 ◎		
129	壺	残高 19.4	大型品。凸帯上にヘラ沈線文４条。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	赤橙色 赤橙色	石・長(1～5)金 ◎		
130	鉢	口径 (23.0) 残高 7.6	折曲口縁。	ハケ (3～4本/cm)	マメツ	にぶい赤褐色 にぶい橙色	石(1)砂粒 ◎		
131	蓋	つまみ径 4.9 残高 4.8	つまみ上面は凹む。	ナデ	ナデ(マメツ)	乳橙色 乳橙色	石・長(1～3) ◎		11
132	蓋	つまみ径 5.4 残高 3.9	つまみ上面は凹む。	ナデ	ミガキ	灰白色 暗灰色	石・長(1～2) ◎		11
133	蓋	口径 (23.0) 残高 6.5	口縁端部は「コ」字状。	ハケ	ミガキ→ナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1) ◎		11
134	蓋	口径 (20.2) 残高 5.6	口縁端部は尖り気味に丸い。	ナデ(ミガキ)	板ナデ	橙色 橙色	石(1～2) ◎	煤付着	
135	甕	底径 (6.8) 残高 7.6	平底。	マメツ	マメツ	灰褐色 にぶい黄褐色	石・長(1～3) ○		
136	甕	底径 (8.2) 残高 6.0	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	赤褐色 灰黄褐色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
137	甕	底径 (7.3) 残高 4.3	平底。	ハケ(6本/cm)	マメツ	橙色 淡黄色	石・長(1～2) ◎		
138	甕	底径 (6.4) 残高 4.0	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰黄色	石・長(1～3) ◎		
139	甕	底径 (6.2) 残高 2.5	わずかに上げ底。	ハケ(8本/cm)	マメツ	赤橙色 灰黄色	石・長(1～3) ◎		
140	甕	底径 (7.8) 残高 4.5	わずかに上げ底。	ナデ	マメツ	灰黄色 にぶい黄色	石・長(1～3) ◎		
141	甕	底径 (6.8) 残高 2.8	平底。	マメツ	マメツ	橙色 灰黄色	石・長(1)金 ◎		
142	甕	底径 (6.6) 残高 4.0	丸味のある平底。	マメツ	マメツ	赤褐色 乳黄色	石・長(1～2)砂粒 ◎		
143	甕	底径 (7.4) 残高 6.2	平底。	ハケ→ナデ	ナデ	赤橙色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
144	壺	底径 9.1 残高 5.2	わずかに上げ底。	ハケ(9～10本/cm) →ミガキ	工具ナデ ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
145	壺	底径 (10.0) 残高 4.0	わずかに上げ底。	ハケ(8～9本/cm) →ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1～3) ◎		
146	壺	底径 (9.9) 残高 4.3	平底。	マメツ(ハケ)	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
147	壺	底径 (7.7) 残高 4.1	わずかに上げ底。	ハケ(6本/cm) →ミガキ	ミガキ	乳橙色 黒褐色	長(1～2)金 ◎	黒斑	
148	壺	底径 (9.0) 残高 5.4	平底。	マメツ	マメツ	灰白色 黒色	石・長(1～3) ◎		
149	壺	底径 (8.8) 残高 3.7	平底。	マメツ	ミガキ	灰白色 灰褐色	長(1) ◎	黒斑	
150	壺	底径 (10.6) 残高 3.4	平底。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	

表 44　第Ⅴ層出土遺物観察表　　石製品　　(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
151	石庖丁	1／2	結晶片岩	6.2	4.7	0.8	34.8		12
152	石庖丁	1／2	結晶片岩	7.8	5.6	0.7	48.4	未成品	

第Ⅴ層出土遺物観察表　　石製品　　(2)

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
153	石庖丁	1／2	結晶片岩	5.2	4.9	0.5	17.9	未成品	
154	石庖丁	1／2	結晶片岩	8.6	4.3	0.8	44.9	未成品	12
155	扁平片刃石斧	ほぼ完形	結晶片岩	8.0	2.9	1.2	55.2		12
156	扁平片刃石斧	3／4	結晶片岩	11.4	3.7	1.4	120.8	未成品	
157	扁平片刃石斧	1／2	結晶片岩	7.0	5.8	1.4	109.1	未成品	
158	扁平片刃石斧	1／2	結晶片岩	4.7	0.9	1.2	5.7		
159	柱状片刃石斧	1／2	結晶片岩	12.1	1.0	2.6	55.7	未成品	12
160	伐採斧	小片	結晶片岩	3.5	3.9	1.1	16.5		
161	伐採斧	小片	結晶片岩	6.0	5.8	1.3	74.6		12

表 45　第Ⅳ層出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
162	坏身	たちあがり径 (11.2) 器高 3.6	たちあがり端部は尖り気味。1／4の残存。	㊟回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ (1/3)	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		12
163	高坏	残高 2.4	脚部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
164	高坏	底径 (16.0) 残高 1.9	脚裾端面に凹線1条。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
165	甕	残高 2.8	口縁部は上内方へ肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
166	高坏	残高 9.2	柱部は面取り。	ハケ→ミガキ ケズリ	マメツ	橙色 淡黄色	密 ◎		12
167	甕	残高 4.8	瓦質土器。肩部片。	格子叩き	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 46　第Ⅲ層出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
168	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.4	口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密 ◎		
169	坏蓋	口径 (12.8) 残高 2.4	口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
170	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.2	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
171	坏身	たちあがり径 (12.2) 残高 3.1	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
172	坏	口径 (12.8) 残高 2.7	口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
173	坏	口径 (14.0) 残高 3.8	口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
174	坏	底径 (7.2) 残高 1.7	円盤高台状の底部。底部外面に回転ヘラキリ痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
175	椀	口径 (10.0) 残高 4.0	内湾する体部。口縁端部は丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
176	瑤	残高 3.1	内湾気味の口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
177	甕	口径 (21.4) 残高 5.9	内湾口縁。口縁端部は内傾。	ハケ(5本/cm) →ヨコナデ	㊐ハケ(5本/cm) ㊤ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石･長(1～3) ◎		

表 47　地点不明出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態･施文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
178	甕	口径 (24.4) 残高 8.5	折曲口縁。ヘラ沈線文4条(2条1組)。	㊐ヨコナデ ㊥ミガキ	マメツ	乳褐色 乳色	石･長(1～2) ◎		
179	甕	口径 (28.8) 残高 14.3	折曲口縁。無文。	㊐ヨコナデ ㊥ハケ(12本/cm)	ナデ	黄灰色 灰色	石･長(1～4) ◎	黒斑	

地点不明出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
180	壺	口径 (13.8) 残高 8.2	貼付凸帯。凸帯上にヘラ沈線文1条あり。	口ハケ 頸ミガキ	口ミガキ 頸ヨコナデ・ミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～2) ◎		
181	壺	口径 (13.7) 残高 5.1	直立する頸部。 口縁端部は「コ」字状。	マメツ	マメツ	乳灰色 乳灰色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
182	壺	残高 5.3	ヘラ沈線文5条以上。	ミガキ	マメツ	黄灰色 黄色	石・長(1～2) ◎		
183	甕	底径 (7.6) 残高 5.2	上げ底。	マメツ	マメツ	赤橙色 乳黄色	石・長(1～3) ◎	煤付着	
184	甕	底径 6.4 残高 3.4	平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	暗灰色 褐色	石・長(1～2) ◎		
185	壺	底径 (7.4) 残高 2.6	平底。	ナデ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1～3) ○		
186	壺	底径 (6.4) 残高 3.4	平底。	ナデ	ナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～2) ◎		
187	壺	底径 (10.7) 残高 2.8	平底。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	石・長(1～3) ◎		
188	壺	底径 (9.0) 残高 4.0	平底。	ヨコナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1～3) ◎		
189	壺	底径 8.2 残高 5.5	平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	12
190	コシキ	底径 6.2 残高 8.8	壺形土器の転用品。上げ底。 円孔(φ1.5cm)。	胴ミガキ 底ナデ	胴ミガキ 底ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	12
191	坏身	たちあがり径 (12.0) 残高 2.4	たちあがり端部は尖り気味。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
192	坏身	たちあがり径 (12.2) 残高 2.8	たちあがり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
193	提瓶	口径 (6.8) 残高 5.9	口縁部中位に沈線状の凹みが巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		12
194	甑	残高 5.1	把手部。断面楕円形。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		12
195	碗	残高 2.2	肥前系陶器。 内面に刷毛目文様あり。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰白色	密 ◎	胎土： 灰黄白色	

表48　地点不明出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
196	石庖丁	2／3	結晶片岩	8.9	3.4	0.9	34.2	未成品	
197	石錘	ほぼ完形	砂岩	8.7	7.3	1.2	138.2		12

第Ⅲ章　調査の成果と課題

調査では、弥生時代から近世までの集落関連遺構や遺物を確認した。検出した遺構は竪穴住居３棟、掘立柱建物15棟、溝15条、土坑25基、柱穴457基、土器溜まり４基、倒木址14基である。ここでは、集落の変遷や出土遺物についてまとめを行う。

第１節　集落変遷

（１）弥生時代

弥生時代では、前期末から中期初頭に時期比定される溝１条と土坑22基を検出した。このうち、土坑は平面形態で四種類（円形３基・楕円形15基・長方形２基・不定形２基）に分類される。規模が最大の土坑はSK34で、床面積4.25㎡を測る。なお、床面積0.60 ～ 1.20㎡の土坑が９基あり、全体の約４割を占める。断面形態は大半の土坑が逆台形状を呈しているが、３基の土坑（SK5・15・24）は筒状を呈しており、形態の特徴より、これら３基は貯蔵穴の可能性をもつ。土坑内からは弥生土器や石器が出土しているが、完形となる土器の出土はなく、破片ばかりである。石器は石鏃や磨石、スクレイパーのほか河原石が出土した。なお、土坑内から、穀物類や種実等は出土していない。

周辺の調査では、五楽遺跡１次調査や古市遺跡、下苅屋遺跡等で当該期の土坑が数多く発見されている。この中には貯蔵用や墓としての性格をもつものや、土器焼成に使用されたと思われる土坑が含まれている。また、サヌキトイドの剥片が大量に出土した土坑が数基あり、これらの土坑は石器製作に関連するものと考えられている。このように、調査地を含む小野地区一帯には弥生前期集落が広範囲に営まれていたことがわかる。

このほか、弥生時代中期から後期では他の時代の遺構や包含層中より該期の遺物が出土している。なお、土坑SK18からは弥生時代後期後半期の土器が出土している。

（２）古墳時代

古墳時代では竪穴住居３棟と掘立柱建物15棟のほか、13条の溝と土坑１基を検出した。竪穴住居は古墳時代後期後半から末に時期比定され、切り合いより竪穴住居が掘立柱建物に先行する。平面形態は全て長方形を呈し、規模は長さ4.4 ～ 4.7m、幅4.0 ～ 4.2mを測り、SB3には住居北壁中央部に造り付けカマドを付設している。一方、15棟の掘立柱建物は建物主軸方位により三種類に分類され、真北方位の建物２棟、真北より西側に方位を振る建物３棟、真北より東側に方位を振る建物10棟となる。建物は側柱構造が大半であるが、２棟の建物（掘立13・14）には束柱と思われる柱穴２基を各々で検出した。建物の内訳は、１間×２間規模の建物が２棟、２間×２間規模の建物５棟、２間×２間以上の建物１棟、２間×３間規模の建物５棟、３間×１間以上の建物１棟、４間×１間以上の建物１棟である。なお最大規模の建物は掘立14で床面積19.91㎡を測り、最小規模は掘立15で9.39㎡である。建物を構成する柱穴は平面形態が円形または楕円形を呈し、柱穴掘り方径0.29 ～ 1.26m、柱痕径は15 ～ 20㎝を測る。また、束柱柱穴は平面形態が円形を呈し、柱穴掘り方径0.20 ～ 0.45㎝、柱痕径10 ～ 15㎝を測る。なお、検出した建物のうち掘立2と掘立3は同位置に構築されており、検出状況から２棟は建て替えが施された建物である。

建物を構成する柱穴内からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が少量出土した。出土遺物の特徴や

柱穴埋土で判断すると、５棟の建物（掘立3 ～ 7）は他の10棟の建物より構築時期にやや新しい傾向がみられる。しかしながら、出土遺物には多少の時期幅が認められるものの、飛鳥編年飛鳥１期に時期比定されるものであり、古墳時代終末期、７世紀第１四半期の遺物と考えられる。よって、検出した全ての掘立柱建物は７世紀第１四半期以降に構築されたものといえる。調査地近隣の遺跡はもとより、調査地からおよそ２㎞離れた調査地南西部にある平井遺跡からも古墳時代後期から終末期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、小野地区一帯には古墳時代後期集落が継続的に営まれていたことがわかる。

（３）古　代

古代の遺構は未検出であるが、包含層や地点不明遺物の中に飛鳥時代や奈良時代、平安時代の遺物が含まれている。周辺では五楽遺跡３次調査や古市遺跡、下苅屋遺跡において飛鳥時代から奈良時代の遺物が出土した流路が検出されたほか、古市遺跡２次調査や上苅屋遺跡３次調査では平安期の掘立柱建物が複数検出されており、今回の調査における出土品は、近隣地域に存在する古代集落に関連する遺物といえよう。

（４）中近世

中世では、土坑１基を検出した。SK25は径0.74ｍを測る円形土坑で、土坑内からは甕の破片が折り重なる状態で出土したが、本来は埋納されていたものと推測される。甕の特徴より、SK25は13世紀代の遺構と考えられる。近世では、溝１条（SD1）を検出した。幅0.30 ～ 0.80ｍを測る断面「Ｕ」字状を呈する溝で、溝内からは江戸時代の土師器片や陶磁器片が出土している。周辺では、五楽遺跡１次調査において土壙墓が検出されているほか、上苅屋遺跡３次調査では江戸時代前期の石組井戸などが発見されている。これらのことから、小野地区には中近世段階においても集落が営まれていたことがわかる。

第２節　出土遺物

調査では、弥生時代前期末から中期初頭に時期比定される土器が数多く出土した。器種構成は甕形土器や壺形土器、鉢形土器があるが、この中には焼成後に底部穿孔を施した所謂「コシキ」形土器が含まれている。施文をみると、甕形土器や壺形土器に沈線を施すものが多数ある。沈線はヘラ状工具や櫛状工具により施されているが、複数のヘラ状工具（2条1組、3条1組）を使用して施文された土器を数点確認した。また、壺形土器の胴部には「M」字状の凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加えた後に刻目を施す「連鎖状刻目文」をもつものが数点出土している。このほか、石器では包含層資料ではあるが、製作途中に破損・廃棄したと思われる敲打や研磨段階の未成品が出土している。前述した古市遺跡ではサヌキトイドの剥片のほか未成品が多数出土しており、今回出土した未成品も石器製作を裏付ける資料といえよう。

今回の調査では、弥生時代前期はもとより古墳時代後期～終末期、さらには古代から近世における各時期の遺構や遺物を確認した。近年の調査・研究の結果、小野地区一帯は地区北部の丘陵上で操業した窯址で生産された須恵器を松山平野内へ運搬、供給するための集積地であったとの指摘がある。今回検出した掘立柱建物群は、須恵器の運搬や供給に関連する施設の可能性があり、調査地が須恵器供給に関連する集落であった可能性が考えられる。今後、建物の分布や構造等を整理・検討し、小野地区一帯における古墳期の集落の広がりや構造及び性格解明が急務となる。

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM２		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100Ｆ		

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒ネガフィルムを使用しているが、一部はカラーリバーサルフィルムでも撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーＳ 240㎜Ｆ5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス・エクタクロームEPP

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．製版：写真図版175線

印刷：オフセット印刷

用紙：マットコート　76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～19　　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

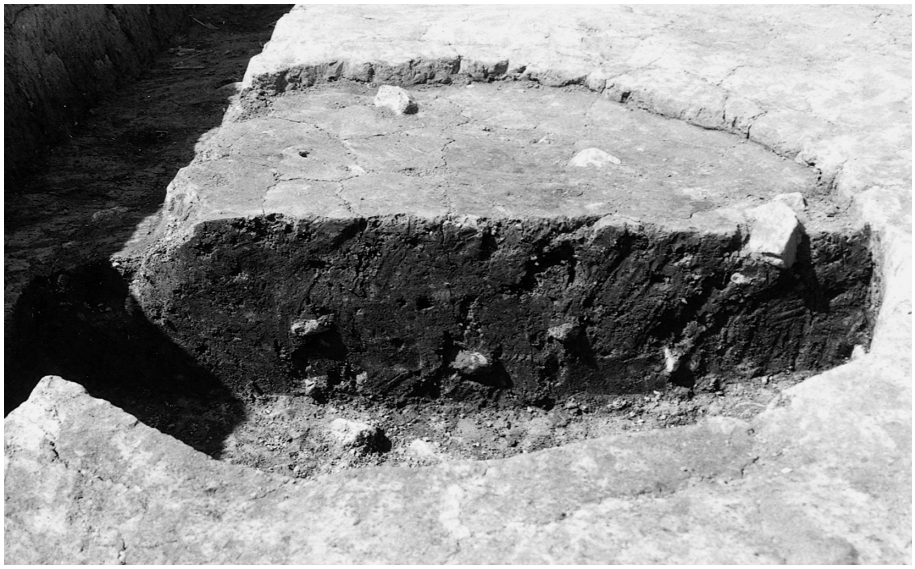
１．調査地全景（北より）

２．調査地の現況（南西より）

１．1区完掘状況（北東より）

１．2区完掘状況（南西より）

１．1区南壁土層
（北より）



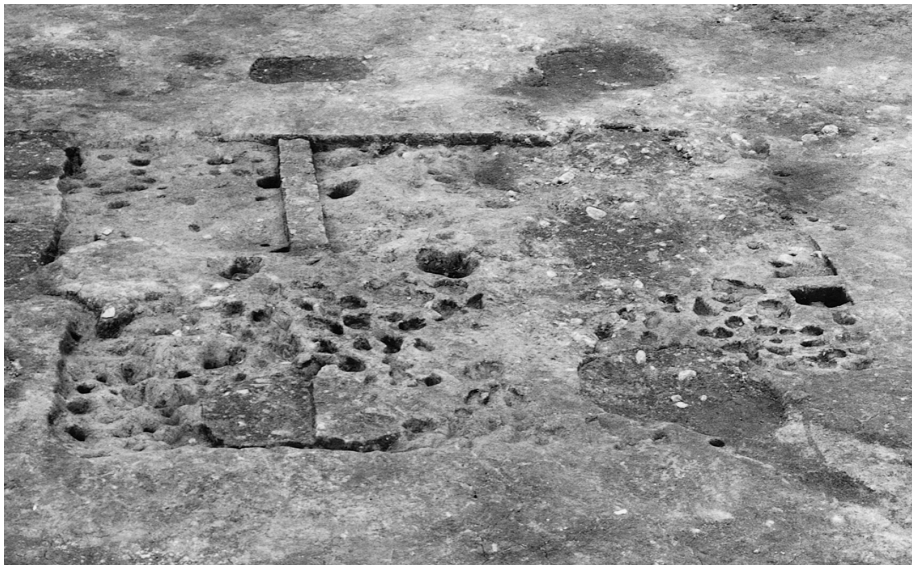
２．SK5検出状況
（南より）

３．SK24検出状況
（北より）

１．SK21検出状況
（南より）

２．SK11検出状況
（南東より）

３．SK23検出状況
（東より）



１．SB3検出状況
（西より）

２．SB3カマド検出状況
（南より）

３．掘立13検出状況
（北東より）

１．掘立13 SP⑥
（南より）

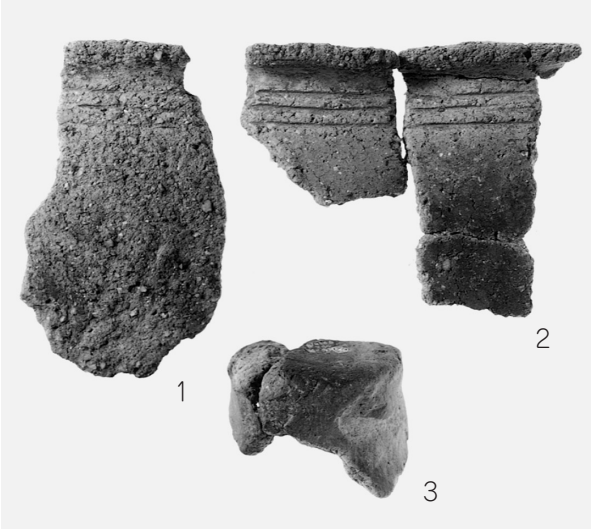
２．掘立14検出状況
（北東より）

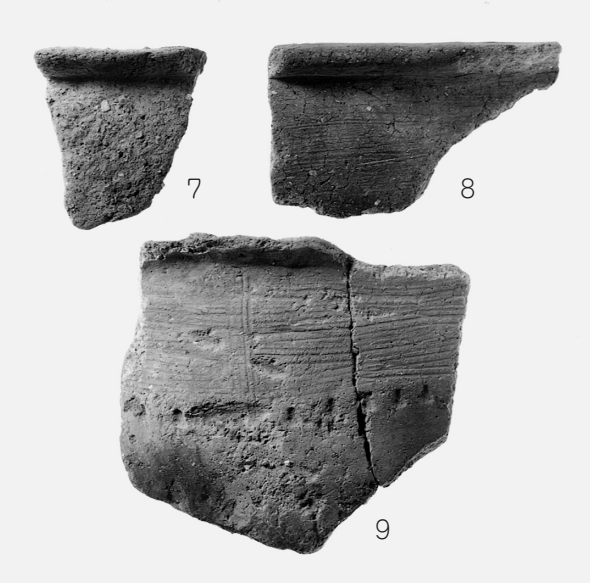
３．掘立14 SP①
（西より）

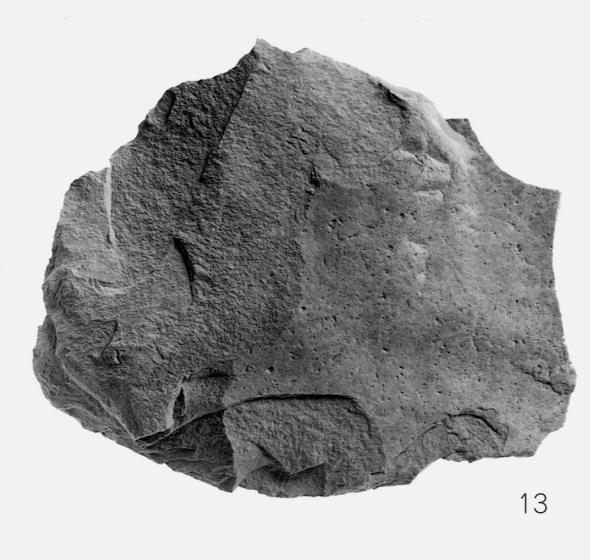
１．SD4断面
（東より）

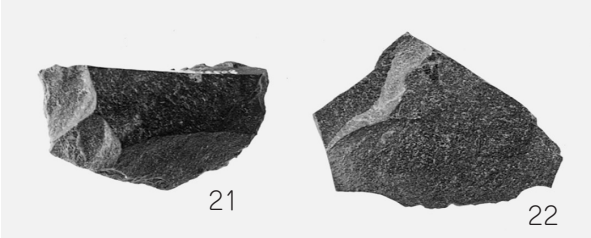
２．SK25検出状況
（南より）

３．現地説明会風景
（西より）



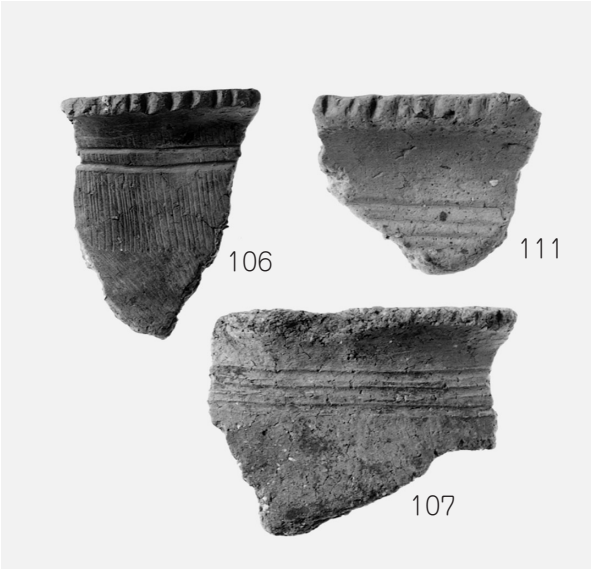


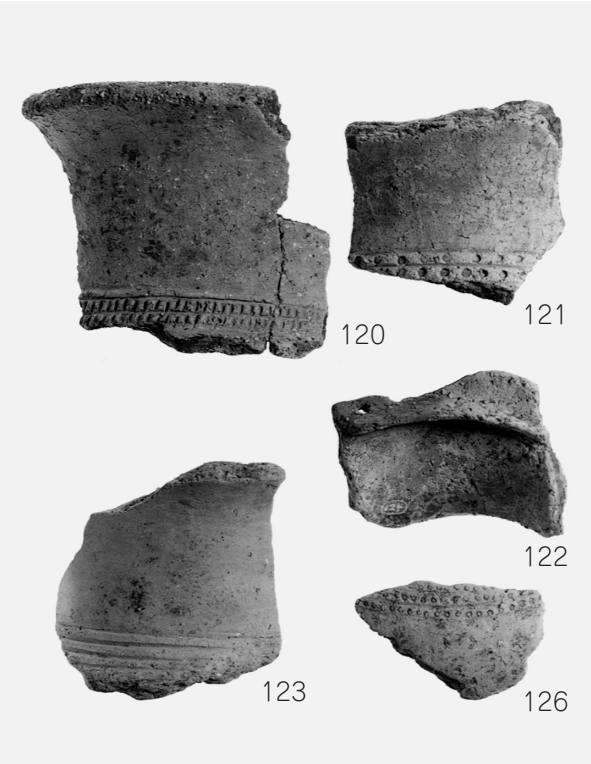


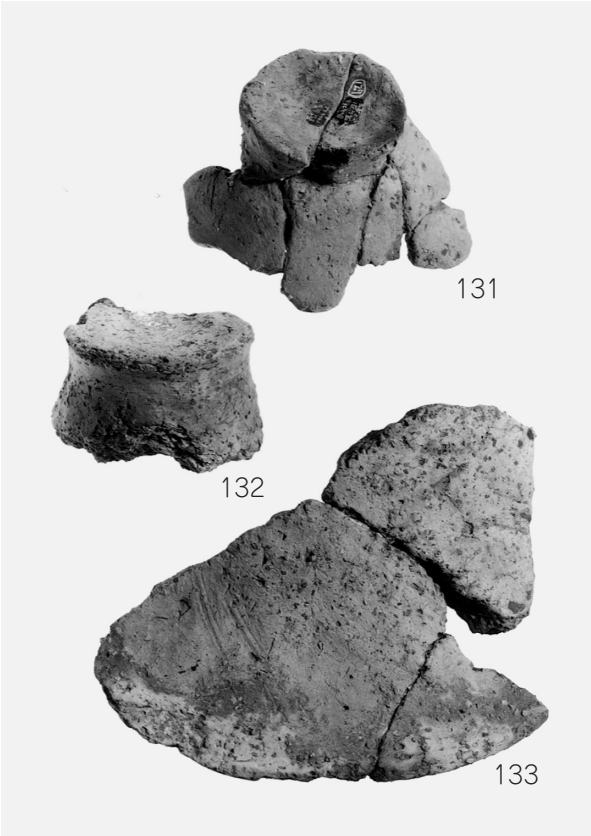


１．出土遺物（SD2：1 ～ 3、SK24：7 ～ 9、SK21：12・13、SK1：19 ～ 22、SK29：30、SK23：36）

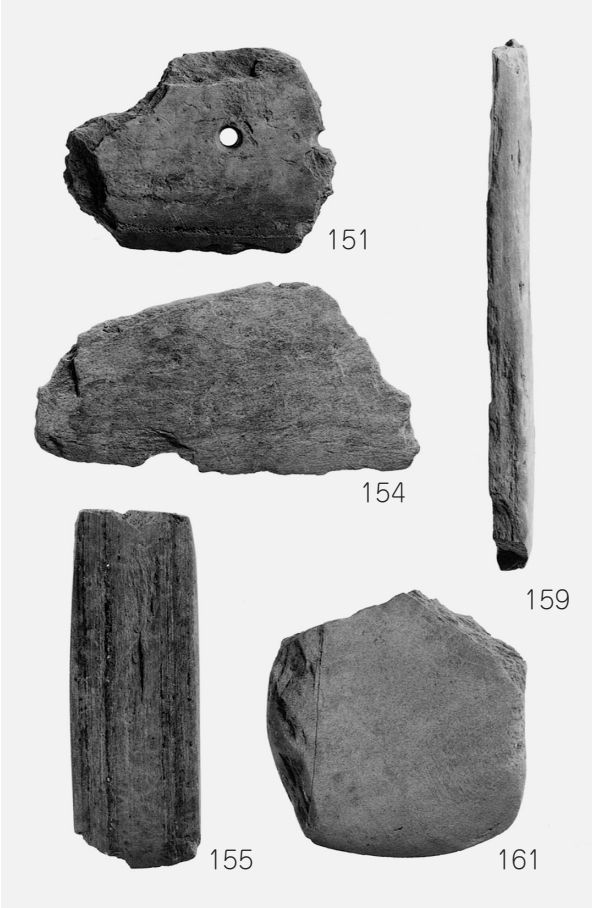
1．出土遺物（SX1：42・44・45、SX2：50、SB3：53、掘立3：57、掘立13：71、SK25：96）

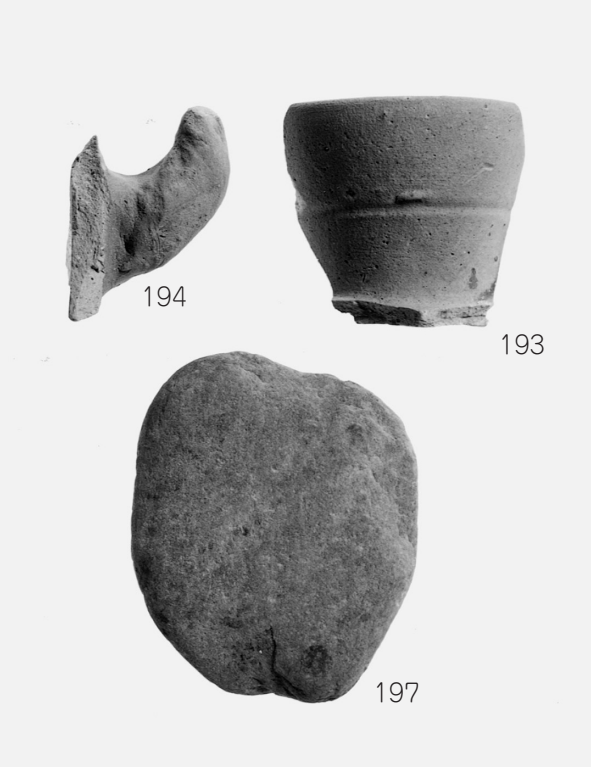






1．出土遺物（柱穴：98・101、第Ⅴ層①：106・107・111・120～123・125・126・131～133）





1．出土遺物（第Ⅴ層②：151・154・155・159・161、第Ⅳ層：162・166、地点不明：189・190・193・194・197）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごうらくいせき
書名	五楽遺跡　－２次調査－
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第156集
編著者名	相原秀仁・宮内慎一・大西朋子
編集機関	財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　松山市南斎院町乙６７番地６　TEL089－923－6363
発行年月日	西暦2012年３月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ごうらくいせき 五楽遺跡２次	ひらいちょう 平井町844番地外5筆	38201	352	33°49′10″	132°49′54″	19990408 ～ 19990730	4,212	知的障害者総合施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五楽遺跡２次	集落	弥生時代 古墳時代 中世 近世	溝・土坑・土器溜り 竪穴住居・掘立柱建物 溝・土坑 土坑 溝	弥生・石 土師・須恵・石 須恵 土師・陶磁器	弥生前期の土坑群を検出 古墳後期の掘立柱建物群を検出

要約	調査では、弥生時代から近世までの遺構・遺物を確認した。弥生時代では、前期末から中期初頭の土坑22基が検出され、調査地や周辺地域に該期の集落が存在していることが判明した。古墳時代では、後期末から終末期と考えられる15棟の掘立柱建物群が検出された。調査地を含む小野地区は、松山東部古窯址群で製作された須恵器の集積地であったのではないかと考えられており、これらの建物群は須恵器供給に関わる施設であった可能性がある。

松山市文化財調査報告書　第156集

五　楽　遺　跡　－２次調査－

平成24年３月21日　発行

発　行　松　山　市　教　育　委　員　会
〒790－0003　松山市三番町六丁目６番地１
TEL（089）948－6605

編　集　財団法人松山市文化･スポーツ振興財団
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地６
TEL（089）923－6363

印　刷　原　印　刷　株　式　会　社
〒799－1594　今治市喜田村１丁目２－１
TEL（0898）48－5511